明治二十七年八月二十五日第三種郵便物認可

November 20th 1907.

Report of the Sericultural Association of Japan.

No. 186.

大日本蠶絲會報

第百八拾六號

本號要目

●汽罐給水用としての水質竝に其改良法に就て　農學士　中村雅次郎
●機械を侮るべからず　京都蠶業講習所技手　服部柳太郎
●軟化病に就て　岩手縣農學校教諭　池田榮太郎
●蟹虹調査　富山縣八尾蠶病豫防事務所長　小菅次男
●京都蠶業講習所現況　農學士　石渡繁胤
●蠶絲業家に對する希望　男爵　澁澤榮一
●一反歩の收葉量一千二百貫匁　宮城縣技師　練木喜三
●銀貨相場と生絲相場　大日本製糸學會長　丹羽敬太郎
●割烹　農學士　石井泰次郎
●桑樹害蟲驅除法　明石弘
●韓國に於ける柞蠶飼養の成蹟　勤業模範場技手　住吉正喜
●韓國の蠶業　在上海東亞同文書院　長岡哲三
●對清蠶業案　渡邊繁三

TOKYO.
The Association,
No. 2 Mitoshirocho, Surugadai, Kanda, Japan.

特許中原式生繭乾燥器

本器は室内に大なる旋風器ありて外氣を迎入しつゝ濕氣を充分排除すると共に繭を乘せたる棚枠も回轉する爲め溫度低き割合に乾燥時間早き事（生繭より全乾燥繭入籠の差替なく六時間内外）は既設諸君の證明せらるゝ處なり

一壹回に壹石五斗入火熱式壹臺金具代金七拾五圓也
一壹回に參石入火熱式壹臺金具代金壹百參拾五圓也
此の參石入は製絲家諸氏繭買入先きに拵付繭止めに使用する時は最も便利なり
一壹回に六石入火熱式壹臺金具代金四百五拾圓也
一壹回に拾貳石入蒸氣式壹臺金具代金九百參拾圓也
一壹回に六拾石入蒸氣式金具代金四千五百圓也
一壹回に六石入上部壹臺金具代金貳百六拾五圓也
此れはアグラ上の部分にてパイプを除きたる者なり

右の外御注文に依り一回に貳百四拾石入本器實地試驗濟に有之候

設明書圖面は御請求次第送呈す

東京市本所區德右衛門町三十四番地

特許中原式乾燥器製作販賣所

長電話浪花二貳二六番電略（ナカ）

埼玉支會會員諸君に囑す

大日本蠶絲會埼玉支會は本月二日第一回品評會奬賞授與の式典を擧行し　總裁伏見宮貞愛親王殿下の台臨を仰き奉る洵に是れ空前の盛事たり

抑も埼玉縣は去八月の洪水に於て桑田の荒廢に歸したるもの極めて多く秋蠶の造作亦渺からず其慘害の激甚なる他府縣の遠く及ぶ處にあらずと稱せらる當業者の意氣銷沈せざらんと欲するも豈得べけんや此秋に際し同支會は春來の計劃に成れる品評會の規模を更に一層擴張して之を開設するは災厄救濟の一策なりと爲し大久保支會長以下會員諸君協力一致奮闘經營僅に三旬を出でざる間に五千五百餘名の會員を增募し出品の蒐集し來るもの亦二千五百有餘點を算す蓋し如此は未だ嘗て前例なき壯擧にして其熱誠や感ずべく其活動や眞に天下の模範たり事や　殿下の台聞に達し深く御滿足に思召され優渥なる令旨を賜はりしも洵に故ありと謂つべし然れども本會豫定の會員を得るには今一臂の奮闘を乞はざるを得ず而かも昨今我生絲市場の光景を觀るに絲價頓に暴落して人心轉た驚然たるものあり蓋し是れ諸君をして小康に安んぜざらしむるの天意ならんか諸君庶幾は泰然自若徐に前途の成行を觀察して能く難境に處し一は以て當業者の志氣を鼓舞し他は以て斯業改善の策を講じ多々益々會員の增募に努めて支會の基礎を愈鞏固にし飽迄諸君が頭初の目的に向て猛進せられんことを至囑々々

明治四十年十一月二十日

大日本蠶絲會

第百八十六號　大日本蠶絲會報

目次

論叢

○汽罐給水用としての水質說に其改良法に就て　農學士　中村雅次郎

○幾減を傷るべからず　京都蠶業講習所技手　服部柳太郎

○軟化病に就て　東京帝國大學農學部教授　池田桑太郎

拾芳

○繭組調査　農學士　小菅次男

○京都蠶業講習所現況（佛文）　農學士　石渡繁胤

門門

○蠶絲業家に對する希望　男爵　澁澤榮一

○一反歩の收業量一千二百貫匁　宮城縣技師　棘木喜三

○銀貨相場と生絲相場　丹羽敬太郎

家庭

○割烹　大日本割烹學會長　石井泰次郎

講筵

○桑樹害蟲驅除法　農學士　明石弘

○秋蠶の話　蠶業講習所技師　土屋泰

心影

○蠶業界の偉人　八田達也君　住吉正喜

遠響

○韓國に於ける柞蠶飼養の成蹟　動物檢疫協會技手　長岡哲三

○韓國の春蠶　在上海東亞同文書院　渡邊繁三

○對清蠶業案

問答

○除沙と殺蛹とに就ての質問並答○湯逐法に就ての質問並答○蠶兒の色澤に就ての質問並答○煙草中毒其他に就ての質問並答○白種と黑種とに就ての質問並答○フォルマリン撒布に就ての質問並答○風穴に就ての質問並答

說林

○繰返に要する蠶種容器の改良私見（中島多郎太）○養蠶慣習に就て（永富久一）

絲況

○横濱市場○里昂市場○紐育市場○上海市場

時報

●會務錄事　埼玉支會品評會　支會職員の囑託　本會職員の出張　新潟支會總會　東北實業大會（會員江他の出張）

●蠶業雜報　佛國製絲檢驗の無效　蠶絲業協議會　埼玉男爵と米國絹業協會への進說　高山研究生會　聯合共進會蠶絲部の獨立

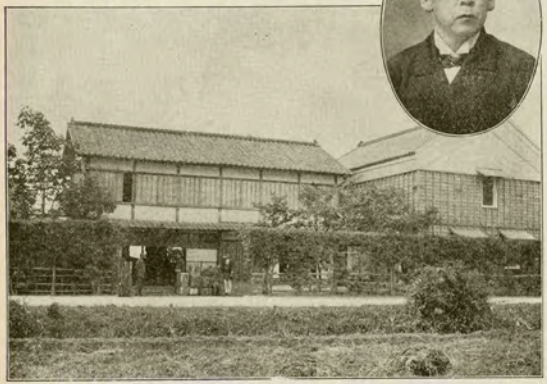
●學園　蠶絲研究　人事錄　支部錄事

去十月四日新潟縣物產陳列館に於て擧行せられたる大日本蠶絲會新潟支會第一回總會參列員

Messieurs les assistants à la première Assemblèe Générale Génerale de notre Succursale de la Préfecture de Niigata qui a eu lieu, le 4 Octobre, dans la salle de l'exposition des produits de Niigataken.

本會學藝委員八田德也君

石和町に於ける入德館及富士魏蠶窟氣象圖



大日本蠶絲會報　第百八拾六號

汽罐給水用としての水質並に其改良法に就て（承前）

學藝部員
東京蠶業講習所技師農學士　中村雅次郎

「スケール」を作る水の改良法

（本論の續き）

「スケール」を豫防する爲に使用する物質に機械的の作用をなすものと化學的の作用をなすものとの二あるが故に、以下之に就て順次記することにしたい。

第一　機械的の作用を爲す物質

此種に屬する物の中全く機械的のみの作用をなすものと物理的若は化學的の作用をも併せ行ふものとの二樣あり、而して前者に屬するもの丶中、普通使用する物質は粘土、亞鉛、「ガラス」碎片、及び澱粉質物等である、而して之等の物質が行ふ機械的作用の要旨は「スケール」を作る物質を自體に附着せしめ汽罐に固着せしめざることなりとす、此作用と汽罐中に於ける水流とにより「スケール」の堆積を防ぐことが出來るのである、而して此種の物質の欠點とする處は前記の結合物質が蒸氣の要部に驅逐され、操作上に困難を來たすにあり、故に以上の中何れを使用する場合にありても、此點に注意を拂ひ斯かる不都合のなき樣にせねばならぬのである。

（イ）粘土　此物質を「スケール」豫防の目的に始めて使用した人はプローズ氏（Pelouze）である、兎も角も良好の豫防劑であるが使用前に善く浸し置き必要丈極めて徐々に加ふる樣に注意しなければ汽罐を過熱する恐れがある。

（ロ）亞鉛屑　此物質は汽罐の鐵板と接觸して電流を起し、電氣機械的の作用により「スケール」豫防の目的を達するのである。

（ハ）滑石　此物質は機械的の作用をなすと同時に、後章に於て記する硅酸「アルカリ」と類似の化學的作用をも併せ行ひて其目的を達するのであるが、使用量は「アラゴン」氏（Aragon）によれば、汽罐水中に含有せる石灰鹽苦土鹽等即「アルカリ」土素鹽量の十分の一の割合にすれば良いのである。

（ニ）「ガラス」碎片　此物質も亦滑石と同く兩樣の作用を行ひ

「スケール」形成の豫防をなすのである。

（ホ）脂肪類、スケール豫防劑として往々此物質を使用する機械學者がある。假令ば一八五四年に「シバー」氏（Sibber）は此目的を以て獣脂と木炭と石墨とを同分量に配合したるものを用ひ、又他の學者は一ケ月一馬力に對し樹脂を三〇瓦の割合に加ふれば良いと云つて居る、然れども脂肪類は其種類の何たるを問はず、之を汽鑵水中に加ふれば、水と鐵板との間に擴散して汽鑵を過熱し破裂の原因をなすことあるが故に、餘り良好の豫防劑ではない。

（へ）澱粉質物　馬鈴薯「キクイモ」の如き澱粉質物を此目的に向て屢々使用することがある、之等澱粉質物は水中に沈澱する石灰鹽、苦土鹽を包被して汽鑵に固着せしめざる樣になす効力を有するのである、而して使用量は一ケ月一馬力に對し一乃至一、五「リートル」の割合にして、毎月一度汽鑵を掃除すれば良いのである。

第一　化學的に作用する物質

其の一　有機物質

機械的の作用をなす物質以外のものにして、各種單寧類等の有機物は複雑なる化學作用を營みて「スケール」豫防の効果を收むるのである、特に炭酸石灰、炭酸苦土等の炭酸「アルカリ」土類鹽を多く含有する水に向け、之等の物質は効力も多く且つ必要なのである。

（イ）單寧類　單寧酸と稱する物に數種あり、即ち普通の單寧酸 $C_{14}H_{10}O_9$、の單寧酸「カテチユ」單寧酸 $C_{15}H_{14}O_6$、珈琲單寧酸 $C_{16}H_{18}O_9$、等であるが何れも「スケール」豫防の目的に對して効力を有するのである據て先づ普通單寧酸の効力ある所以から説明することにしやう。

普通の單寧酸を汽鑵水中に加ふれば、其一部分は水中の石灰鹽苦土鹽と化合して單寧鹽となりて沈澱し、他の一部分は水の爲に沒食酸（五倍子酸）となる、即ち其變化次の如し。

$$C_{14}H_{10}O_9 + H_2O = 2C_6H_6O_5$$

（五倍子酸）

此の如くして生じたる沒食酸の一部分は、又石灰鹽に苦土の鹽類となりて沈澱し、他の一部分は水き沸煮によつて更に分解して炭酸瓦斯と焦性沒食酸となる即ち其變化は。

（焦性沒食酸）

$$C_6H_6O_5 = CO_2 + C_5H_6O_3$$

右の焦性沒食酸は又石灰苦土と化合して其鹽類となりて沈澱するのである、要するに以上の各化合沈澱物は「スケール」の如き鐵板に固着性のものでないから害なないのである。

（ロ）柳類の皮　之等の物質に壓力を加へて水中にて永く煮沸すれば、該皮中にある一種の單寧の糖原質は分解して砂糖屬なる「イソダルシット」及び「クエルセチン」とになり、次に此の「クエルセチン」の一部分は永く沸煮すれば　更に分解して「クエルセチン」酸と「フロログルシン」とになる、之等の生成物は又「スケール」豫防の良劑であるから從て柳類の皮を汽鑵中に入れ置かば、「スケール」の形成を防ぐことが出來るのである、今參考の爲に該變化を記さんとす。

（ハ）木材浸出物　色素類に單寧類を含有せる柳等の木材浸出物を、スケール豫防の目的に使用する場合少くないのである、要するに浸出物として使用する場合には、一般に原の材料を其儘に使用する場合より効力が多いのであるから、之等浸出物を、スケール豫防劑として取賣するものの多きに至つたのである、而して其使用すべき分量は薪木の浸出物にありては一般に一ケ月一馬力に對し此物を五〇〇乃至六〇〇瓦の割合に使用すれば良い、又其他の木材浸出物を用ゆるときと雖ども、其分量は大同小異にして大差はないが、何れの場合にも分量に過不足なき樣に希望するならば豫め試驗をなし用水質に適當せる丈使用すれば最も安全なるものであろう。

（ニ）「ブラコウ」氏（Bulkom）式「スケール」豫防劑　氏は木材浸出物の「スケール」豫防に對する効力並に其原因を研究し、其結果次の如き配合物を製したのである。

擦又は「カシ」の樹層二〇〇〇グラムを水一〇「リートル」中にて少くも一時間煮沸したる後糖蜜の三〇〇〇「グラム」を加へたるもの。

右の配合物は氏の研究によれば、良好なる「スケール」豫防劑である、而して其分量は一週間一馬力に對し、右の配合物を一〇〇〇「グラム」の割合に與ふれば良いのである、尤も水質良好なれば五六週間一馬力に對し、同割合に使用するも充分である。

（ホ）砂糖　此物質は堆積性の石灰類を溶解するのみならず、假令之を沈澱するも結着性なきものに變ずるが故に、又「スケール」豫防劑の一として使用するのである、即ち砂糖は水中の石灰と化合して極めて可溶解性の蔗糖三石灰に變ず、此物質は熱と壓力とにより一半蔗糖石灰並に蔗糖三石灰に分解す、此蔗糖三石灰は温水よりは冷水に多く溶解する性質を有するが故に、沸煮中に生じたる蔗糖三石灰の沈澱は之を冷却すれば再び溶解するに至るのである、此の如く砂糖は堆積物を溶解性となし、「スケール」豫防の目的を達するのである、而して使用すべき分量は毎月一馬力に對し、糖蜜汁を八〇〇乃至九〇〇瓦の割合に加ふれば良い、但し一度糖蜜汁を加へたる儘永く汽鑵を使用すれば、再び「スケール」を伴るに至るが故に、注意し必要に應じて新たに糖汁を加ふる樣にせねばならぬ、又此物質を使用する場合には毎月一

三重縣農事講習所附設製糖實習場　（第一）

同汽罐を除外する必用を認むるのである。

（ハ）グリセリン　「アセリン」氏及び「ビダー」氏は共に「グリセリン」を「スケール」豫防剤の一として紹介したのである、即ち、「グリセリン」は石灰類と化合して粘着性ならざる物質を作るが故に此目的を達するのである。

其の二　無機物質

「アルカリ」土類鹽の溶解力を増加するは、獨り有機物質のみならず、無機物質中にも次亞硫酸曹達及び鹽化「アンモニヤ」等は大に此作用を有するのである、元來「スケール」の豫防は右の如く堆積性の「アルカリ」土類鹽を溶解性に變するか、若くは堆積物を粘着せざる物質に變化せば、其目的を達し得らるゝのである、即ち生石灰、鹽化重素、燐酸曹達、苛性「アルカリ」等は粘着性の石灰鹽、苦土鹽の堆積物を變化して然らざる沈澱物となし、スケール」の形成を妨ぐるのである、此の如く無機物質中にも種々の化學的作用により「スケール」の豫防をなすものあるが故に、左に之等物質の作用を簡單に記することゝせん。

（い）炭酸曹達　此物質を「スケール」豫防剤の一として擧げたるは、「キュルマン」氏（Kuhlmann）である、即ち炭酸曹達は水中に溶解せる重炭酸石灰と化合して沈澱性なるも、粘着性ならざる炭酸石灰と、及び一半炭酸曹達となる。

$$Ca(HCO_3)_2+2Na_2CO_3=Na_2H_2(CO_3)_2+CaCO_3$$

（重炭酸石灰　炭酸曹達　—半炭酸曹達　炭酸石灰）

次に右の一半炭酸曹達は分解して炭酸曹達と重曹とになる。

$$Na_2H_2(CO_3)_2=2NaHCO_3+Na_2CO_3$$

（重曹　炭酸曹達）

此重曹は沸騰すれば炭酸瓦斯を一部分發散して炭酸曹達となる。

$$2NaHCO_3=Na_2+CO_2+N_2O+CO_2$$

即ち使用したる炭酸曹達は重炭酸石灰を變化したる後以上の作用をなし、元の炭酸曹達に復するのである、此の復舊したる炭酸曹達は、他の重炭酸石灰に作用して同樣の變化を反覆するのである、故に水中に唯重炭酸石灰のみを溶解せるものならず、少量の炭酸曹達にて多量の重炭酸石灰を變化しうるのである、然れども普通天然水中に溶解せる石灰及び苦土の鹽類は、獨り炭酸鹽のみでなく、硫酸鹽鹽化物等の他の鹽類をも、普通併せ溶解せるものであるが、此場合に於ける炭酸曹達の作用は次に示せるが如く、右の硫酸鹽等を炭酸鹽に變化したる後、元の炭酸曹達に復することが出來ないから、勢ひ多くの炭酸曹達を使用せねばならぬのである。

（1）$CaSO_4+Na_2CO_3=Na_2SO_4+CaCO_3$

（石膏石灰　炭酸曹達　硫酸曹達　炭酸石灰）

（2）$CaCl_2+Na_2CO_3=CaCO_3+2NaCl$

（鹽化石灰　炭酸曹達　鹽化曹達）

右の理由により用水中に硫酸鹽若くは鹽化物の量極て少く炭酸鹽のみ多き場合には、一ヶ月一馬力に對し、炭酸曹達を一〇〇瓦の割合に施せばよい、又硫酸鹽等他の鹽類を併せて明かに溶解せる水にありては、其溶解量一〇〇「グラム」を增す毎に炭酸曹達を七八「グラム」宛加用すればよいのである。

（ろ）硅酸「アルカリ」　此物質も亦「スケール」豫防剤の一である。

る即ち水中に溶解せる石灰苦土の鹽類は硅酸「アルカリ」と化合して、塞天狀の硅酸石灰若くは苦土となりて沈澱す、即ち重炭酸石灰の場合にありては。

$$Ca(HCO_3)_2+Na_2SiO_3=CaSiO_3+CO_2+H_2O+2NaCO_3$$

（重炭酸石灰　硅酸曹達　硅酸石灰　炭酸曹達）

又硫酸鹽の場合にありては

$$CaSO_4+Na_2SiO_3=CaSiO_3+Na_2SO_4$$

（石膏石灰　硅酸曹達　硅酸石灰　硫酸曹達）

右の作用により粘着性ならざる硅酸鹽となし、「スケール」の豫防をなすのである、而して其使用すべき分量は普通一ヶ月一馬力に對し「ボウメイ」氏の比重計により三十五度の濃度を有する硅酸曹達の水溶液を六〇〇「グラム」の割合に加ふればよいのである、然れども用水中に多量の硫酸石灰等を溶解せる場合には、右に示したる分量以外更に加用するの必要あることは勿論である、が之等使用量に關する詳細は後章に項を分ちて記載することに致したい。

（は）苛性「アルカリ」　此物質も亦「スケール」豫防の効果を稍有するのであるが前記二物質に比すれば其効力劣れるのみならず、分量を誤り多く使用する等のことありては汽罐を腐蝕するの危險あるが故に、此物質を使用することは危險である。

（に）鹽化「バリューム」　此物質は硫酸石灰若くは苦土の如き硬き「スケール」を作る物質を結着性ならざる硫酸「バリューム」に變ずるが故に「スケール」豫防の目的を遂ぐることが出來るのである。然れども此際石鹼化の結果として、汽罐を腐蝕せしむる鹽化苦土を生ずるが故に、使用上注意を要するのである。

（ほ）水酸化「バリューム」　此物質も亦「スケール」豫防の目的を達するのである、元來此物は鹽化「バリューム」に比し高價なるも、之に比し危險少きが故に「スケール」豫防剤としては寧ろ安全である。

（へ）グラーク式水の改良法　此法は炭酸石灰若くは炭酸苦土を溶解する水、即ち炭酸鹽水に對して効力あるのである、今其概要を記載すれば

炭酸鹽水の七〇〇「ガルロン」（十七石六斗四升二合八勺）を改良するために加ふべき生石灰の分量は該水の一時硬度一沸度水十萬分中一の炭酸石灰を含有するものを一沸度と云ふ）毎に「ヲンス」（七匁五分九厘九毛）の割合に生石灰を加ふればよいのである、されば先づ用水の一時硬度を檢定して所要の生石灰量を求めたる後、之に少量の水を加へて乳狀となし之を改良すべき水の五〇「ガルロン」（一石二斗六升〇勺）中に直ちに注入して攪拌すべし、斯くし

三重縣農事講習所附屬物理實驗室の光景（二馬）

なる後殘餘の六五〇「ガルロン」の水を「パイプ」若くは樋により其内へ流し込み、更に攪拌するを要す、斯くしたる後廿四時間之を放置すれば、溶解せる重炭酸石灰並に苦土は沈澱し上澄みは清淨となるのである。

右の方法を施すに當り加ふべき生石灰量に、過不足なき様希望するならば次の檢定が必要である。

上記の如く「パイプ」若くは樋により改良すべき水を、石灰乳混和水中に注入し攪拌し終りたる後、其の一部分を茶碗に吸み取り、其内に硝酸銀の水に溶かしたるものを一二滴注ぐべし、此くして若し液が褐色とならば、加へたる生石灰の量多きに過ぎたるの徴となるが故に更に改良すべき水を加ふるの必要あり、又液が僅に黄色を帶ぶる様ならば、生石灰の分量適當なる証拠としてある、又液が全く着色せざるときは生石灰の量不足なる徴候であるから更に此物質を加ふるの必要あるのである。

要之するに「グラーク」式による改良法は汽鑵に給水前に施すの必要あるのである、今參考の爲めに生石灰のなす化學作用を記載せんに。

生石灰　　炭酸石灰
$Ca(HCO_3)_2 + CaO + H_2O = 2CaCO_3 + 2H_2O$

炭酸石灰　　炭酸加里
（と）「クロム」酸加里及び重「クロム」酸加里　此二つは何れも堆積性の石灰鹽を溶解性のものに變ずるが故に、又「スケール」豫防の目的を達するのである、之が使用量に關しては項を改て記載することゝなし、左に化學變化の方程式のみを記載することにしたい。

炭酸加里　　炭酸石灰　　硫酸加里　　炭酸加里
(1) $Ca(HCO_3)_2 + K_2CrO_4 = CaCrO_4 + K_2CO_3 + CO_2 + H_2O$

炭酸石灰　　硫酸加里　　硫酸石灰　　炭酸加里
(2) $CaSO_4 + K_2CrO_4 = CaCrO_4 + K_2SO_4$

重クロム酸加里　　重クロム酸石灰
(3) $Ca(HCO_3)_2 + K_2Cr_2O_7 = CaCr_2O_7 + K_2CO_3 + CO_2 + H_2O$

(4) $CaSO_4 + K_2Cr_2O_7 = Ca_2Cr_2O_7 + K_2SO_4$

（注意）重「クロム」酸加里、「クロム」酸加里共に毒物であるから注意するの必要がある。

（ち）補酸「アルカリ」　此物質は堆積性の石灰鹽に作用して粘着性ならざる寶酸石灰を沈澱し「スケール」豫防の目的を達成する、但し此際補酸石灰と共に炭酸「アルカリ」をも併せ生ずるのであるが右の内炭酸「アルカリ」は炭酸曹達の項に於て記載したると類似の作用をなして又「スケール」豫防の働きをなすのである。

炭酸加里　　炭酸石灰　　炭酸加里
$2K_2CO_3 + Ca(HCO_3)_2 = CaCO_3 + 2K_2CO_3 + H_2O$

「スケール」形成水の改良法は以上記載の如くである、使用すべき豫防剤の計算法、並に汽鑵を腐蝕する水等に就きては次號に讓ることに致したい。（未完）

機械を侮るべからず

東京醫學校講習所教授　服部柳太郎

製絲業は機械的に進歩し難いものである、換言すれば工業的でない、現在の製絲所の中には隨分工業的に組織の出來て居るものが無いではないが機械力より云へば患繰の寄り集りである、隨て生産の結果は組合組織の家内工業と甲乙なきのみならず、事業に對する危險の度は寧ろ大工場のものに多い紡績業や製絲業を摸し、大規模に計畫して失敗せるものあるはこれが證據である、斯く言ふと難も一も二もなく大規模を排斥するではない、其業態に精通し無理な仕事を强ひず、利益ある方面に向つて力を費さば、組織の大と小と敢て害にせぬのである。

機械力の進歩せぬは偖り本邦のみでなく、伊佛に於ても同様である、實驗の結果によれば製絲機械も製絲の技術も、今日に於ては伊佛よりも優れて居る、伊佛の生絲が本邦のものに優れて居るので、わざ〳〵伊佛より機械を輸入して製絲を試みたが、今では捨てゝ顧みるものがない、伊佛の生絲の優れた原因は論にあつたのである。機械力の應用が尠いと說明したからとて、これを侮蔑したものと誤解してはならぬ、機械力の應用が極めて尠いと或ずればこそ、些細な器具も大切に取扱ひ「バルブ」の開閉等の持ち様にまで、氣を配ばらねばならぬと理解されるのである、其一例として索緒等を說明しよう、この心を以て卑見を讀まんことを切望するのである。

索の大を以て誇つて居るものは伊豫の河野で、小なる索を以て利とするものは信州製絲家の多くである、索緒の等は小機械製絲の等は大、大なるものは仕事が易く、小なるものは絲量が減らぬ、少々絲量が減つても挽高の多きを望ひは機械製絲場で、仕事は少々遲くとも絲量の減るのを專ら恐るゝのが產繰製絲である、自家の境遇に適應した方針を確立し、これに隨ふて大小各其好む所を選ぶは賢き仕方であるが、凡そ事物は中庸を得難いもので、河野製絲所の如く等の大を以て誇るものあれば、又山形縣などでは等無し繰絲法を用ふるものがある。

河野製絲所は單に索緒のためにのみ等を使ふのでなく、繭を蒸すと云ふ目的から殆んど煮釜一杯の等を使ふのでなく、而して實際河野製絲所は腰の强い善き絲を造つて居る、これがために假令絲量が減じようとも仕事が遲からうとも頓着せぬのみか、河野の河野たる所以であるが、其意を解せずしてこれに倣ふものは、其害を得て其利を見ること多くは難い、變則であつて正則でない、索緒等は索緒等として其効を擧げ落すべき必要は蒸すべき良法に據る方便利でないか。

これに反して經木を用ひて五六粒宛緒索するものや、或は野竹二本で索緒するものや、甚しきに至りては帶無し繰絲法などを用ゆるものかある、聞けば相當の理由もある又利益が擧るといふ、併し大に憂は「しいのである」凡そ索緒法を大別すれば精粗の二である、精なるものは繰絲前に整然緒を求め

で設いて、然る後心身を苦しめ、但し専ら接緒するのである、組なるものは繰糸前に大緒を求め索緒しつゝ接緒するのである「精なるものは類節は悪いが絲量が減ると稱へ、粗末な絲を造る地方では、用ふるものが悪い、少々絲が悪くなつても、絲量の減らぬ方が利益であるといふものは、抄りながら繰きながら歌ひながらの方法を採る、經木を用ゆるものや又は箒無繰絲法は粗なるものゝ進歩したものでないか、果して然らば絲は悪くなるに相違ない、絲が悪くならぬならば、揆高が減つて來る、否決して揆高も減らぬといへば、必ず工女が疲れて來る、疲れにしても結果は知るべしである、工女は機械でない、繊度も蚕繭も湯の加減も、乃至は「バルブ」の開閉水の多少にまで、一刻の猶豫一寸の油斷もない、水鳥の足にひまなき思ひである四五粒づゝ經木で索緒したり一粒づゝ指頭にて索緒するが如き、永くは續くまい山形縣の如く特種の蒸繭法に慣れて居る地方とか或は小規模の工場で專ら國用向を製する工場ならばいざ知らず、普通一般に行ふべき良法でない、絲量を減ず繰高を増加せしめて善き絲を造る為人が萬人なからの希望であるから、種々の注文もあらう、然りながら工女をして愉快に便利よく、落ち付いて多量に仕事の出來る器具機械を與へることの工夫を忘れては其希望やは遂く畫餅に歸するのである。

單に些々たる一の蒔である、其關係するところ頗の如く廣大なりとすれば、野竹を使用し經木を使用し乃至は自働索緒器を使用するが如き人々其好むに任せて可なりゝ經も、利害關係の淺からざることを忘れてはならぬのである、道は単きにあり、火夫を責むるに先づ「バルブ」より汎の漏れざるや否やを注意せよ、工女を責むるに先ち腰掛の居心地を考へよ、成功の秘訣は蓋しこれであらう。

三重縣農事講習所製絲物所實習生光景（其三）

●蠶絲業産業組合數

農商務省最近調査に依る蠶絲業を目的として設立せられたる全國産業組合數は左の如し

販賣三九、購買二、生産二二、購買四販九、生産販賣五、生産販賣二八、生産購買四販一九、信用販賣一、信用生産一、信用購買販賣三、信用生産購買販賣一、計一三〇

尚其取扱物品概略は販賣組合にありては生糸、繭、蠶種にして購買組合にては蠶種、消毒剤及び消毒剤にて生産組合にては生糸再製乾繭等なりと因に他の目的と雖て蠶絲業を目的とするもの合計六百九十四ありと云ふ

軟化病に就て

農學會員
岩手縣農學校教諭　池田榮太郎

第三　黒痣病菌

養蠶中往々體軀の一部紫黒色なる大斑點を生じ、其黒點全軀に擴がり、遂に吐泻し或は下痢して斃死し、死體黒色に腐爛して悪臭を放つ、蠶病を發見することあり、世人の一般に軟化病と稱するもの是ならん、支那に於て烏爛蠶と唱ふるものも、亦此蠶病を稱するものならん、予は此の如き病徴を呈する病蠶より細菌を分離して屢々同一の菌を得て病原菌なることを確めたり、本病は其正の瀉病と稱すべきものなるべきも、他に大森博士の瀉病菌として發表せられたるものあるを以て、予は病徴の上より特に此病蠶を黒痣病と名命し、本菌を黒痣病菌と下命せり、左に其病徴形質一斑を記載せん。

一　病　徴

本病菌に侵されたる蠶兒は食慾漸次減退し、脚は體重を支ふる力を失ひ、背巻の鼓動頻繁となり、先づ必ず尾角の先端黒色となる、病勢愈々重るときは吐瀉して胸部皺を生し尾部赤紅くなりて體軀の中央部膨軟となりて斃れ、又下痢するものあり、而して高温なる場合は體軀の中央部に紫黒色或は黒褐色の痣狀斑紋を生じ、遂に全軀黒色に腐爛して悪臭を放つに至る、秋蠶期或は低温の際は死體急に黒變せずして全軀に小なる黒褐色の斑紋を生ずる場合多し、五齢蠶に於て特に然りとす。

本病の吐瀉する狀は一見吐瀉病に類似するも、大森博士の吐瀉病菌に罹りたるものは、必ず頭胸部を腹方に屈曲し、如何にも苦痛に堪へざる狀を呈するとも本病は此の如きことなし、又吐瀉病には黒褐色の斑點を生ずることなし。

二　病菌の形態

小なる桿狀菌にして其大さ透蠶病菌（前々號參照）より稍小に吐瀉病菌より稍大なり、大さ殆んど一定し長徑凡そ〇、〇〇一三「ミリメートル」内外短徑凡そ〇、〇〇〇五八「ミリメートル」内外なり、蠶體中に於て二個連鎖するものと單獨なるものとありて兩端鈍圓なり。

黒痣病菌（千二百倍）

三　病菌の性質

（一）運動　活潑なる回轉（稀に直線）運動をなす。

（二）染色　凡ての「アニリン」色素にて能く染色す。

（三）脱色　「グラム」氏液に脱色せず。

（四）芋胞及鞭毛　未詳。
（五）「インドール」反應　「ペプトン」水に培養せるものに亞硝酸加里種溶液を注ぎ之に硫酸を滴加するも、微かに反應を認むるに過ぎざるも、之に「アミルアルコホル」を注加して種々反應あるを見る。
（六）酸の產否　牛乳によく著殖して酸を出し固く牛乳を凝固す。
（七）瓦斯發生　僅かに瓦斯を發生す。
（八）色素產生　透蠶病菌の如く特異なる色素を產生することなし。
（九）扁平培養　寒天には初め灰白の中等大なる圓き「コロニー」を造り、往々之より突起を出す、「グラチン」に於ては中央濃點なる稍大なる「コロニー」を造り遂には「グラチン」を液化す。
（一〇）劃線培養　寒天斜面培養に於ては劃線に沿ふて著殖し中央高く斷面稍三角形を爲す、其周緣は多少波狀を呈し灰鼠色を帶び、遂に全面に擴る而して常に濕潤なり。
（一一）「グラチン」穿刺培養　好氣性細菌にして速に「グラチン」を溶解し、始め溶部椀形なるも漸次平底となり、上面には膜を作り、下底には沈澱を生じ、而して溶液常に多少濁濁す。
（一二）肉汁培養　華氏七十度前後の溫度に於て、一晝夜にして液を濁濁して圓膜を造り、管底には沈澱を生じ、遂に液は淡黃となる、而して液は終始清澄することなし。
（一三）馬鈴薯培養　透蠶病は日を經て茶色となり、吐瀉圓は殆んど黃褐色となるも、本病は始め白灰色をなして隆起して周緣顆粒狀に擴り、遂に圓苔全面を覆ひ、日を經て淡灰鼠色を呈す、而して常に濕潤なり。
（一四）蠶體試驗　本菌分離以來昨年及び本年に於て、殆んど二十數回の實驗を行ひたり、本病も前號所載の喉膿菌と同じく、强健の蠶兒には添食に依りて容易に斃死せざるも虛弱蠶はよく添食によりても罹病す、多く下痢病となる皮下接種或は肛門接種にては急速に蠶兒を斃死せしむ、左に其二三を表記すべし。

（一）皮下接種

（1）六月二十五日四齡蠶二十頭供試午後一時半　接種

斃死月日	頭數	接種より斃死に至る時間
六月二十六日午前七時半	六	十六時間半
同　同　八時	四	十六時間半
同　二十八日午前四時	二	四十三時間半
同　二十八日同十一時	四	四十九時間半
同　二十九日午前九時	二	七十三時間半
二頭無事		

（2）八月九日四齡三日目二十頭供試午前十一時　接種

八月九日午後四時	二	五時間
八月九日午後八時	二	九時間
同　同　十二時	四	十二時間

八月十日午前五時　一〇　十八時間
二頭無事
即ち高溫なるときは短時間にして斃死す（尤も虛弱蠶なりし）
健全體の五齡に血液に注入せるものは、十五時間乃至三十時間にして全部斃るゝを普通とせり。

（二）肛門接種

八月五日午前九時接種（供試蠶二十頭）

八月八日午前六時半	三頭斃死	
八月九日午前六時	四頭斃死	
八月九日午前五時	三頭斃死	
八月十日午前九時	四頭斃死	
八月十一日午前八時	六頭斃死	
皮下接種に比し著しく長時間斃死せざるを常とす。		

前述の如く健蠶は添食に依りて容易に斃死せざるを以て、虛弱蠶十頭を選び、八月五日午前九時に添食せしめたるに。

八月九日午前六時	一頭斃る
八月十日午前十時半	一頭斃る
八月十一日午前八時	三頭斃る

他は何れも結繭せり。
予は本論の冒頭に於て軟化病の病原となるべき細菌は、食桑と共に胃中に入りて斃死せざるも、血液に入りて斃死せしむるものは軟化病菌なりと之を斷したり、然り實に然り人體に於ける場合を見よ、虎列刺流行地に住めるもの特に之を看護するものは常に虎列刺菌を吸入しつゝあるは疑ひなかるべし、又肺病に於ても固より然り、健康體の胃液は虎列刺菌を殺滅すと云ふ、肺病の如きも健康體に傳染せずして虛弱體に傳染するは事實なり此場合に於て健康體を侵さるか故に虎列刺肺病菌の如きは非病原菌なりと云ふ能はざるべし、去れば病原菌なるものは胃中に進入するものより血液に侵入して發病せしむるものを普通の病原菌を認めざるべからざるなり

梅毒八ヶ月兒皮膚

況んや蠶兒の體軀は荒物を散布せられ蔗又は綱を粗暴に接觸せられ常に多少の傷害を蒙りつゝあるに於てをや、人體の最も怖るべき「ペスト」梅毒等の如き些少の傷より進入して忽ち發病せしむるにあらずや、此等の事實を以てするも添食によりて斃さゝるを以て病原菌にあらず、强壯なる蠶兒は如何なる寄生菌にも斃れずと言ふ能はざるなり、予は血液侵入によりて蠶兒を斃死せしむる者は果して非病原菌なるや否や

を確めんと欲し、左の實驗を行ひたり。

資性虚弱なる夏蠶を試驗材料と爲し、之を二區に別ち第一區には穀糠を充分蒸沸消毒したるものを使用し、第二區には右の如く消毒したるものに、夏に肉汁に培養せる黒死病菌二十立方「センチメートル」に水を混じて稀薄せるものを穀糠に混入し、陰干として使用したるに、第一齢催眠より上簇まで毎各二百頭の供試蠶中消毒糠區に四十八頭の病蠶を出したるに、黒死菌糠區には百十一頭の病蠶を出し、而かも其病蠶何れも固有なる黒死病蠶の徴候を呈して斃れたるもの多し、茲に於て更に調査の歩を進め、虚弱なる三眠起の蠶兒四百頭を取り、前回の方法に依り消毒糠と病菌糠とを造り左の四區に別ちて試驗せるに實に次の成績を得たり。

日順	消毒糠區 病蠶	消毒糠區 非固有病蠶	黒死菌糠區 固有病蠶	黒死菌糠區 非固有病蠶	吐蕊菌糠區 固有病蠶	吐蕊菌糠區 非固有病蠶	喉腫菌糠區 固有病蠶	喉腫菌糠區 非固有病蠶
一日目								
二日目								
三日目			一	八	三			
四日目	二	二	二					
五日目	三	三	九	二	五	一		
六日目	一	一	五	一	三			
七日目	二	三	一	三	一	三	一	一
八日目	六	一	三	二	二	一	一	一
九日目	二	四	一	五	三	一	一	一
十日目	二	二	四	一	六	一	一	一
十一日目	一	一	一	一	八	一	一	一
十二日目	一	三	一	七	六	一	一	一
十三日目	一	一	三	五	一	一	一	一
十四日目	一	三	四	一	四	一	一	一
合計	二五	二三	三六	一八	四六	一四	八五	一

試驗動日

是に據りて觀れは血液より侵入して蠶兒を斃すもの亦怖るべき病原菌として豫防せざるべからざるなり、世人の多くは添食によりて斃れざる者を病原菌にあらずと見做すもの多きは實驗に乏しき誤謬なりと云はざるを得ず、吾人屢々健蠶兒の急激なる疾病にて斃るくものあるを見る、而して其斃蠶を分離すれは多くは皮下接種によりて斃るゝ菌あるを認むるも添食によりて斃るゝものあるを見ること殆んと之れなし、今日世人のよく知れる食下斃蠶菌の烈しきものは卒倒菌なり然らは健蠶兒の急に傳染疾病に斃れたるものには、必ず卒倒菌なかるべからず、其然らざるを以て察するに黒死菌の病原菌は寧ろ血液より侵入するもの多數なること丶了解せざるべからず。

然れども予輩は血液侵入即ち皮下接種に依て蠶を斃すもの皆必ずしも怖るべき病原菌となすものにあらず、皮下接種に依りて蠶を斃す細菌は既知の種類のみにても頗る多きが如し、故に分布蔓延も廣き細菌にして通常家蠶の軟化病體中に存在するものにして蠶を斃すもの、之を軟化病原菌として攻究すべきなり、偶々を寄異なる細菌に依りて斃れたるもの、知るは之を發見研究したりとて蠶業界に何等の利害なく、只に學者の研究として多少の價値あらんのみ、是予の冒頭既に論じたるところなり。

附　前々號透蠶病菌及前號喉腫病菌の補遺

透蠶病菌は馬鈴薯培養に於て日を經て遂に大腸菌の如く濃茶褐色を呈するに至る、肉汁に於ては日を經て全液美しき黄青色と變じて清澄し菌膜は沈澱す、「透蠶病菌は「グラチン」穿刺培養に於て徐々に表面を凹ませて淡白なる「コロニー」を造りて周圍に擴り、遂に表面の中央點より「グラチン」を液化し、表面に膜を造り底部に沈澱を生じ、溶液は清澄して美麗なる固有の青黄色を呈す。

又本菌は牛乳の表面を僅かに凝固せしむ、又寒天培養にては日を經て針狀結晶樣體を生ず。

喉腫病菌は「ペプトン」水に培養して「インドール」反應を檢するときは、卒倒菌位の程度に此反應を呈す、然れども大腸菌に比すれば遙かに微弱なり。

喉腫病菌を「グラチン」穿刺培養を爲すときは、始め楔形に「グラチン」を溶解し遂に平底となり、上面に菌膜を生じ下底に沈澱を生じ菌膜の中央部に濃き輪環を作り、遂には放射形に瘤裂を生ず、而して溶液は常に清澄す。

（黒悲病菌結了以下次號）

蠶蛆調査

道　常
富山縣八尾蠶病豫防事務所長　小　菅　次　男

予は數年間蠶蛆に就て研究したり、今其本年に於ける試驗成蹟の一端を揭げて參考に資せん。

而して予は蛆經の發生狀態を調査すべく、本年四月二十九日より之れが調査に着手したるが其調査表は左の如し。

月	日	氣象	日中溫度	蠶齡	發蛆數	發蛆數	備考
四月	二九日	曇	六〇℃	四日			孵化せる蛆は大、中、小乾燥區乙區、蛆蛆他の二箱にて發蛆がしいたり
五月	三〇日	曇後風	六二	一〇			
	一日	雨	七三	一八			
二	日	晴	六四	一八			蛆の寄生は砂糖蜜等の入るに比し寄生蛆に比べ多くて蛆の新鮮なる蛆虫に寄生するが如し
三	日	晴	七二	二四			
四	日	晴	七八	一二			
五	日	曇	七七	一〇			

六日	雨	七〇	ー	一〇		ー	
七日	雨	五五	ー	追加二〇四		二	死蠅は腹部陷沒し飢餓に迫りたるが如し
八日	晴	五八	ー	追加七〇		四	追加蠅とは飼育家の床下より自然發蠅したるものを捕へ飼育したるものなり
九日	蚕	六七	ー	追加六		二	
一〇日	雨	六一	二化ノ一早物發生	ー		六	
一一日	雨	五七	ー	ー		四	
一二日	蚕暴風	六三	ー	ー		二	
一三日	晴強風	六七	ー	ー		六	
一四日	晴	六八	一化性蠅立	ー		六	蠅は温度六十度以下にあるときは其尾動かし靜止するも六十五度已上に在ては活潑に飛翔し一種の音響を發す
一五日	晴	六三	二日	ー		六	
一六日	晴	七〇	三日	ー		四	
一七日	蚕暴風	七二	四日	ー		一〇	
一八日	晴	七三	五日	ー		六	
一九日	晴	七三	六日	ー		八	
二〇日	晴	八〇	七日			一六	野外桑樹に於て蠅の交尾を見る
二一日	晴	七六	眠中			二	
二二日	蚕	七〇	二齢一日			二	
二三日	蚕	七二	二日			四	野外蛆蠅産卵發見
二四日	晴	六四	三日			六	
二五日	蚕	六〇	四日	産卵葉數	産卵數	落卵數 一〇	野外に觀測木を置き蛆蠅の産卵狀態を檢せり
二六日	雨	六〇	五日	五枚	八粒	一二	觀測木は上中下の三枝首の九葉とす已下其成蹟を記入す
二七日	晴	六八	六日	七	一〇	一八	
二八日	晴	七五	野蠶結繭見る 眠中	五	六	六	
二九日	晴	七八	三齢一日	一一	二三	八	
三〇日	雨	七〇	二日	一	一	一〇	
三一日	晴	七一	三日	六	六	一六	
六月 一日	晴	八一	四日	三	四	四	飼育蠅は本日悉皆斃死す
二日	晴	八二	五日	一一	一七	ー	
三日	晴	七五	六日	六	六	ー	
四日	晴	七八	七日	二	二	ー	後四時より九時迄夕立強雨
五日	晴後夕立	七五	眠中	二	二	ー	
六日	雨	六四	四齢一日	四	四	一	觀測木に來る蠅は多くは左側轉して飛行し葉裏より葉裏に移り一粒を産下するや直ちに次葉に移り二三の葉にして又元の途に去るを要するに其飛行するや一定の道あるが如し
七日	雨	六五	二日	三	三	ー	
八日	晴	七一	三日	一	一	一	
九日	晴	七四	四日	一	一	ー	
十日	晴	七八	五日	一	一	二	
一一日	雨	七〇	六日	一	一	一	
一二日	雨	七〇	七日	二	二	三	
一三日	雨	七七	眠中	二	二	三	
一四日	雨	七四	眠中	ー	ー	ー	
一五日	晴	六四	五齢一日	一	一	二	
一六日	晴	六八	二日	二	二	二	
一七日	蚕	六六	三日	ー	ー	ー	
一八日	蚕	七〇	四日	ー	ー	ー	
一九日	雨	六六	五日	ー	ー	一	
二〇日	蚕	六九	六日	ー	ー	ー	
二一日	晴	七二	七日	ー	ー	一	
二二日	晴	七五	登簇	ー	ー	一	下技産附卵殼十中一二宿凹みたるを見る
二三日	晴	七八	ー	ー	ー		
二四日	蚕		ー	ー	ー		
七月 十日			ー	ー	四		下技蛆卵十中六七凹沒せり其卵色は褐色を帶ぶ
七月 廿日			ー	ー	六		
八月 五日			ー	ー	一〇		

此研究に於て得たる結果は左の如し。

（一）蠅は早生桑の開綻と同時に發蠅するものにして、蠶兒發生以前に既に羽化しつゝあり。羽化期間は約十日にして就中乾燥土中にあるものと濕潤土中にあるものとは、乾きたるもの三四日羽化遲延するものゝ如し。

（二）羽化後六十度以下の非常寒冷氣温に遭遇するときは或ひは一部は斃死することあり。

（三）羽化後二十日前後にして産卵し始む、産卵期間は約二十日間とす

（四）温度高きときは産卵數多し。

（五）産卵は蠶兒三齢期間は最盛とす。

（六）春蠶兒上簇後より卵殼は漸々地下位にあるものより陷沒するものゝ如し、其者は生活力を失ふが如し。

（七）春蠶發蛾時期より陷沒は一層甚だしく赤褐色を其卵に帶ぶ。

次に予は一桑樹中如何なる部分に蛆蠅は最も多く産卵するものなるかを試みん爲め上部中部及下部の三部に區別し調査したるに其結果は左の如し。(詳細なる調査表ありしも紙面の都合上之れを省けり)。

（一）産卵の多寡は温度の高低に重大なる關係を有するが如し、即ち温度の高きときは低き時に比し其割合多しとす、蓋し六十度以下に於ては殆んど産卵せざるが如し。

（二）落卵即ち一般蛆蠅の桑葉に産附したる卵は降雨又は風の爲めには落下するものにあらず。

（三）落卵は雌蠅の生殖器の不完全なる爲め、其粘着力薄きによる爲ならん、故に昨日の産卵にして翌日落下を見るもの多しとす。

（四）桑葉の裏面は強風又は降雨の時と雖も大低は濕潤することなし。

（五）桑葉に附着する蛆卵は一二回水洗することあるも落卵するものにあらず、其粘着力は非常に強固なり。

（六）七月下降の落卵は葉硬化し、爲めに蟲害風害等の爲め破壞し寧ろ遺失せるならんか。

英　謠

鐵の熱き内に打てよ

日光の輝く内に乾草を造れ

蠶絲業家に對する希望

特別會員　澁澤榮一氏談

本邦貿易業界の巨擘たる澁澤男爵に對し如何なる意見を有せらるゝやとの尤も見か聞て世に紹介する目的を以て特に一日男爵を王子の邸宅に訪ひ左の談話を拜聞し本誌の一欄に供することゝ仕たのである

輸出入の總額に比すれば僅に六七倍の發達

何か御用ですか。蠶絲業の御話ですか。左樣ですは只今直接に關係をして居ぬが、併し國家經濟の上から觀れば尚に重要の物産であるから、常に之れが進歩を所つて居ります、近年の輸出額は幾何になりましたか御調になつて居るでせう……昨年の輸出額が生絲のみで一億一千萬圓、夫れに絹織物の輸出額を加へれば、一億五千六萬圓の金額、隨分發達しましたな、併し發達をしたと云つても他の農産物に比較してのことであつて、國家貿易の上、輸出入總額の上から觀れば、マダ其進歩は頗緩慢なるを免れない、明治十三年であつた生絲の輸出額を調べたことがある、其頃の輸出額が三萬圓であつた、夫れから二十七八年間を經過したる今日、漸く十七八萬圓を輸出するに過ぎないから、十倍以上の發達をして居る輸出入の總額に比すれば僅に六七倍の發達、敢て驚くことはないのであります、されば蠶絲業者は現狀に安んぜず之れが增殖に努められたい。

食物を措て健康を論ずると同じい

昔は養蠶地と云へば磯島、郡馬、長野地方に限るやうに思はれ、之れを本場と唱へて其他の地方は場アキと稱し、場アキには決して十分なる養蠶は出來ないものゝやうに思つて居たのであるが、近年に至りては場アキと云はれた土地が却て盛に開けて本場を凌ぐ勢となり、養蠶する者が年々多くなる有樣であるけれども、養蠶の根本要素たる桑園が之れに伴はないやうである、從來養蠶地と云はれた土地の桑園なども隨分荒廢して居るやうに見受けるが、桑園を拵へ養蠶の改良のみを唱へるしく云ふのは、食物を措て、健康を論ずると同じいことで無理の滅茶たるを免れない、身體の健康を保つには多くの養養物を要するが如く養蠶の發達を圖るには立派の桑園を拵へねばならぬから、一層の力を注ぐやうにせられたい、肥培耕耘が充分に行き屆けば必ず桑は美しく繁茂する、私の郷里は深谷の先きでありますが、アノ邊には黒ボケの土質即ち火山灰から出來た畑が沢山あつてソ

コには桑が良く出來ないと云つて居るけれども、併し充分に肥料を施せば必ず出來るに相違ない、日本の内には之れに類した土地が澤山あるから、養蠶家の勉强次第で桑園を增殖すると共に溢養分に富める立派の桑葉を多量に收穫することが出來やうと考へます。

世界の流行に先立つやうにならねばならぬ

次には製絲である、大分進歩したやうであるから、洋式製絲に就ては此上進歩を望む餘地も無あるまいが、座繰製絲に就ては改良すべき餘地澤山あるやうに思ふ、先づ第一に繰度を揃へ荷造を一定すると云ふことが必要である、此目的を達する爲めには彼上州地方に行はれて居る共同拵を全國の座繰製絲業者が普遍するやうに致したい、同じ座繰製絲でも上州三紙の如く品質を一定すれば、其市場に於ける相場は器械製絲の右にも出るのであるから、其利益の多くなることは謂ふ迄もありませぬ而して尚其上の希望をいへば、現在産出の生絲を更に精巧のものにして輸出することにしたいと考へて居る、併し之れは魚屋に料理の事まで望み或焼女に奥座敷の仕事を命ずると一般製絲家の範圍を飛び越えて商賣屋窓匠家の爲すべき仕事を兼ねむのは無理の注文かも知れぬが、現在の如く生絲のみ産出したのでは、其當時に在つては今日輸出する羽二重や絹手巾の如きものはなかつたのである、最初に之れを計畫した人は斯ういふ加工品を輸出しようと云ふ心配もあつたであらうが、意製造して輸出しても利益があるとの意匠を施したものであるから、如此くである、況して之れ以上に意匠をし加工したものであれば、或は利益の多いことは明らかである、國の富源に關する世界の流行を逐ふことが出來ないから繊物としての輸出は見込みがないと云ふかも知らぬが世界の流行を逐ふことゝは日本は彼の佛蘭西の如く迅速に世界の流行に先立つて、精巧品を世界の各市場に供給するやうにならねばいけない、又爲すことが出來ると相違ないと考へます。

埼玉縣中郡吉見村の一部なる吉見原は明治の初年に開墾されたる所にして、其面積凡そ二千餘町歩に及ぶ、其土質は赤土にして桑葉の成育すること最良なり、氏は此地に桑園を開墾し、桑葉を多量に收穫して、養蠶業の改良に資する目的を以て、本年の春、東京市麻布區霞町に、大家の熱蠶養成所を設け、氏の令息、氏の令孫、氏の令婦、氏の令嬢、氏の令婿、氏の令孫、氏の令孫、氏の令孫

とである、海外と云つても亞米利加や佛蘭西へ行つて遣れと云ふ意味ではない、一葦帶水の朝鮮我邦の保護國たる韓國へ行つて、彼國の蠶絲業を開發せられたいと云ふのでありますす今こそ朝鮮の蠶絲業は衰頽して見る影もなき憐れの狀態となつて居るけれども往昔は盛んであつたものである、彼の呉服と云つて日本の絹織物は呉の國から傳り日本の蠶絲業は呉の時代に渡つたものである、其當時は朝鮮の蠶絲業は大に開けて居つたに相違ないこと丶信ずるが、其後幾多の變遷を經て遂に今日の如き狀態となり、土地は肥沃であつても桑園の見るべきものなく、氣候は養蠶に適して居ても甘く之れを利用して美繭を收むるの術を知らず、空しく多大の利を放棄して居るのであるから、本邦の養蠶者はドシ〳〵韓國に渡つて蠶絲業の經營を施し遺利を收むるが良い、土地が肥えて其値えが低廉で賃銀が安くて人民が幼稚であるから、行いて事業を遣るに之れほど容易の處はない、而かも之れか經營者自身の爲めのみではなく、韓國の爲めにもなれば日本の爲めにもなるのであるから、予は大に本邦養蠶家の渡韓を勸むるものであります。

如何なる大學者も容易に明言は出來ぬ

支那に於ける銀貨相場の下落に就て何か意見を聞きたいと云はれても、予には銀貨相場の事が分つて居らぬから御話することが出來ない、一體銀貨相場が何故に下落したか、將來此相場が如何樣に變つて行くものか、之等は吾々の凡智では到底分るものではない、夫れを知らうと云ふのは無理の注文て、世間には隨分種々の說を立つる者もあるけれども、多くは自己の臆說たるに過ぎずして正鵠を得たる議論は洵に尠いから、之れを信じて善後の策を講ずるならば必ず過ちを生ずるであらう、世には又天災を買ふと云ふ俚言がある、吾々が風上にも嫌ふ投機師などは、七八月の天災の最も多い時に於て風水害等の天災が有るとか無いとかと云ふ見込をつけて、米を買ふとか賣るとかするのであるが、恐らく世に之れ程の投機はあるまい、乍併投機者流の言ふこと爲すことが悉く的中して一も外るゝことがないとすれば、相場師は天文學者經濟學者其他、凡ての學者以上に立つべき大人物である、然れども其相場師の爲すとは多く外れ易い外るゝのが又當然である、之等は凡智を以て將來を測ることの出來ないと云ふ適切なる例證で銀貨相場の前途に就てドーなるなど丶斷言の出來るものではないのである、何故に昨年暴騰したか何故に今回暴落したか暴騰暴落の原因に就ては能く調査したならば多少知り得るであろふが、將來此相場が如何に變化するとか云ふとは如何なる大學者でも容易に明言しうることではなからう、併し銀貨相場の變動に依て生絲貿易の上に影響を受けはせぬかと云ふことは如何にも理由あることで綿花の如きも既に其影響を受けて居るのであるが、斯かる現象は支那の貨幣制度が金貨本位にならざる限りは時々あるものと覺悟して生絲の如き對外貿易品を營業とする者は豫じめ之れに對する準備を爲し品質の優良と價格の低廉とを以て敵陣を突き勝を最後に決し得るの根柢を鞏固にするのが肝要であります。

一反歩の收葉量一千二百貫匁

學藝委員　練木喜三氏談

桑園の荒廢を如何にして救濟すべきかは現時の大問題である此際一段歩の收葉量一千二百貫匁の桑を聞く之れ空谷の跫音にあらずして何ぞ練木學藝委員の紀州土産としての談話の一節は實に實益と趣味とに富み當業者の爲には好個の教訓である讀者一讀の勞を惜み賜ふ勿れ

紀の川沿岸の桑園

この夏紀州へ參りました途中和歌山市で其筋の方から承りました處に依ると、同縣下中に於ける大河の一たる彼の紀の川の沿岸には一反歩優に千二百貫匁以上の收穫の有る桑園が而も約百町歩もあるそうで、此收穫の有る時期は栽植後四年目乃至五六年目の間で、夫より以後は素より無肥料のことゆゑ追々遞減するそうではありますが、又水の汎濫に遭へば元の一千二百貫目以上に復すると云ふことで、斯う云ふ處は獨りこの紀の川の沿岸計りではなく、熊野川の沿岸にもまた約五十町歩ほどあるよし、而して此收量中條葉の釣合は如何と云ふに即ち舊條は五分五厘新條は一分八厘夫れから正葉即ち本當の葉計りは二分七厘と見て宜しいさうでありますから、此收量を假りに千二百貫目とすれば此舊條は六百六十貫匁新條は二百十六貫匁正葉三百二十四貫に當りますナンとヱライ收穫ではありませぬか、甞て關東で三十六貫匁を一駄として一反歩平均二十五六駄の收穫を以て土地の誇りと致されましたは彼利根川の沿岸殊に栗橋の附近でありまして是もまたヱライものではありますが、假に此收穫を二十六駄として其貫數は即ち九百三十六貫匁で、まだ千貫には達しませぬに、此收穫でさへ僅に十駄內外を以て甘んじて居らるゝやうな人々から見ると虚ではあるまいかと思はるゝ位況して千二百貫匁乃至夫れ以上といへば實に非常のものと云はねばなりますまい。

人爲の結果も太いしたもの

尤も其收穫の全體から見ると肝心の葉量は比較的少量ではありますが、一反歩の桑園にして千二百貫以上は慥に取り上ることの出來ると云ふ實證丈は慥に示されたものであると觀てよからうと思ひます。併し之れは是れ申すまでもなく自然の儘の結果でありますが、倘ほ一歩進んで更にまた之れに人爲を加へたらどうでせう、葉量の增收は決して望み得られぬとも云はれますまい、が春蠶に於ける尋常の刈桑の一回の收獲計りでは遺憾ながら、まだ之れぞといふ相當の實證を認めませんが、彼收葉再三に及べるものに在つては、斯ういふ實例は決して寡なからんので曾て本誌の上に顯はれました小野元兵衞氏の魯桑園の如き、一町六反歩餘の收獲の平均が、春蠶と秋蠶と晩秋蠶との三期に於て、一反歩に就き舊條四百二十八貫五百十四匁、新條四十五貫四百三十六匁、葉量五百三十三貫五百十五匁、合計一千〇〇七貫四百六十五匁と云ふ大量に達しまして、其內少しく目立つ程の桑園の收獲になりま

すと、同じく一反歩に就き春蠶期に於ける蠶條量が五百貫九百十八匁、秋蠶期の繭業が三百二十貫百十二匁、繭業量二百九十六貫八百十八匁となり、秋蠶期の繭業量が三百二十貫目、晩秋蠶に於て七分摘葉し、五十貫目、此合計が七百六十六貫八百八十八匁になるのであります。七分摘みにしてさへ現に此如ですから、尚一層多く量り摘葉し、蠶に八百貫匁以上になるのであります。しかしながらなほ此業量を以て先きの紀の川に於ける一千二百貫匁に對する收業量に比すれば、優に二倍以上に當ります。此外に二倍以上に當る合計に於て實に百貫匁以上の增收になります、人爲の結果もまた太いしたものではありませぬか。

桑園固有の力量を發揮せしめねばならぬ

で此收業は三回に亘つて居りますが、彼長野縣諏訪郡の實例にもありますと、發桑を中刈仕立て夏秋の蠶の二期に收業する其收業量八百貫匁に達し、此外に尙ほ春刈の舊條量が三百五十貫匁あるといふことですから、此合計は一千二百貫匁に達し、ツーして見ると一回の收業では更に角二回以上に於ては其業量が八百貫匁以上になるのであります。彼とい小何れも眞に愉快な實例ではありませぬか、但し今此收業の多い實例として揭げた桑は即ち魯桑であつて、在來の桑には在ては未だ此如く巨額に達した實例を見ません。蓋し此收穫は魯桑其物の實力の致す處で、在來の桑は魯桑丈けの實力を持たぬかやうにも見えますが、前例の紀の川に於ける千二百貫匁の收穫なるものは即ち十文字であると云ふ、果して然らば在來の桑と雖も、種類によつては又略ぼ同樣の結果を見ることが出來ぬとも斷言は出來ませぬ。

諏訪八紫荷峠の麓

種の必要は勿論ですが既に斯ういふ云ふ實例のある以上は、凡そ桑園有の力量を發揮せしむるやうにせねばならぬ。收業八百貫目と云へば通常の收業に比べて多きと雖も、何ぞ難くべきほどの大量で當然の至りであり、併し如何に工風を凝せばとて與ぬもの、取れやう筈はありませんで、先づ以て與へる肥料代四十四圓に當るさうで、而も其桑園は何れも肥沃の土地で小野氏の桑園の如きは上田以上の良田で力言にふみぎ田といふのを畑にしたのだやさうですから、地味のよいこと申すまでもなく、是れまた地味は極く上々で、其上肥料は車隊の通ずるだけですから、收穫の多いは當然の結果ではありませぬか所謂與へて取ると云ふは即ちこれであります。

與へて取れの趣旨を實行せられたい

ソコで若しも當業者の各位が凡て此與へて取るといふ極意を解し、愛々實行に移されて後に此目的を達するに於ては現在の桑園を以てしても、優に數倍の增收は必ず、從つて未開地の多い地方なら更に角、乏しい所でも成べく此法を取るが斯業の擴張上最も近道で、ヨシ荒た土地に餘り大きく開拓を漫りにすれば、或は過般の如き水害の因を釀すとも限りませんで此邊は殊に大に慎重の注意を拂ひて此與へて取るの趣旨を實行せらるゝやうにありたいとぞんじます、當業者銘々の爲は素よりで、それからして而して後に取るの工風が最も肝要にぞんじます、現に彼小野元兵衛氏の如きは全體に一反歩金肥二十圓の割合を以て施し、肥料は主に此外に蠶沙を加へ、反歩に付き大豆の値段なれば合んで居りまして、其分量は一反歩に付き七八斗で、之れを花盛りに鋤込むといふやうな次第。又彼長野の方は一反歩に就き其桑園は肥沃の土地で、其收業量八百貫匁に達し、此外に尙ほ春刈の舊條量が三百五十貫匁あるといふことですから、此合計は一千二百貫匁より少きこと僅に五十貫であります、ツーして見ると一回の收業では更に角二回以上に於ては其業量が八百貫匁以上になるのであります。彼とい小何れも眞に愉快な實例ではありませぬか、但し今此收業の多い實例として揭げた桑は即ち魯桑であつて、在來の桑には在ては未だ此如く巨額に達した實例を見ません。蓋し此收穫は魯桑其物の實力の致す處で、在來の桑は魯桑丈けの實力を持たぬかやうにも見えますが、前例の紀の川に於ける千二百貫匁の收穫なるものは即ち十文字であると云ふ、果して然らば在來の桑と雖も、種類によつては又略ぼ同樣の結果を見ることが出來ぬとも斷言は出來ませぬ。

種の必要は勿論ですが既に斯ういふ云ふ實例のある以上は、凡そ桑園有の力量を發揮せしむるやうにせねばならぬ。收業八百貫目と云へば通常の收業に比べて多きと雖も、何ぞ難くべきほどの大量で當然の至りであり、併し如何に工風を凝せばとて與ぬもの、取れやう筈はありませんで、先づ以て與へる肥料代四十四圓に當るさうで、而も其桑園は何れも肥沃の土地で小野氏の桑園の如きは上田以上の良田で力言にふみぎ田といふのを畑にしたのだやさうですから、地味のよいこと申すまでもなく、是れまた地味は極く上々で、其上肥料は車隊の通ずるだけですから、收穫の多いは當然の結果ではありませぬか所謂與へて取ると云ふは即ちこれであります。

與へて取れの趣旨を實行せられたい

ソコで若しも當業者の各位が凡て此與へて取るといふ極意を解し、愛々實行に移されて後に此目的を達するに於ては現在の桑園を以てしても、優に數倍の增收は必ず、從つて未開地の多い地方なら更に角、乏しい所でも成べく此法を取るが斯業の擴張上最も近道で、ヨシ荒た土地に餘り大きく開拓を漫りにすれば、或は過般の如き水害の因を釀すとも限りませんで此邊は殊に大に慎重の注意を拂ひて此與へて取るの趣旨を實行せらるゝやうにありたいとぞんじます、當業者銘々の爲は素よりで、それからして而して後に取るの工風が最も肝要にぞんじます、現に彼小野元兵衛氏の如きは全體に一反歩金肥二十圓の割合を以て施し、肥料は主に此外に蠶沙を加へ、反歩に付き大豆の値段なれば合んで居りまして、其分量は一反歩に付き七八斗で、之れを花盛りに鋤込むといふやうな次第。又彼長野の方は一反歩に就き其桑園は肥沃の土地で小野氏の桑園の如きは上田以上の良田で力言にふみぎ田といふのを畑にしたのだやさうですから、地味のよいこと申すまでもなく、是れまた地味は極く上々で、其上肥料は車隊の通ずるだけですから、收穫の多いは當然の結果ではありませぬか所謂與へて取ると云ふは即ちこれであります。

銀貨相場と生絲相場

——學士會員宮城縣技師　丹羽散太郎氏談——

いや驚くと云ふ間もあらせず蠶絲會問題より進に轉じて銀貨問題にまで及び消き數手に蠶書の筆に語られた丹羽散蠶委員の談も時節柄頗る興味あることゝ信じ茲に之れを記し會員諸氏に紹介することゝしたれば、

一萬五千圓を投じて武德殿

イヤ暫くでした……蠶絲會もナカ〳〵盛んになりましたな、會員はどの位になりましたか、豫定の會員を得ることにしてありますが、現在會員の一番多く有る縣はドコてありますか……長野縣……長野は本邦第一の蠶業地である、澤山の會員が出來るでありませう……ハー埼玉縣が今度殿下の台臨を仰ぐに就て六千名以上の會員が出來ましたとな、私の縣でも是非殿下の台臨を仰ぐ計畫でありますが、夫れ迄には勝くも壹萬人位の會員を募集したいと云ふのです、それ迄に募集人員を割當てゝ數さへ募集する都合にして居りますから豫定通りの會員は得られませう、近い内に知事と早川副會長が各郡を巡回して天下に督勵する計畫であるけれども、知事は病氣であるから早川會長が各郡に募集人員を割當て第一期に何名と第二期に何名と云ふ工合に各町村役場に割當て第一期に何名と第二期に何名と云ふ工合に各郡に募集人員を

長文ッけが廻はることになるてせうが、正覺會長即ち加藤氏も非常に熱心であるから何をするにも爲し易い、武德會なとは宮城縣に三萬人からの會員を募集し今度一萬五千圓を投じて武德殿を建設することになつて居りまする、田舍童子はサーベル○○なと巡回を云ふ位警察力を利用した結果でもありませうが、併し熱心に遣らねば到底アレホドの會員を募集し得らるゝものではないから蠶絲會員募集に就ても大に遣りたいものですな……。

上海商業會議所は何事を決議せしか

トコロで話は轉じますが昨今の銀貨相場の下落と問題は如何です、銀貨相場の大變動は私が覺えて之れで二回ですが、其第一回は明治二十二年です、二十年の秋頃銀百圓に付金六十六七圓の相場であつたのが、二十二年の夏には銀百圓に金九十四五圓と云ふ相場になつて、三十圓方暴騰したから我海外貿易は非常の駆迫を受けて廿年の秋生絲相場八百圓のものが二十二年の夏に五百四十圓まで下落し當時製絲場を經營して居つた私なども大に損失を受けたのであります、支那も今度は銀貨國であるものだから昨年は我邦の二の轍ひを遣つて銀貨暴騰の結果海外貿易は非常の打撃を受けたのです、即ち字内の一大蠶絲國であり乍ら生絲輸出の道は殆ど杜絶の狀態となり上海邊の製絲家中には倒産の不幸に陥つたものもあつた、上海の商業會議所と之れに對する商業會議所ですが、ソコで本年一月會議を開きてセメては貿易に關する貨幣丈けなりとも金貨制度に改められたいと決議し支那政府に向て建議をしたのであります、然るに昨今銀貨相場はアノ通り下落しましたから彼等も定めし愁眉を開いたでありませうが、之れと同時に支那の貿易品は必ず決水の勢を以て輸出せらるゝに相違ない、去れば此反動が我生絲貿易の上に及ぼしはせぬかと案ずる人のあるのも洵に理由があることゝ思ひます。

御撮影 朱新道の石門

進んで支那の銀貨制度に干渉せよ

銀貨相場の暴騰暴落の原因ですか、夫れは判然とは申されませぬが、去る二十二年の暴騰は米國南部太平洋沿岸の「シンヂケート」が强硬に維持せられた爲めであつて、其の「シンヂケート」は二十二年に至りて破れましたが同時に銀貨相場の下落となつたので、我生絲の輸出も圓滑となり、隨て絲價も漸次回復して製絲家も相當利を見ることが出來爾來多少の變化は有つても差したることなく順境に至つたのであつたのか、さて昨年の銀貨相場の騰貴は如何なる原因であつたのか之れは下に分る筈ぬる或人は需要供給の法則に支配せられたのであると云ふ說を主張して居りますが、或は他に有力なる原因があるかも知れぬ、兎に角支那の銀貨相場は非常の打撃を受けた其上に日本の製絲家は大に喜んだ、午併支那が銀貨國であるに反し日本は金貨國であるから、ソコで私は常に斯う考へて居る、支那製絲家の喜びに引代へ日本製絲家に一大影響を與へはせぬかと……イヤー永遠ことろが、今既に銀貨下落の反動は支那の銀貨に反して居る位であるから、ソコで私は常に斯う考へて居る、支那の銀貨は本位の國が支那のやうな生絲の供給國に在るのは丁度兵備不充分の韓國が列强の壓迫を受くるやうになると同じことである、で我邦は國防上已むを得ず日清日露の大戰を起し朝鮮の內政に干渉して誘導扶掖の大任に當つたのであるが、支那の銀貨本位は我經濟界にまで非常の影響を與へ、本邦商人をして屢々危險の地位に立たしむるのであるから日本は宜く清國の貨幣制度に干渉して是非金貨本位を取らしめ、以て我邦經濟界自衛の道を完うせしむるやうにせられたい。

銀貨の下落は間接の影響

併し日本は幸に三十二年以來金貨制度を取つたから、以前のやうな銀塊下落の爲に經濟界の擾亂を來すことはなからうけれども、前述の如く銀貨國が隣りに在る以上は到底安心が出來ない、銀貨の騰貴した時分には支那生絲の輸出が塞るから自然日本生絲の輸出は増加し之れと反對に下落するけれども、若しも之れと反對に下落しなければならぬことになる、最も二十年の銀貨騰貴は直接本邦の貿易に影響を與へたけれども、今回の銀貨下落は間接に影響を與ふるに過ぎぬから、其の影響の程度は存外に勘いかも知らぬが、假りに今後益下落して大影響を我絲家に與へる約束を行ひ輸出總額の十分の四位は高直に賣了してあるから、今後下落の爲に損失をしたとしても、其しう手傷を負ふやうなことはなからう、況して銀貨相場も此後ドン〳〵下落すると限つたものではないから、深く憂念することはないと考へて居ります。

廣東の生絲輸出高

千九百六年即ち三十九年六月一日より千九百七年即ち本年五月三十一日に至る廣東國間、廣東生絲の紐米市場出糸額は四萬〇百三十四梱にして、其內譯三萬子二百四十八梱は歐洲へ、八千八百八十六梱は北米へ輸出せられたるものなり、之れを各市場に區別すれば左の如し。

里昂へ	二七、四五七	美國へ	三、一二二
倫敦へ	四〇、一三四	紐育へ	八、八八六
計	六六九		

右輸出額の內譯を種類に區別すれば左の如し。

蒸滅製絲	三〇、八〇〇	尚本繭	七、六一〇
普絲七梱絲	一、四七五	黃色絲	二四七

家庭

大日本婦人衛生會長
大日本禮儀學會長　石井泰次郎

割烹

酢物（さくぜ）防風

はぜを水にて洗ひ、うろこを取り、頭（はらわた）を去り三枚におろすか、又は腹の方よりさきて、骨を去り、腹の所の小骨をもすきとり、皮もとり去りて、鹽をふりかけ二十分間くらゐ置き、鹽を洗ひ落し、斜にほそく作り身となし置くなり。

黄ぎくは、瓣のみをつまみ取り、笊に入れて洗ひ、ざつと湯煮して水にとり、固くしぼり上げ、前のはぜと共に深皿に盛り合せ、あま酢をかけ、防風の酢にて煮たるを、こまかに切り、ばらりと上よりかけ入れて進むべし。

甘酢

甘酢は、みりん酒一合、酢四勺、醤油二勺、砂糖二匁位の割合にて、先づみりんを、酒氣のぬけるまで煮切り、次に酢、醤油、砂糖等を入れ、一度煮かへして鍋をおろしよくさましてこれをかくべし。

○八ッ頭白味噌煮こしらへ方

（原料）八ッ頭三個、白味噌五十匁、砂糖五匁、味淋三勺、鹽一匁五分、水二合五勺。

八ッ頭の皮をむき、五分角位に切り、水に晒し、湯鍋に入れて少しかためにゆで煮し、湯煮する時、上に浮ぶ泡を金杓子にてすくひ去るべし）水にとりて笊に上げおくべし。白味噌を濾し盆にて、馬尾篩にて裏漉し、鍋に入れ水二合五勺、砂糖五匁、鹽一匁五分、みりん三勺入れて炭火にかけ、前の八ッ頭を入れて煮上るなり。

○茶巾栗のこしらへ方

（原料）生栗三合、味淋酒三勺、砂糖五十匁、鹽一匁、内水一合、燒明礬一匁。

生栗を皮をむきて水に入れ、水を加へて晒し、湯鍋に入れ燒き明礬一匁を加へて、湯煮三十分間して柔らかに細串の通るほどになればゆで鍋を卸し、別の鍋に砂糖を水勺にて煮とかし、此砂糖と味淋とを鍋に入れて、馬尾篩にてあげて鹽とを加へて、煮詰めて、馬尾篩にて裏漉し、鍋に入れ、水杓子にて押漉に漉し粉として、それより布巾に丸く包みて（一寸二三分の丸

さに）布巾を右手にて捻り、中の栗を丸くかためて、左手の大指の元のふくれたる所を押しつけて、栗の裏をくぼめ又其くぼめたる所の裏中を、大指の先に腹の所にて押しくぼめて、そつと布巾を取り、皿に盛るなり。

柳鮫入京鮓嘘の種

○「スタフト、マッシュルーム」

（原料）松茸大笠一個、同蒸胡蘿蔔三十匁、牛酪十匁、三ッ葉芹十匁、「メリケン」粉十匁、鹽五分、胡椒五分、松茸の蒸を切り別々にして、蒸を洗ひ、細かに切りて、胡蘿蔔を一寸餘のたけに切り、皮をぐるりと剝ぎ細くせん切に切りたるを、牛酪と共に鍋に入れて煎ること十分間にして、米利堅粉を加へ少しいりて、三ッ葉芹を細かに切りたるを加へ、鹽と胡椒粉をとゝのへ、鉢にとりあげおくべし米利堅粉と牛酪とを合せて、耳のたぶほどの柔かさにのばしたる厚さ五厘餘の丸き物をつくりて、笠に冷したる右の實をつめて、上より伸したる物を覆ひてふたとなし、牛酪をしきたる燒鍋にて十五分間内外、やきたる上、取り出して二つ切にして皿に盛つて出すなり。（未完）

繼子の低に子知らるゝ如く昨年の露繰輸出は横濱開港以來未曾有の盛況にして其総價格は實に約一億二千萬萬圓に達し輸出貿易の全額に比すれば二割七分強なり之國家の爲國に慶賀すべき次第なりと雖も本邦の風土殖産より見れば寧ろ其界露繰の需要は近時に敢て亟つては成るべき生產發の者唯に多の物産にあらずして他に無多の競爭國あるを以て此生產既實の方法に於ては克分の攻其全知ふる事極めて所要なり之迂多の狀態と所業に於ける繼蠶の設備改良方法等者々迂多の論と所業の意見とは一歩は少しり相違者し來れり但無論に露繰業に關し施設經營すべきの者々多の者は鳳に國家の賞の賞なる者と製絲業とは今日は殖産の故を以て事業上に於ける利益を享有せしめんと願り露繰に關する善良なる者は鳳に國家の賞の賞なる者と製絲業とは今日は殖産の故を以て事業上に於ける利益を享有せしめんと願り露繰に關する善良なる者は鳳に國家の賞の賞なる者と製絲業とは今日は殖産の故を以て事業上に於ける利益を享有せしめんと願り露繰に關する善良なる者は鳳に國家の賞の賞なる者と製絲業とは今日は殖産の故を以て事業上に於ける利益を享有せしめんと願り露繰に關する善良なる者は鳳に國家の賞の賞なる者と製絲業とは今日は殖産の故を以て事業上に於ける利益を享有せしめんと願り露繰に關する善良なる者は鳳に國家の賞の賞なる者と製絲業とは今日は殖産の故を以て事業上に於ける利益を享有せしめんと願り露繰に關する善良なる者は鳳に國家の賞の賞なる者と製絲業とは今日は殖産の故を以て事業上に於ける利益を享有せしめんと願り露繰に關する善良

松岡農相の演說（繭糸課防主任官會議に於て）

繼子の低に子知らるゝ如く昨年の露繰輸出は横濱開港以來未曾有の盛況にして其総價格は實に約一億二千萬萬圓に達し輸出貿易の全額に比すれば二割七分強なり之國家の爲國に慶賀すべき次第なりと雖も本邦の風土殖産より見れば寧ろ其界露繰の需要は近時に敢て亟つては成るべき生產發の者唯に多の物産にあらずして他に無多の競爭國あるを以て此生產既實の方法に於ては克分の攻其全知ふる事極めて所要なり之迂多の狀態と所業に於ける繼蠶の設備改良方法等者々迂多の論と所業の意見とは一歩は少しり相違者し來れり但無論に露繰業に關し施設經營すべきの者々多の者は鳳に國家の賞の賞なる者と製絲業とは今日は殖産の故を以て事業上に於ける利益を享有せしめんと願り露繰に關する善良なる者は鳳に國家の賞の賞なる者と製絲業とは今日は殖産の故を以て事業上に於ける利益を享有せしめんと願り露繰に關する善良なる者は鳳に國家の賞の賞なる者と製絲業とは今日は殖産の故を以て事業上に於ける利益を享有せしめんと願り露繰に關する善良なる者は鳳に國家の賞の賞なる者と製絲業とは今日は殖産の故を以て事業上に於ける利益を享有せしめんと願り露繰に關する善良

講演

桑樹害蟲驅除法（承前）

學士 農業講習所技師 農學士 明石 弘

（ロ）化學的驅除法

化學的驅除法は藥劑の力を藉りて害蟲の驅除を行ふ法であつて、其使用法によりて之れを四種に分つ事が出來る、一は溶液として噴霧器を以て撒布するもの、二は煙蒸として有毒瓦斯を發散せしむるもの、三は粉末の儘で飼料の類に撒布するもの、四は藥液を「ポンプ」で土中に注入して之れより揮發する瓦斯を利用するものである。

（一）溶液撒布劑

溶液撒布は害蟲の集合して居る時、又は其抵抗力の弱い時期に使用して効の多い驅除法であるが、其害蟲の種類により其液の種類を選擇し又其濃度を調酌せねばならぬ、尚茲に大に注意せねばならぬ事は、此等藥液の撒布を養蠶期中に行ふ場合には往々蠶兒に與へた桑葉を蠶兒に與へ期に藥液の撒布を行ふ事は此時期に毒せしむる事があるから、若し此時期に藥液の撒布を行はねばならぬ、成るべく毒の少ない、或は毒性の早く發散して時日を經過すれば其毒性の失せると云ふ樣なものを撰ばねばならぬ、例へば云へば「ボルドー」液の如きものは不揮發性毒物を含有して居るから、此時期に用ゆるには不適當な藥劑である。

油乳劑（除蟲菊酒精浸出液の如きものは一定時日（二十倍稀釋液なれば一二晝夜）を經て蠶兒に與へられば害の少ないものである。

菊酒精浸出液十倍稀釋液なれば一二時間（除蟲菊）を經て蠶兒に與へられば害の少ないものである。

勿論上に示めした時間は晴天の日に撒布した場合の例で、曇天の日に伐採して貯桑室に移したる場合等に於ては一週間以上を經た後と雖蠶兒に毒しめたる例があるから、右驅除劑を撒布するには晴天の日を選んで行ひ撒布後直に貯藏室に移すが如きは決して行ふべからざる事である。

左に現今廣く用ひらるる驅除劑に就き其成分製法及効用を述ぶる事としやう。

石油乳劑

石鹼　水　石油　一升

十二乃至十八匁

五合

製法は先づ石鹼を小片となし鍋に入れ之れに水を加へ、下

より熱し此中に石油を鍋の縁に入れて撒く時は、石油は湯の表面に浮び中に沸騰し始め、此兩液の沸騰した所で之れを混ぜ攪拌「ポンプ」で速かに且十分攪き混ぜる時は乳狀の半流動體となる、之れを以て使用の際五倍乃至三十倍位に溫湯を以て稀釋して用ゆるものである、此攪拌する事が不充分だと石油の分離して植物を害する恐れがあるから、液の冷へない内に充分に攪拌する事を注意せねばならぬ。

「パラフィン」加用石油乳劑

石油　百匁

石鹼　十五匁

水　五合

「パラフィン」を石油中に溶かし石鹼水と混和する事普通石油乳劑と同樣である此溶液は「パラフィン」を含む爲めに、永く植物に附着して驅除の効を完全にする効があるのである。

除蟲菊酒精浸出液

除蟲菊　十八匁

酒精　一合

右藥品を混ぜて一晝夜以上浸漬して其液を濾したもので使用の際十倍乃至二十倍に稀釋して用ゆるものである。

「ボルドー」液

硫酸銅　百二十匁

生石灰　百二十匁

水　二斗乃至三斗

石油乳劑

石鹼　十二乃至十八匁

水　一升

石油　五合

製法及効用を述ぶる事としやう。

たるを三斗式と云ふ、此驅除液は普通病蟲の驅除に用ひらるゝもので害蟲には効能あり用ひられぬ、併し此液を撒布すると（害蟲は其葉を嫌つて他に移る爲めに往々使用して有利な場合があるけれども前に述べた理由で桑樹害蟲の驅除には適當のものとは云へぬ。

以上例を示めした以外に亞砒酸鹽油乳汁等を適宜に混合して使用する方法もあるけれども、先づ普通上記のもので間に合ふから、茲には省略する事とする。

（二）煙蒸劑

煙蒸法は多く介殼蟲を驅除する場合に使用せらるゝ方法で青酸瓦斯を用ゆるのが最も効能がある、併し此瓦斯は人類に對しても非常の毒性のものであるから、注意を要する煙蒸法を行ふには棚木に「テント」を蔽ひて其内に青酸瓦斯を發生せしむる法もあるけれども、特に煙蒸室を設けて此内に介殼蟲

（樹害氏獨逸）園桑生早るたれらて立仕に橋同春今及舍官長橋設橋橋橋橋

の附着して居る盛栽苗木等を入れ青酸瓦斯を發生せしめて害蟲を撲滅する方法が行ひ易くて且効が多い、但し青酸瓦斯を發生せしむるには青酸加里に酸類を注加するを便利とする。

(三) 粉末撒布劑

石灰、硫黄華、煙草粉、木灰、

右を成るべく細かにして朝露の乾かぬ間に籠又は如露の類を以て害蟲に振りかけるのである。小甲蟲夜盜蟲等に効がある。

(四) 液體注入劑

二硫化炭素等を土中に注入して其中に潜在せる害蟲を殺すのであるが、桑樹害蟲には使用する場合は殆んどない。

乙、間接驅除法

氣温の高低、温氣の多少、天候の激變等に據りて自然に害蟲の生命を奪はるるものも隨分多いが、此等は人力の如何ともする事の出來ない事である。又自然驅除の一部として認められて居る、食蟲鳥類、寄生蟲、寄生菌の如きは人力を以て幾分か保護繁殖せしむる事が出來る、此等適當の方法を講ずるのを間接驅除法と云ふのである。

(イ) 食蟲鳥類の保護

現今保護鳥として法律を以て其狩獵を禁じてあるものが百餘種ある、此中で鶯の容姿の美しい爲めに保護せらるゝを除けば、何れも害蟲を啄食して農家に益をなす故に保護せられて居るのである、今保護鳥の主なるものを擧げて見れば燕、杜鵑、三光鳥、鶺鴒、鶯、雲雀、鵯、鵬、啄木鳥等の類に屬するものである、此等鳥類を捕殺する事は法律で許さぬ所で益に逃ぶる必要はないが、一般農家は進で此等有益鳥類を保護すると云ふ覺悟を持て貰ひたい、燕に軍鶏を借りると云ふ樣な美風は一層廣く行ふ樣にしたいものである。

秋蠶の話 (承前)

學藝諮問委員
蠶業諮問委員部
土屋泰

化性の變化、風穴に貯藏せし蠶種が、田舎して後の温度が低い爲に、長日子に亘り催青し解化するときは、其蠶より採製したる蠶種が、二化性となるものゝ如くなるは、既に述べた通りである、而して風穴内に於ける温度の關係に由りて一風穴に貯藏せし全部の蠶種が悉く此傾向を現すことがあります、即ち蠶兒が小さくなるもの、繭が短かく、倘も又小さく、而して蠶種を採製すれば、所謂再出となるものが多數である、斯の如き風穴に入れて温度の模樣を調査するのが六月末頃迄は四十五六度を保つて居るが、七月の上旬より急に温度上昇の速度が加はりて、二日間に一度宛位の割合に上りて

七月の中頃には既に五十度乃至五十二三度位迄昇る、故に七月の二十日過まで貯藏して置くと、箱の中で幾分の催青するものが見える、斯の如きものは殆んど用を爲さぬ、其處で蠶種は大概七月の十五六日までには、出穴せなければならぬ、此蠶種は出穴後五六日間にして發生するが、其蠶は前に述べた樣に體が小さくて、經過が速くて此蠶から蠶種を採製すれば、化性を變ずるのであります、此理由は云ふまでもない風穴の中で恰も順序よく完理催青が出來たのであります。

風穴は素より良穴ではない、出穴期を一歩誤れば用を爲さぬ、又無事に發生しても蠶の性質を變ずるからである、然れ共、此風穴の工合を能く呑み込んで、之を利用して居るものもある、夫れは斯うである、小數の蠶種を此風穴に貯へて七月中旬に出穴して飼育すれば、八月十日前後には上簇する、然るに世間普通の秋蠶は早きものの五節晩きものは二三節頃である、此等普通の秋蠶の模樣が不良であつて、世間の人が晩秋蠶を希望すると見込が付けば、右の蠶から種を採り、晩秋蠶種として賣り出す、若し夫並の秋蠶が好結果で桑も無駄ね消費せず儲てと認めたるときに、製種用として賣却すると云ふ、雨天續仕事である、之は餘事であるけれ共、當業上の參考として無益でもあるまいと思ひましたから、序に述べた次第であります。

佛國某養蠶家が家蠶の種蠶を水ひ行なゝ海浜の樹枝に懸るたしる塗りて去る

蠶種に關する事は、餘り長くなりましたが之で擱筆致しして、是から飼育の事柄に移ります。

飼育法

春蠶でも夏蠶でも將た秋蠶でも、理論上より見たる飼育法は一樣である、即ち蠶の發育には最適の温度(乾濕球寒暖計の示度の八度乃至七十五六度)と最適の濕度(華氏の六十七差四度乃至六度)とがある、此温濕度の中で空氣の流通を程良くして飼育し得るものと假定したならば、春夏秋蠶の別なく、何れも一樣の保護取扱ひで宜しい、然るに春季と夏秋季とでは、温濕度が頓んと異なるのである、即ち春蠶が飼育中は暑いことよりも寒いことが心配である、故に飼育者は常に防寒の設備に大部の力を費して居る、然るに夏秋蠶季は寒いことよりは暑さに苦しみ之を防禦するに汲々として居る、而も夏秋季は春季に比して、乾濕共に激變が多いのである、例へば氣温が九十度以上にも昇り、又或は飽和度(乾濕寒暖計の差が十五六度にも及ぶことがあり、又或は飽和度(乾濕寒暖計の示度が同度に達する樣な多濕のこともある)、故に飼育者の注意も一層周到でなければならぬ。

蠶の發育に最適當なる温濕度は、春夏秋蠶とも一樣なるに

も拘らず、飼育時期の氣候に大差がありますから、自然保護飼育の手續にも異なる處がある筈である、又地方に依りて春蠶飼育に適する場所と　夏秋蠶飼育に適する場所とがある更に蠶室の位置構造に就て見るも同じである、畢竟飼育時季の温度を調和して、蠶の衞生に適する樣にする上に於て難易の差があるからして來る處の結果である、今此等の事柄に就て、其大要を説明致します。

地勢の適否　古來春蠶の本場と稱へられた地方は、概ね大河の沿岸であつて地勢の展開せる廣々とした地方である、斯の如き地方は、地味は概ね肥沃で桑樹の栽植に適し、蛆害は比較的に少く、晝夜に於ける氣温の變化も亦少く、養蠶上種々の點に於て優つて居るから、蠶種製造業も發達する、從つて養蠶業が發展して、本場の名稱を附せらるゝ樣になつたであらう、又右の反對で漸く河の上流に至りて、海拔高く谿(間相迫りたる地方は、春蠶の掃立時季は晩くなるし、蛆害は益多くなるし、其上に霧は深く晝夜に於ける温度の差は多くなる旁以て前記の本場地方に比べて劣點が多いのである、故に此等の地方は、古來場末と稱へられて、繭の價までが本場物よりも安く取引せられて居る、又實際品質が劣るから止むを得ぬのであります。

　地方に依りて右の如く區別を付けたのは惟ふに往昔春蠶のみを飼育せし結果に依りたるものである、然るに現時夏秋蠶飼育の結果に依れば、殆んど春蠶の結果に依る區別と反對で場末と稱せられた地方が反て本場である、何となれば秋蠶には蛆害の患ひはないから此點に就ては何れの地方も同資格である、而して氣温は常に高きに過ぐる方であるから、夜間丈けでも冷涼となるは最も望む處であります、彼の春蠶の本場と云はるゝ地方は、晝間も相當に暑い、而して夜間になつても、山の手地方の樣に急に涼しくはならぬ、是が秋蠶飼育者の爲めに大なる苦痛である、山の手地方は成る程晝間の暑さは、平地と大差はない樣であるか、日沒頃より俄に涼しくなつて、飼育者の爲にも大に凌ぎ易いと同時に、蠶も暑さを忘れて勢ひ良く食桑して、晝間の疲勞を恢復するのである、故に經過日數も平地のものよりは長くて品質佳良なる繭が得らるゝのであります、東京附近及び東海道筋一帶の平坦なる地方に在ては、夏蠶繭とさへ云へば、繭層の薄いと云ふことは誰人も聯想するが、信州の南北佐久や諏訪地方などで出來る夏蠶繭は、春蠶繭にも劣らぬ程の繭も往々ある、又秋蠶でも八月上旬に掃立したる蠶が、平年二十一二日間で上簇する地方の繭と、平年二十五六日間を經て上簇する地方の繭とは絲量に大差がある即ち後者は前者よりも常に多量である、畢竟經過日數の長い丈け桑の喰ひ込みが多いからである、是春蠶で云ふ場末が夏秋蠶の方では反て本場なりと云ふ所以である。

　斯く云ふと晩秋蠶は氣温が低くなるから、從つて經過日數も長いが繭質は餘り優等物のないのは何が爲かと云ふ疑問を起される方もあらうと思ふが、是は他に原因がある、外ではない、晩秋になるに從ふて、桑葉が漸々粗硬となつて、滋養分の含有量が少くなるからである、略言すれば食物が不良になる爲である、故に食物の不良にならぬ初秋の候に於て、可成經過日數を延べて、食桑量を多からしめ始めて良繭を豐收し得らるゝのである、斯くするには、人爲計りては出來ぬ即ち地の利にも依らねばならぬのであります。

蠶室の適否　地勢の如何に由りて、春蠶の飼育と夏秋蠶の飼育とに對し、其適否を異にすることは、前項に述べた通りである、此關係は蠶室の構造に就ても同樣である。世間多數の養蠶家の中には、春蠶は年々好結果を得るけれ共、秋蠶は毎年思はしき作をせぬと云ふ家がある、又是と全く反對で、春蠶は上作せぬが秋蠶は毎年相當の結果を得ると云ふ家もある今斯の如き養蠶家に就て、兩者の蠶室の構造を對照して見ると、略此間の消息を窺ひ知ることが出來る。

　前にも述べた如く、春蠶季は稍もすれば寒きに過ぐる、殊に稚蠶期などは最も然りてある、故に保温に便利なる構造でなければ、飼育が困難である、即太陽の光熱に浴して室内の温暖を増すこと、火力を用ゆれば能く補温して任意の度を保ち得ると等は、缺くべからざる要件である、然るに此等の要件を遺憾なく具備して　春蠶季には飼育が容易である實は　夏秋季に至り、高温に過ぐると云ふ場合は、之を防ぐことが比較的困難であると同時に空氣の流通と云ふ點には多少の遺憾があるを免れ難い、之を以て春蠶飼育殊に稚蠶飼育室として適當なる室は、夏秋蠶飼育室としては多くは不適當である。

　夏秋蠶の飼育中は低温に過ぐると云ふことは、殆んど稀有であつて、多くの場合は高温に過ぐるのである、故に成るべく光熱の影響を蒙ること少く、空氣の流通は充分なる構造であつて室内の冷涼なることが必要條件である、此條件を具備せしむるには、間口は狹いよりは廣いが宜しい、奧行は淺いよりは或程度までは深いが宜しい、天井は可成高く四周は全く開放し得る構造となすを得策と思ひます、斯の如き室は春季寒冷の際火力を用ゆるも效力少く、太陽の光熱も容易に影響を及ぼさぬものです、畢竟人爲を以て補温して、任意の温度を作爲することは甚だ困難であります。

　春秋二季の蠶を飼育し、圓滿なる結果を得ず何れか一方は不結果に終るが如き者は、右の關係に注意せぬからであらうと思ふ、然れ共春蠶と夏秋蠶と各別に蠶室を設くるが如きは到底望むべき事でない、故に構造の上に於て前記の缺點を補ひ各季蠶兒の衞生に適する樣にせなければならぬ　即蠶室は八疊乃至拾五疊敷位を限りとして適宜區別を設け、板戶又は板壁等にて仕切り、一室每に完全なる爐を設備し、低温のときは火力に依りて各室任意に補温し得る樣なすこと、而して、高温のときは悉く仕切を取り除き氣通に便すること、又天窓欄間及び屋上の氣拔き等は、法に從ふて設備し、之が開閉に依りて温濕度を調節し併せて空氣流通の加減を自在ならしむること、床下には特に通氣窓を設け開閉自在の裝置となし、高温に過ぐるときは、床下より冷風を導き得る樣なすこと、旭陽及び夕陽は低温なる間に於ては、充分照射せらるゝを要すれ共、高温に過ぐる場合は日除の設備を爲し、温度の暴昇を防ぐこと以上の如き構造として運用を誤らされば同室に於て春秋蠶を飼育するも、上記の弊に陷るの虞少しとす。

（未　完）

蠶業界の偉人

八田達也君

編者識〻製絲界の名士多少して諸君の一傑を挙げ、乃ち今父老達を迎め人蠶業界に採り大に諸名士の經歷を叩へて其の絶倫せんとす而して本篇は實に其の大序たるべきもの或は畿逸の紆下物たらんか

勝峽の偉蹟

甲州の四周を繞みて厚く、白根の大峯(雲)を衝いて巨人の如く聳立すれば天目山名を史上に留めて悠々青粉を粧ふ、殊々として奔騰する富士川の源流を挾んで南天を指せば偉なるかな八面玉の如き英姿の儼然、雪を冠天を刻し雲を帶地を廻り亢として空際に懸る、春來逝夏、金風徐ろに七湖を吹けば芳草霜の如く、紫翔鳥と共に舞ひ、雲に乗り、水と明媚の勝峽や、此如く昔武田氏の所生にして今又蠶業地として名を全國に轟せり、武田氏の所生たり、見よ山梨縣が設かんとする八田達也君其の人の所生たり、

偉なるかな此の覺悟

君は、山梨縣東山梨郡山村の人、志村右衛門氏の三男にして母愛をたね子と呼び安政元年八月を以つて生る、家は世〻農を以つて其の業とし傍ら養蠶を營み頗る繁昌を極む、裸を農業の間に得てより既に八星霜、東西猶未未辨せずと雖も養蠶の事は自ら多くの趣味を以つて迎ふるに至り、嬉々として其の年出でて同縣、東八代郡石和村の農八田政規氏の養嗣子となり八田姓を冠す、時に明治五年なり、養父政規氏頗る仁慈の心に富み、開化の教ひ朝を扶け、一旦緩急あれば則ち身を挺して之れに赴く、當時嘉藤が氏を高めて鄕里を厚遇せるの又故あるなり、家は古へより蠶業を以つて其の業とし規氏の如きは蠶種製造を業とし前後二回、頗る敏腕の聞を高かりしが年齢漸く傾きて又其の役に任ずること能はず、遂に之れを君に譲る、君乃ち唯々として細大愚く範を父に採り八年鶏飼の副業に任じ、九年戶長に進み、抑〻其の宜しきを得たり、

抑〻(上)は雲の面を摩し下は山水の美を極め、氣候温和にして高燥、宛として天然の蠶業地をなせり

山間に介在して猶收穫十五萬石を算し生絲一万五千餘貫を產出せることを、而かも之れ實に君が熱心の致すところなりといふに至りては人の「甲州の養蠶か八田の養蠶か」といへるもの亦必ずしも浮言にあらざるを知るべし、嗚呼勝峽、偉蹟眞に移して諸君が篤とするに足らずや。

宜なる哉甲士の蠶絲世に鳴りて年久しきことや、然れ共其の時は伸ばずして月と共に後進諸縣に奇を來相傳の地として又至明治以降の衰頽特に甚しく、可惜の蠶業を廢せんとせり、君風に意を此處に用ひ日夜其の誘導から降のしめんとせり、君風に意を此處に用ひ日夜其の改良を圖ると雖も其の法未だ區々にして又如何ともすべして全く効なきの歎を所に遺し、蠶業之を移さるる歎を所に遺し、蠶業之を移さるる歎を所に遺し、蠶業之を移さるる

序的に蒐集、排列し、之れに製絲、織物、絹の一斑を加へて室内に網羅し、一順の下に鮮然として蠶絲業の全貌を通觀せしめんと欲し、自ら西奔、東走して此れが成たし、然れども思へ、今日の如く風穴を利用し究理を行ふが如き技術の知られざりし當時にありて此の如き設備を完成せんと金圓せるさへ破天荒の快事なるに其の之れを完成せるに至ては眞に常人の企及ばざるところなり況や之れに伴ふ苦心の如きは山間の運搬を画りて飛驒を移し、或は正に發生したる蟻蠶を索むるなど猶多かるべしといへるや。

かくて熱心の餘、天路に走し、若く皇國に歸へりて縣下の蠶絲業を興せさせ給ひ、賜ふに金幣を以つてせられぬ。茲に於いてか氏の威望指く能はず、蓋然として自ら一身を蠶絲業に投じて畢世の美果を結ばむことを期せり、君が後年殖産に献身的態度を以つて縣蠶絲業の發展、誘掖に力めたりしは實に之れが爲めにして人生意氣に感ずること夫れ猶孔明の如けんか。

甲絲の聲價を挽回す

明治の初年、製絲場處々に興りて頗る發賑を極めたるの概あれども其の實に於いて頗る振はざるものありしは當時の通弊として又特筆を要せざるところなり。甲州も亦明治六年の製絲場を算すと雖も曾甲乙相分離して其の間一つの統一なく固より為すあることなし、此の故に横濱市場に於ける甲州絲は常に劣等視せられ明治二十年の頃に及びては市場の信用全く地に委して甲州絲の雷名殆んど絶無となるに至れり。

縣下の製絲業者にして其の産を傾けざるは少く、爲めに甲州の財界は甚しき恐慌を來し、晴嵐として又名狀すべからざる慘狀を呈するに至る。

君時に舉られて山梨縣蠶業取締(所謂取だりしを以つて財界の要職)に就任し、爾々として會議員の選擧に當り、群馬二縣の製絲場を巡視して其の狀況を踏査し、遽に同地の絲が市場に於て最も高價を得つゝあるの所以を探明して、又長く腦横濱に滞在して其の地の生糸及び京濱有力者を歴訪して其の意見を徴し、其に甲州絲の聲價挽回策を究めたり。而して其の效果空しからず、遂に其の界不振の紋線を以つて其の任とし、一日を加へて其の厚きを加へ、之れに熱心して一日を加へて其の厚きを加へ、之れに熱心して一日を加へて其の厚きを加へ、之れに熱心して一日を加へて其の厚きを加へ、之れに熱心して一日を加へて其の厚きを加へ、之れに熱心して一日を加へて其の厚きを加へ、之れに熱心して一日を加へて其の厚きを加へ、之れに熱心して一日を加へ

明治十六年七月山梨縣東郡勝沼山村多助丸多助橋に入り勤務することせ有八年品行技術共に優れ常に他の工女の模範と爲すに足るとて本會第二回總會に於て賞狀及賞品を授與せられたり

堀き子ぬ

の原因全く共同の檢査を缺き、荷口を定めて荷爲を多からしめざるに存せることを發見するを得たり。乃ち共同掲枠場を設けて品質の統一を計り、商標を厳定して問屋の信用を獲回せるは之れを救ふの最大急務たるを覺じ、若し皇縣に歸へりて縣下の蠶絲業を興せるは之れを唱道して其の救濟に力めり以つ

すること、せり。

蠶種は昨年秋期水原蠶業模範場に於て飼養製種せられしもの三紙分に於て全部發生し而かも六月五日郵送せしものなり而して郵送中約二分の一の鷄蛋を認めたり。

飼育供用蠶種は前述の如くなるを以て當所に着後直に檢機の嫩芽を代探し來り之に放飼し、水を充たせり、而して飼養樹を挿入し以て之に移飼せり、蠶は第五齡にして、第三齡之に次ぐ、第四齡第一齡より第二齡順次之に次ぐ、第四齡第三齡より食桑時數少くして眠中時間の之に反するは恰かも家蠶の海外に於けるが如し。

蠶期中に於ける天候は概して適順なりしも、第一、第四齡は共に數日間の降雨を見たり而して第二齡は一日の小雨ありしのみ、而して第五齡は一日の小雨ありしのみ、而して驟雨の際には蠶兒は食桑することなく葉裏に雨を避くるも、小雨の終日續降するときは依然食桑をなすなり、蠶兒の發育は概ね佳良なりしも蠶の多きには一齡を見るに、蠶種の着しとき、已に昏鈍なりしと、蠶の衰弱せしに基因するやの如きなれば、若し其結果豊收を期せり、而して檢査の時は蠶種の着しとき、已に昏鈍なりしかしを以て頭數調査を行はず直に食葉せしめ、翌朝に至り之が調査をなせしに、多くは墜落

(廣野氏岡長)

第一齡 一七本 一尺一二尺
第二齡 一五 一尺五寸一二尺
第三齡 三 同
第四齡 四 二尺一二尺五寸
第五齡 八 二尺一二尺五寸
合計 二二 一一 其他蠶の成長に從ひ稍硬葉を用ひたり而して枝葉の挿替は大抵毎日之を行ひ時々挿加せしこともあり、又水の入替は隔日に行ひ其

	黒野	枝葉數	枝	葉	長

但し枝葉挿入に用ひし水壺は終始一個なりとす。

斃死し生存せるものは僅々二百〇七頭に過ぎざりし。

第一二齡中に斃死蠶は發送途中發生に基因せるが如く、而して全部發生し而かも當所に着せしときは不幸にして已に蠶に食葉せられしものなるべく、只第二齡及第五齡に二頭の病蠶を認めしのみ、而して其病蠶たるや第五齡に至り體軟にして輪少く食葉不活潑にして十日目に至り體色に黄褐色に變じ稍軟質を帶び腐爛の支持力を失し地上に墜落し、遂に斃死せり、或は俗に云ふ「あんず病」ならんか。

今各齡枝葉供給表を示せば左の如し。

農學士 長岡哲三郎

十二 機械

練絲は機械前に之を行ふこと稀れにして、多くは繊問には單に新水の注加をなすに止めたり。

表 牧繭表

上蔟繭	皮薄繭
三二	二

二七匁

牧繭の重量は前已に述べたるが如く、繭見が蠶種發送中の少きは體質衰弱せしに基因するやの如きなれば、若し繭見が蠶種發送中の多きには一齡を見るに、蠶種の着しとき、已に昏鈍なりしかしを以て頭數調査を行はず直に食葉せしめ、翌朝に至り之が調査をなせしに、多くは墜落

韓國の蠶業

長岡哲三

上げたる繊物を木灰汁に浸漬するものにして、其詳しき方法は再三反問を試みたるも要領を得ざりし。

機器 韓國の機器は日本の「イザリバタ」に似たるものにして粗造なる材料を以て造り、機器なる機織は單なる機織なり、農家には其内房中に大抵一臺の機器を具備し絹織、綿織又は綿織なる機織なるが故に左右に之を交換するには到底迅速なる働作をなし得ざるなり。

工程と製品 生糸を一匹に要する丈の全量を長く引張り米を糊を用し火鉢に火を盛りて糊分を乾燥したる部分を長七八寸の管に巻き、漸次全部を數多の管に巻き取りたる之を検査の中央部に入る、而して技術の巧拙を抽出し、布部に被し、絲の繊丈けに出し、微々なる働作を要する丈の全量を長く引張り、張力を附し、而して技術の外に製品に基因して包裹に相違により、同一ならず、繭より同一なる

に就て賣買を行ふを常とするもの、如し、韓國に於ける市場は各所に日を定て一ケ月四回或は六回に開かれ、京城平壤等の如く大都市にありては、何朝青物、魚類等の市場を開始すれども、附近各部落より各々其生産物を携帯して集り、絶へず賣買するもの、如く思はる、是生産者は度量衡器を携帯せず（大なる量器を所持せざるもの多し）市場設置の度量衡器によりて賣買するを常とすれば、殆んど絶へず相異した度量衡器を用ひて使用する農家が殆んど之れなく、殊に市場に於て使用する度量衡は特別に設置しある所多し

商業者に販賣するの周旋をなす只に品質の鑑定評價をなすのみならず、客主は絶へず重要の斡旋を行ふものにして、賣買に關しては、殆んど絶へず利を有するもの、如く思はる、是生産者は度量衡器を携帯せず（大なる量器を所持せざるもの多し）市場設置の度量衡器によりて賣買するを常とすれば、殆んど絶へず相異した度量衡器を用ひて使用する農家が殆んど之れなく、殊に市場に於て使用する度量衡は特別に設置しある所多し

商業者に販賣するの周旋をなす只に品質の鑑定評價をなすのみならず、客主は絶へず重要の斡旋を行ふものにして、賣買に關しては、殆んど絶へず利を有するもの、如く思はる、是生産者は度量衡器を携帯せず（大なる量器を所持せざるもの多し）市場設置の度量衡器によりて賣買するを常とすれば、殆んど絶へず相異した度量衡器を用ひて使用する農家が殆んど之れなく、殊に市場に於て使用する度量衡は特別に設置しある所多し

十四五錢内外
三十錢乃至四十錢

十四五錢内外
三十錢乃至四十錢

鍋　我一斗
生米我十斗

織物

一、織物　一匹

上　一圓七八十錢	我五十尺内外十匁
下　一圓五六十錢	乃至六十匁の物
中　一圓五七八十錢	上七十匁内外七十匁
下　一圓五六十錢	中七十匁
	下七十匁

織物は所の如く一匹の只重量共に場方により久生産者の手加減によりて異なれとも必ず一匹を以て賣買の單位とするもの、如し

二、元錢　我一尺

上　十八六錢	元錢は匹を以て賣買せずして尺を以て單位とす是は系種其他に關用する數
中　十五六錢	量は織物の如く多からざる爲めか農觀も亦織物に比し遙に少きものゝ如し
下　十二三錢	

伸　弁　錢　錢

伸弁錢は織物に比して賣買せずして尺を以て單位とす是は系種其他に關用する數量は織物の如く多からざる爲めか農觀も亦織物に比し遙に少きものゝ如し

錢を織物にあては、綿一匹に付五錢元錢にありては一尺七錢づゝの日錢を共に賣買兩者より支拂ふと云ふ、又客主は

（贈答氏寄贈）

農業模範蠶桑及蚕種一部

手を經由せずして賣買する場合にありては販賣者は購買者に韓尺十尺毎に一尺を寄進するを慣例とすと云ふ。

十四　一般農業と蠶業

（一）作業上の關係

韓國は冬季寒冷の時期比較的長く秋冷を覺すること頗る早急なるが故に農作物の播種、移植等は勢ひ之を晩春まで延しめざるべからざる事情あること日本の東北地方と相似たり、故に厳冬期に於て初夏の候に於ては農作物の耕種と作業上衝突すること多く、婦女子は蠶兒を養ひ得ざるも亦鋤り蠶室蠶具の設備完からざる爲めのみに切を缺くは勢ひ已むを得ざることにして一時に多く蠶兒を養ひ得ざるも亦鋤り蠶室蠶具の設備完からざる爲めのみにあらざるなり、然れども夏秋蠶を飼育するの時季に至れば農作物の播種移植既に結了して繁劇の度を減ずるが故に作業上の衝突少く婦女は專ら蠶に從事するを得べし、併しながら夏季に飼育し得る蠶の種類あるを知らざるもの多く、或は双因襲の久しき夏蠶も春蠶と同樣作業上の衝突多きものの如し。

居る爲めか、秋蠶夏の飼養は未だ其度量に欠かも自らなるのみならず、蠶室の規模其他小にして且通歩せざるとは蠶兒に作業上の關係のみに止まらんや、寧ろ經濟上の關係に頗る重大なるものあり、何となれば彼等の養蠶は極めて單純にして婦女子が自己の家業と百家の蠶種

（二）經濟上の關係

養蠶の規模其他小にして且通歩せざるとは蠶兒に作業上の關係のみに止まらんや、寧ろ經濟上の關係に頗る重大なるものあり、何となれば彼等の養蠶は極めて單純にして婦女子が自己の家業と百家の蠶種

對清蠶業案

（承前）

在上海東亞同文書院　渡邊繁三

第四節　結論

以上述ぶる所の三案は互に相連關すれば等しく之を實施するを可とす、等しく之を實施すれば首尾呼應し、損益補償し經費節約することを得損失を招ずるの機會少く利益を博するのとを用ひ有り合せの家具を以て居宅の内房に蠶兒を飼育し收繭を自家用の織物とな し、剩餘あれば之を賣却するに過ぎざれば、今日の場合蠶の豊凶は彼等の家計に至大の關係を有せざれば なり、又交通の不便なる山間地方にありては自家に要する所の食糧及其他の物料は各自の生産に待つの必要あり、專ら天に依る水田にありて来る收穫のみ如くに水に至るまで彼等日常の必要する草藥用品の如きに至るまで彼等日常の必要する水稻の如き水利の便全からざる山間地方に於ては大抵自ら生産して他に供給を仰がずと云ふ如く、假令有利の産業あるとて云へども、故に水稻を植ゑ、或は陸稻を栽培して米を收むるが如く其他燃料を編なる鎮國主義を固執する狀況なり、況んや富あるも必ずしも常然なるも常然なる狀況の如く、生命財産の安固ならざる狀況の下に生存しては産業奮勵をさへ防ぎ得れば足れりとして進んで殖産の業に勉むるを敢てせざる政治上の關係あるに於てをや。

機會を多くせねばならず、誘い少しく其理由を述べしめよ。

第三、業に於て養蠶工場を設くと雖も、固と四隣の養蠶法を改良し、改良の蠶種を販賣する目的に出て、之を產繰工場及機械工場の原料に供するにあらず、從て產繰機械の兩工場を內地の農家に求めざるべからず、內地の農家に求めんとせば大消費者例に據り蠶行を設立せざるを得ず、蠶行の買收する繭と產繰工場の生糸と農家の販賣を委託せる生糸とは海外に出し、又は海外に輸出し、絲綿と及繭とを海市場に售出し、又は行買商の中間を担ぎ、利益を借らざるべからず、是れ其三つのもの等しく設立せざるべからざる第一の理由なり、蠶行は生繭買入の時に要あるのみにして、平生之を設立せざるのみならず、而して之を設立するには莫大なる生繭貯藏所及買入事務所とを用ふるに、其大なる生繭期節數十日間に用ふるのみにして其他は空しく其不經濟なる甚だしと雖ども、若し養蠶製種、產繰の諸工場と併せ設立せば其費用を節約することと大ならん、上海に產繰工場及農家の委托せる繭產繰絲の製造を兼ねしむるとなからん、假令三者共に損失を蒙むるとなるも、產繰絲の委托販賣より生ずる利益少からざれば、之を補償して餘りあるべし、是れ其三つのもの等しく設立せざるべからざる第三の理由なり、若し此三つの

吉田きんこ子

明治十七年七月由彩鶴東京鶴鶴鶴山村多丸多勢製絲に入り勤勞すること廿有三年品行方正技術優等の故を以て本會第二回總會に於て賞狀及賞品の授與かゝりたり

繰工場及農家の委托せる繭產繰絲を販賣し、自己の原料たる繭の貯藏所には繭行の買收に係り海外に輸出する繭と農家の販賣を委託せる繭產繰絲とを併せ貯藏し、己の製造せし機械絲の貯藏所に內地工場及農家の委托せる繭產繰絲とを併せ貯藏するの必要少からざらん、其上海工場及農家の委托せる繭產繰工場及農家の委托せる繭產繰絲を販賣し、自己の產繰工場及機械工場の原料たる繭の貯藏所に入れば彼此の

問答

除沙と糊糠に就ての質問

岐阜縣 通常會員 武山米太郎

蠶兒の四五齡期に除沙を普通一日一回又は二回とし、其間に糊糠を使用する給桑毎に糠を用ひずして、除沙を行ふとは、何れが蠶兒の生理に適するや、御教示ありたし。

答　農學士 川島勝次郎

蠶兒四五齡期に除沙を一日一回又は二回にすると、給桑毎に糊糠を用ひて除沙するものとを比すれば、生理上後者の方が利があるやうであるけれども、温度、湿度及其他の關係にして、しき不利の狀態にあらざる限は、前者を採りて毫も妨なきのみならず、實際上多數に蠶兒を飼育する場合に於て給桑時に除沙するやうのことは困難であろう。

湿連法に就ての質問

岐阜縣 通常會員 井川茂兵衛

發蟻前に當り湿連法を施すと施さゞるとは、何れが結果良好でせう、強なる試驗成績を御示教ありたい。

答　農學士 土屋泰

（乾湿計の示度七度以上なる場合は湿連法を施したる方、發生齊一なるに近い、然れども乾湿計の示度六度以下なるときは、湿連法を施すの必要はない、而して發生後の蠶兒には著しき影響はない。

蠶兒の色澤に就ての質問

長野縣 通常會員 永富久一

會報第八三號所載上田氏の質問に對する林學士の御答によれば、蠶兒は青白いが通例で、赤味を帶ぶるのは健康の狀況とのことでありますが、余が是迄の經驗によれば、夏秋蠶は、イッも青白色であるけれども、春蠶は毎年櫻色に成熟するものである。余は近年主に又昔を飼育しましたが、蠶兒の發育良好なるものは、殆んど凡て此美麗なる櫻色を呈します、而して其二週の不變色蠶兒は概して發育不良にして不思議に堪へない。右の御説明が實に現れ蠶となるものに多いのであります。

本年又昔と青熟の二種を飼育しましたが、熟蠶の色澤は曾て上出來のものと思て意に介せずに居たのであります熟るに赤味を帶るのが病的であるとすれば、抑如何なる理由でありませうか。

答　農學士 林驛作

本誌第一八三號にて上田氏の質問に對し、蠶兒の色澤は青白いのが健全で赤味を帶ぶるのは病的であると云ふたが、是は食桑期に於ける蠶兒に就て謂ふたのである、殊に熟蠶の赤味を帶ぶるのは赤熟は勿論又又昔も青熟が然りである、一般に云ふと飼育日數の長き種類は熟蠶が赤味を帶ぶる樣である、是は種類に固有の色澤で、決して病的ではないのである、私が先に答へたのは此熟蠶に就て云ふたのではない、或は言葉が足りないために誤解を招いたものと思ふ故改めて此に御答へ致します。

煙草中毒其他に就き質問

三重縣 通常會員 西山幸吉

（一）私の地方は畑のみにして田更に無く煙草を栽培する者多き、私のみ養蠶し、桑樹を栽培しましたが煙草の蠶に對する害は如何なるものですか教へて下さい。

（二）本年春蠶飼育中蟻につかれて困却しましたが、又二化性に上蔟後繭につかれ豫防に困りしました、良き豫防法あらば承りたい。

答　農學士 林驛作

（一）煙草畑附近の桑葉の蠶兒に對し害の有無は煙草の成熟の如何に依る、即ち通例煙草の心止め期以後に於ては附近の桑葉は有害である、其以前に於ては毫も害毒を及ぼすことなし、但し煙草のヤニ多き種類又は肥培不充分にして成育遲延、敗成熟早きものは、桑葉に害毒を及ぼす時期早し、此を以て煙草畑附近の桑葉を以て秋蠶を飼育するならば、可成早くこゝを用ひ、煙草の害毒を及ぼす時期に至つたならば決して之を用ひてはならない。

（二）蟻の襲來するのを防ぐには蟻の來る入り口の所に砂糖を置き、此處に誘致して驅除するを可とするのである。

白種と黒種とに就ての質問

神奈川縣 通常會員 村田光之丞

（一）白種と黒種とに熟れが飼育上及收穫上宜しいでせうか。

（二）白、黒の兩種に同一蟻量で飼育上桑葉の消費高何れが多いでせうか。

（三）秋蠶飼育中氣候高温にして微風だに無く、多温なる場合に於ける處置方法及同じく蠶兒就眠中の取扱方法等を御垂教ありたい。

答　學務委員　八田達也

(一)蠶種にして精良ならば白種、黑種とも飼育其他に多分の相異はあるまい、乍併是迄の事實を概言するときは、白種の方が比較的失敗多く成蹟不良なる樣である、蓋し白種は原蠶の飼育期中動もすれば不良の天候に遭遇し、運搬上にも不便であるし、且極製となして病毒を驅除するに不便なる等は此因をなしたものではないかと考へる、此點から推して余は黑種を優れりと信ずるものである。
(二)同一蟻量に對する桑葉消費高は蠶兒の發育如何に依つて多大の差を生ずるから、一概に云ふことは出來まい、余は之に就き實驗がない。
(三)秋蠶飼育中蒸熱に苦む場合は室内を開放して可及的空氣の流通を圖り、除沙を頻繁にして蠶座の清潔を保ち時々籾糠を撒布し、一回の給桑量を減じて給桑回數を增加するを可とする、蠶兒就眠中の場合で除沙が堆積して過濕の患があらば蠶沙を割りて畦立たせ籾糠又は炭糠を少量に撒布し乾燥を圖るが良い、而して此際起蠶は劇しく運動して食を欲する狀を示すので未だ眠蠶あるに桑付を爲すものもあるが、夫れは宜しくない、蠶兒にして左程不齊ならざる限りは起揃つて後桑付して差支ないのである。

「フォルマリン」撒布に就ての質問

山形縣通常會員　齋藤藤藏

(一)「フォルマリン」撒布後尙臭氣ある内に蠶兒を掃立て差支なきや、若し差支あらば掃立前幾日位に消毒して宜しきや承りたい。
(二)「フォルマリン」を撒布して其激臭を掃はんとするに藥品あらば承はりたい。

答　學務委員農學士　辻暢太郎

(一)「フォルマリン」撒布後直ちに蠶兒の掃立をなすは良しからず、一二日經過後「フォルマリン」の臭氣なきに至りて行はねばならぬ。
(二)「フォルマリン」を以て消毒せる室は大抵一二日間開放し置けば瓦斯を揮散し去るものなれども、尙ほ激臭を存するときは稀薄の「アンモニア」水を撒布し「アルデヒード」の臭氣去りたる後掃立を行ふが良い。

風穴に就ての質問

長野縣通常會員　三尾熊之助

(一)土用中華氏四十五度以下の風穴へ八月廿日頃まで蠶種を貯藏すれば害がありますか、害があるとすれば、其の程度を伺ひたい。
(二)風穴內へ貯藏せし蠶種が死して白はぜになることがあるこれは溫度の關係によりますか、乾濕の度によりますか、貯藏の時期によりますか、蠶種の強弱によりますか伺ひたい。

(三)風穴へ蠶種貯藏の時期は風穴內外の溫度平均の時を可とすると稱ふるものがある、貯藏の好時期を伺ひたい。

答　學務委員　八田達也

(一)氷穴にあらざる普通の風穴は曇天又は雨天に會すれば多少昇溫するを常とするものであるが、問者の土用中四十五度以下とは霖雨の際にも保ち得る溫度なるや、果して此の如き風穴であるとすれば八月二十日頃迄の貯藏も多分の害はあるまい、若し被害ありとするも其程度等は明言し難い。
(二)死卵の原因は風穴貯藏前に於ける保護の不適、風穴內溫度の劇變、及濕氣の過多、貯藏時期の不適、蠶種の性質二化性に近き者若くは不良種等諸多の關係に依るもので、以上の諸因は交々錯雜するから其主因を認むることは難いのである、乍去風穴貯藏前又は貯藏後に於ける不時の高溫は尤も被害の因たる樣に思ふ、「白ハゼ」の原因も又た明でないが、風穴內の高溫に依りて一旦胚子の發育を初めたものが、其後溫度の變動に逢ひ極めて不順當なる發育を爲したるに依るものであろう。
(三)蠶種貯藏の時期は風穴の種類に依つて差異がある、即ち普通風穴では問者の云ふ處の如く、內外溫度の均一なる二月下旬頃を以て可とするも、常に氷點の低溫を保つ氷穴に在つては實驗上一月から四月初めまでは四十度內外の場所に置き、爾後氷穴內に貯藏するを可とするのである。

說林

輸送に要する蠶種容器改良私見

通常會員　中島多壽太

我國重要輸出品たる蠶種の產額をして一層增加せしめんとするには蠶業の發達を圖らざるべからず。今や官民一致して蠶業研究の改良發達に盡さんとす、寔に喜ぶべきの事なりとす。卵も養蠶業の改良發達や飼育の術技桑の事に從つて頗る大なりと雖も、亦蠶種の眞否が莫大の關係を有するは言ふを俟たず、然り而して製種家の技術と蠶病豫防法とは相俟て純良なる蠶種を得可しと雖も、其蠶種を一地方より全國各地に輸送するに當り、其容器の不完全なるより、蠶種の衛生を害すること少なからず、折角の良蠶種も輸送中の被害により斃斃となり、甚しきは多くの死卵を生ずるに至るものあるを見る。

從來蠶種の輸送に用ひられたる容器は舊慣に依るものは木製箱を用ひ、其收容方は越年種にありては、或者は蠶卵紙を其儘需用者若くは發送者の意に任せて幾枚にても相重疊し、或は二つ折となし、生種に在りては四つ折りとなし收納するを常とせり、而かも箱は單純なる製方にして內部に何等の裝置なし、蠶卵若くは蠶卵紙は箱板と相接密す、又普通携行するものは行李或は相同樣の箱を用ゐ、其行李に入るものは大抵二つ折又は四つ折りとなし、而已ならず空氣の流通自在にして二化性第一化より製產せる蠶種の如きは、氣候炎熱の時季なるを以て携行途中或は燕くるが如き高溫を感ぜしめ、或は非常に冷涼なる低溫に觸れしむ、而かも其硬化の急劇なる場合尠なからず。

前記輸送器によりて蠶種の衛生に不良なる狀態として實見せしもの及理論を列記すれば。

一、多くの蠶種を相重疊密納するときは空氣の不足を來し、長き輸送に於ては必ず蠶種の健康を害す。

二、蠶種を重疊するときは摩擦によりて蠶卵の脫落するものあり、又時には壓潰せらるゝものあるに至る。

三、蠶卵紙を折りて容るゝときは其折目に於て著しく前項の被害あり。

四、蠶種の壓し潰されたるもの長時間に沸れば腐敗醱酵し空氣を不潔ならしむ。

五、容箱の內面に接する蠶種は箱と共に直に外氣を感じ易く之を避け且空氣の容積を多からしめん爲めに、一時的裝置を爲すものなきにあらずと雖も、何れも皆不完全にして爲めに蠶卵紙は箱內に於て動搖し卵粒の脫落するを免れず。

六、旅行李中に容るゝに至りては、殊に外氣の透通するを以て夏季炎暑の候の如きは、九十度以上にも達する高溫を感ぜしめ、又急劇なる氣候の變化によりて忽然四五十度の冷氣に觸れしむるのみならず、或は火氣に接し或は異臭を感ぜしむることなきを保せず。

以上列擧せるものは其主なるものなり、即ち之等の諸點を避け得べき完全なる容器を用ゆるは養蠶業改良發達の上に於て焦眉の急務として改良すべき蠶種保護上の最重要事なりとす。若し夫れ製種家或は養蠶家等が其自己の養蠶場又は貯藏室等に置くの間に於てのみ、蠶種の貯藏保護に熱心綿密なる注意を拂ふことありても、中途輸送期間に於て不良なる狀態にあらしめんには、其前後に於ける總ての注意あらゆる心勞も全く瓦解に歸すべきなり。

蠶種をして其輸送中の不良狀態に在るを避け、前列記の否點を改良し得べき容器は左の各項に適合する箱を用ゆるを最良とす。

一、蠶卵紙を折り曲ぐることなく其儘收容し得べきものなるべきこと。

二、蠶卵紙を重疊することなく各間壹式分の間隔を有すること。

三、收納せる蠶卵紙の周圍も箱と相接着することなく、即ち箱と蠶卵紙との間に於て各邊共皆相當の間隙を保たしむること。

四、箱內に於て蠶卵紙の動搖せざること。

或は言ふものあらん蠶種輸送中保護の必要なるは今更用くを俟たずして何人も認むる所なりと雖も、現今行はるゝもの以外之に優る良法なしと、之れ一應理なきにあらず、然りと雖も何ぞ夫れ識者が改良進取の氣象に乏しき事如斯なるや社會百般の事物何れも皆悉さを改め足らざるを補ふ事に勉め力を竭し心を勞し專ら利益の享受に勗むるは之れ人の情なり、之れ以上に良策なしとして恬然其不利を改めん事に意を碎かざるは固陋と云はんか。

不肖卿か茲に見るあり多年蠶種製造販賣の營に從ひ其輸送箱の不完全なるを憂ひ今や改良の考案全く成り從來用ひ來りしものゝ不完全不利益なる總ての點を改良し、最も安全に輸送し得べき即ち前記改良すべき諸點に恰適せるものを發明したり而かも其箱は安價にして從前の蠶種輸送に用ひたりし箱に比し、約二倍の實用を以て製造し得らる、此箱は獨り輸送に適するのみならず又實に貯藏箱として最も完全なるものたるを信じて疑はず。

蠶種を輸送するに用ゆべき容器は、蠶卵の生理を害する虞なきものならざる可からず、今や上下一致蠶業の改良發達に力を竭すの時、蠶病の豫防、蠶種の檢查生絲檢查、風穴取締等の事は法律命令等によりて取締法の制定せらるゝありと雖も、蠶種の輸送保護に就ては何等の規定せらるゝなく、蠶種保護上の危慢默過するに忍びざるものあり敢て當局の顧眄を煩はし當業者諸士の反省を望む。

養蠶奬勵に就て

通常會員　永富久一

余が地方にて蠶業の振はない理由は第一桑葉不足の爲なるは勿論の事であるけれども、抑又第二の理由なきにしも非ずである。兎角一般農家は、養蠶は是れ富有者の仕事である、而して養蠶は難事にして而かも田畑の耕耘に影響すとの觀念があるのと、今一つは繭の處置を知らぬ爲めではあるまいか。從來當局者も桑樹の植付には最も留意して居られるけれども、一般農家に對して獎勵する方法には決りに意を用ひて居らぬではないかと思ふのである。孰れ彼等小農者に飼育を奬むるとしても、一戸蟻量半匁內外なるべく、誠に微々たるものではあれど、假りに千戸を有する一小農村ありて、此內五百戸の小農が春秋二回の飼育をなし、毎戸一斗の繭を得るものとしても、實に五十石と云ふ多額に達するから、少數なる富有者に對してのみ、富有的飼育を奬むるよりも傍ら多數なる貧者に簡易飼育を奬むるは急務ではあるまいか、斯くして彼等が多少此道の知識を得、其利益の戀を覺る後に於て、初めて漸次學理的智識を注入するが順序ではあるまいか。

桑葉だに充分手近にあれば普通の農事には格別の影響を及ぼさずして飼育し得るは容易であらう、余の隣家に夫婦二人の農家ありて、田畑は人並に耕作し而して妻なる一人は毎年春秋二回蟻量半匁位づゝ飼育しつゝあり、余は此者の飼育法に多大の興味を有するもの、故に其特異の點を述べ學者先生の御參考にし、而して小養蠶は極めて容易なるものなる事を述べたいと思ふ。

彼は掃立より成熟に到るまで給桑は大抵一日三回乃至五回即ち早朝一回、朝飯後一回を與へ、田畑に出て晝飯の際第三回を與へ夕刻繭を初むるとき第四回、就眠時に第五回を與ふ、但し此五回の給桑は大に蠶兒を優待したる時にして女一人の事なれば桑摘の爲めに通例三回乃至四回を與ふるを常とす、而も蠶沙は堆積して小山をなし分箔の已むを得ざる時に非れば除沙せず、斯の如くなれば飼育日數の稍長きを要するは免かれざる處なるも、發育は毎期概して佳良、成繭又決して劣等ならず、夫れで普通の農事には何等の障害をも與へる事はないのである。

兎角富有者的の小養蠶家は餘りに蠶を大切にし過ぎて、所謂御座敷飼をなし障子襖を密閉し、甚だしきは、紙張飼をなすから、取扱上の誤りを生じ易く爲めに却て成績不良なるを免かれぬのである。之に反して一間造りの百姓の家屋に於ては、自然的換氣を有し、破れ障に破れ戸は空氣の新陳代謝を完全ならしめ給桑回數尠きは蠶座の乾燥を充分ならしめる等の特點あるを以て、概して失敗を生ずる事が尠いのであろう　養蠶は易くいへば斯の如く容易なるものであるものを、兎角彼の完全なる蠶室のみにて無缺なる器具器械を使用し、博士や學士の學術的飼育法のみを學べる技師や教師が、斯る簡易にして而も蠶の生理に戻らざる方法の在るに心付かず、常に規則的に飼育法を教ひ、蠶病の恐るべき事など六ヶ敷事のみを教へらるゝから、却て不振の基となるのではあるまいか。

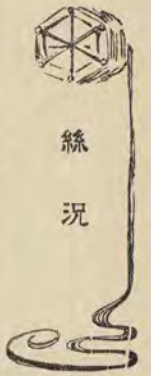
故に余は當縣の如き概して蠶業の幼稚なる處に於ては、其試驗場又は講習所等に於て、前例の如き所謂簡易養蠶の試驗をなし、以て一般の農家に養蠶は斯の如き簡易なるものなる事を知らしめ、奬勵するならばと思ふのである。現に充分の桑を所有しながら、養蠶は六ヶ敷きもの〳〵閑人なる富有者の仕事であると諦らめて、貴重なる桑を買人の到らざるも敢へて意とせず、其落葉するに任せて居る有樣ではないか。

次は繭の處置を教へる事である。兎角單に飼育の事のみを教へる、巡回教師は成蠶の石數調査を終れば、直ちに急で引上げるから、飼育者の經驗なきものは繭は得ても其所置を知らず、現に少許の養蠶をなすものも彼等は大概製絲に經驗したる者を雇ひ、馳走をなし尠からざる給金を與へて、僅かの絲を得滿足しつゝあるも何となれば此時や既に麥作の收納期にして、農家の一煩も躊躇し能はざる最繁忙なる時季であるからである、又多くは殺蛹の法を知らず、よし又其法を知るとするも農繁は到底其實行を許さぬであらう、故に於て繭共同販賣の方法、共同殺蛹貯繭の方法ある事を教ひ、其仲介の勞を執り而して養蠶は、彼等の考ふる程農事に障りなき事を教へねばならぬではあるまいか、斯る事は實に、貴重なる紙面を汚すに足らぬ一顧の價値だになき事であるけれども、然れども其除りに價値なき事なるが故に説明甚に到らぬから、彼等經驗なき者は繭は其儘之を賣却し得る事だに知らぬ者が多いのである。

要するに獎勵の第一着として毎戸其附近に數本の桑樹を植付けしめ、次に養蠶は簡易にして農事には甚だしき障りあるものに非る事を知らしむるが急務ではあるまいかと思ふのである。

口静を管理せよ是れ君王の在す宮殿の門戸なればなり
君王の面前に出す言語は平穩柔麗鄭重なるべし

エドウヰン、アーノルド



絲況

横濱市場

十月上中旬に於ける横濱生絲市場は其賣行き良好なりしも其後倫敦の銀貨相場暴落せしより、對清爲替の關係上、支那生絲の荷動き旺盛なるべしとの氣構ひにて、内外商共に手控への態度に出で市場個に鏈狀を呈し、爲に中旬に一千二百四十五圓迄昂進したる絲價は、下旬に入りて急轉直下千百九十圓と低落し、更に米國財界の恐慌は一層絲況を不振ならしめ、月末に於ては遂に千百廿圓となり、滔々下落の趨勢は殆ど停止する處を知らざりし。而して本稿を草するの當時相場の先騙を爲せる定期絲の如き、百圓五十錢の安直をさへ唱ふるに至り信器上一番一千五十圓てふ本年度製絲の最低價を示しし、も、尚買人なきの有樣にて實に暗澹たる光景を呈したり。

之れを以て全月中の手合高は、前年の同月に比すれば殆ど半減して一萬八千個に過ぎざりしも、幸ひ其數量の大部分は二千百二三十圓臺の高値に賣行きたるを以て、結局輸出總額千六百七十四萬圓に達し、一月以降の輸出總額は九千九百九十七萬餘圓となりたり。

而して最も高價に賣行きたるは山梨縣甲南社及埼玉縣森澤製絲細千四百六十五圓にして、最も低價なりしは長野縣林組太千百二十圓なりとす。例に依りて今年一月以降の最高價と前年の夫れとを比較對照すれば左の如し。

生絲最高價月別前年對照表

明治四十年		明治三十九年		價格之差
一月	山梨縣矢島組金太	一、三二一五	愛媛縣河野製絲大	一、〇九六〇
二月	山梨縣矢島組金太	一、三〇〇	神奈川縣見弟社組	一、〇九〇 二一〇
三月	岐阜縣金喜製絲組	一、四〇〇	山梨縣風間製絲大	一、二二〇 二八〇
四月	東京府羽村錦	一、四五〇	埼玉縣玉製絲太	一、二二〇 三三〇
五月	群馬縣交水社堀鶴座	一、四三〇	愛知縣國寶社組	一、〇八〇 三五〇
六月	山梨縣矢島組金太	一、三一〇	愛知縣國寶社組	一、〇〇〇 二一〇
七月	埼玉縣森澤製絲組	一、四一五	愛知縣國寶社組	一、〇八〇 三三五
八月	埼玉縣森澤製絲組	一、四五〇	山梨縣矢島組太	一、〇九七 三五三
九月	靜岡縣城南社組	一、四七〇	靜岡縣川津製絲	一、一一一 三五五
十月	山梨縣甲南社組	一、四七〇	靜岡縣城南社組	一、一一一 三五五
十月	埼玉縣森澤製絲組	一、四六五	山梨縣矢島金太	一、一五〇 三一五

毎年横濱號馬會前後は市場に一變化を來すの例にして、昨年は恰も此時に當り、米國の大注文現はれ市場俄に活氣付きて、遂に一千九百萬圓の輸出額を呈げ、之より漸次賣行良くして十一月に千四百萬圓、十二月に千二百萬圓を出しし、が本年は果して如何の趨勢を現すべきや、素より之を推知するに難しと雖も、本邦製絲唯一の顧客國たる米國の情狀を觀

に、昨年の當時とは大に其事情を異にするものあり て、四圍の狀況等の不況なりと云ふて可なり、此時に際し前途を樂觀し荷主に於て賣盛るが如きことあらば、或は意外の結果を齎すことなきを保せず、尤も本年度製絲は何れも原料高値に當り居れば、昨今の千百二十圓見當にては或は損失を免れざらんも、要は大體に於ける成効にあり、高値を望みて荷物を停滯せしめんより安値にも賣盡じて、市場の鍵全を計ること肝要ならんとは雷て時事紙に記載せる所なり當業者或は以て箴となすに足らんか。

尚左に本月中の生絲集散種別表を掲げて參考となさん。

明治四十年十月自一日至三十一日生絲集散表

尚左に生絲集散日別表を掲げて參考となさんと

項目	入荷	手合	賣了	引渡	輸出	地方別	國名	社名	最高價	最低價	摘要
一日	一、二二二	三四八	一、三四七	九〇		三六	信濃	明治	金太		
						岩代	後東	北社	鶴〇	一、二一九五	商談少しく減じたるも異狀なく手堅く持合へり
二日	一、一七〇	四三一	一、二二四			一六	信濃	河	組	一、二七七五	細筋物には商三館殊々買强かりきりし
						一三	信濃	口	組	一、二八〇	小工合に不揃ひ
三日	五五五	八三	七三三	二二		一	小	富製	館	一、二八〇	大社二羽
四日	一、三五〇	五三	八〇一	四三	二二、二五	二四	相模	上野	大	一、二二八〇	上野安大
						二四	相模	上野	大	一、二二八〇	上野安大
						二四	相模	上野	大	一、二二八〇	上野安大

目次	項目	持越	入荷	賣了	地方別	繰越
	器械	一五五四二	二三、八五八	一四九八三	五六七	二三、八四九
	座繰	四、七四〇	四、八四六	二、五二二	四	七、〇六〇
	折返	二、二〇〇	一、八〇〇	一、一四三	一八	二、八四〇
	雑絲	八六	五六		一三	一二九
	合計	二二、五六九	三〇、五六〇	一八、六四八	六〇二	三三、八七八

備考

一、表中單位個は九貫目を指す

二、持越とは客月より本月に持越したるものにして本月一日の調査繰越とは本月より翌月に繰越すべきものにして本月末日の調査に係る

三、前月分の繰越と本月分の持越と其數一致せざるは商談中のものなりしに依る

四、繰越以外に商談中のものありと知るべし

五、賣了中米國に輸出せざるものは八千六百五十三俵にして歐洲に輸出せるものは三千七百二十四俵なりとす

五日	九九二	三六	五〇四	—	一、六〇一	三七	信濃・同	俵明社會・本流馬社	○・□	一、四〇〇・一、二四〇	一般に沈靜にして商望殆んと皆無の狀態なりし
六日	—	—	—	—	—	—					日曜日
七日	二、一〇〇	一〇八	五八六	一五	—	一六	越後・岩代	松城館・東北社蠶	△・×	一、三四〇・一、二二五	歐洲向に少しく商談あるも來向は讒みたる相手なく面白からざる足取なりし
八日	六六八	三四一	七八二	三六	四二〇	—	武藏・同	森澤製絲・鶴見川社	○・×	一、四六五・一、二四五	信州物少しく買望みの向あれとも直段折合ぬ爲め取組も一二見ずみ座繰の商ひ出來せし位にて相場も一二十圓方下押を示したり
九日	五九九	七五一	九六七	三二	—	三五	美濃・武藏	丸二館・大宮館	○・□	一、三八〇・一、二六〇	前日來商談も一二の口へ太筋物出來せしも何十五圓安に讒さて手合出來せし分商白からさる成行なりし
十日	九〇六	一、四三四	八八八半	八六	—	一九	越中・岩代	横福社・眞製社	△・×	一、三五〇・一、二二〇	三井物產に甚しき甲九十番館等へ多數の商ひ出來しは信州品によりしも相場は保合なれど夕刻に至り
十一日	一、七二八半	一五八	四八六	一二	—	四六	信濃・上野	尾澤組・交水社二羽	△・×	一、三四五・一、二〇五	信州物は十圓方上進せり前日は多數の手合出來せざれど相場に變りなかりし
十二日	九二八半	六二五	七一九	一九	二、二三一	八	三河・信濃	國寶社・出澤館	○・□	一、四〇〇・一、二三〇	相場は前日同樣に變りなく保合にて弗々商ひ出來せり
十三日	—	—	—	—	—	—					日曜日
十四日	一、六〇二半	三六五	七五八	三三	—	一七	甲斐・信濃	廣盛社・常田館	□・□	一、三四〇・一、二三〇	休日前に比し概して五圓方高直に商ひ出來せり
十五日	一、四六七	一五七	五八三	—	—	四五	相模・武藏	吹眞社・吹伸社商	○・×	一、三三〇・一、二六五	歐洲向の品少しく商ひ出來せし位にて前日に比し靜かなる成行なりし
十六日	一、三二二半	一八	九八一	九	一、四一〇	三九	信濃・同	東行社金・小口組	○・□	一、三四〇・一、二四五	商談杜絶休業の有樣にて續いて面白からず
十七日	—	—	—	—	—	—					大祭日
十八日	一、八九一	三六	七三八半	三六	—	三九	尾張・信濃	衣諸製絲・岡々谷蠶	○・□	一、四五〇・一、二四〇	暇へて不味の傾きにて捗々しき商談なく相場は一二十圓方下落したり
十九日	一、〇六〇	四八	三九二	—	七二三	一四	甲斐・信濃	甲南社・東英社	○・□	一、四五〇・一、二四五	頓と賣行なく益々不味の足取なりし
二十日	—	—	—	—	—	—					日曜日
廿一日	一、五九七半	一四四	一、三三六半	一九九	—	—	但馬・信濃	朝日社・松本片倉	□・□	一、三一〇・一、二四五	日に增し不人氣にて纏たる商談なく信州上一番格千貳百圓見當にて賣行覺束なき現況なりし
廿二日	一、四三二	一五〇	三二七	—	一、三八七	二〇		未定			歐洲向の品少しく商ひ出來せしに過ぎず何分面白からさる成行なりし

廿三日	九二一半	四四四	五一六半	七〇	—	二七	越後・信濃	東洋軒・東行社館	○・○	一、三五〇・一、二七〇	前日來往交口へ見切賣應したるより手合出來せしか直段は信州上一番格千百九十圓と云ふ新安直現はれたり
廿四日	五九五	一六二	六七六半	一八	—	一八	遠江・岩代	森町製絲・共同二馬	○・＋	一、三四〇・一、一八〇	歐洲向の品僅かに商ひ出來せしのみ相場は續へて下た押の傾きなりし
廿五日	一、四八四	三六	六六一半	一六三	六三七	二八	三河・岩代	日登社・共同一馬	○・＋	一、三五〇・一、一九〇	空しく入電待の姿にて殆んと商望傳はらず
廿六日	一、〇一五半	—	三四一	二〇	—	二三	信濃・同	尾澤組・三井製絲館	○・□	一、二八五・一、一八五	前日來の競馬會にて各館とも一向に商談皆無の姿なりし
廿七日	—	—	—	—	—	—					日曜日
廿八日	一、七二〇半	—	六七六	一一二	—	一一	陸前・同	氣仙沼組・一讀館	□・□	一、二四五・一、二四〇	日に不味の一方にて頓と纏たる商談なく定期市場も又意外の暴落を告げたるによりて相場の標準外にあるや知るに苦しましむる成行なりし
廿九日	四七二	四五	五五三	六二	—	二〇				未定	一兩館買氣の向あるも直段意外に安く信州上一番格千百貳十圓見當を唱ひ居れり
三十日	九三〇	三七四	五九二半	—	三八三	五	甲斐・岩代	旭館・共同一馬	□・＋	一、二七五・一、一九〇	前日來手合出來せし口へ賣應じたるより相場に踏止まりし模樣にか見へず何分面白からさる成行なりし
卅一日	八三〇	四一五	四八六半	一八	一、三二〇	五二半	甲斐・信濃	白鳳社・林組	□・□	一、二二〇・一、一二〇	一兩館へ當用口へ弗々商ひ出來せしか直段は前日に變りなかりし
合計	三〇、五六〇	六、七六二	一八、六四八	一、〇九五	二、三七七	六〇二半					

尙左に本年一月以來の生絲集散の狀況を明かならしめん爲め月別表を示すべし

生絲集散前年對照表

年月次	持越	入荷	賣了	積戻	繰越	輸出 數量	輸出 價額
四十年一月	一三、九六二	一〇、一六七	一〇、四三四半	一〇、〇二〇	一二、六七四	六三〇、一一五	七、七五一、四四六
四十年二月	一〇、七七一	五、〇六二	九、五三九半	一、一七五半	五、一一八	六三九、四〇九	七、八九五、一二六
四十年三月	四、六〇七	七、一一〇	四、二四四半	七五〇半	六、七二二半	四一〇、四五八	五、三五三、六五一
四十年四月	六、一二八	九、六一四	五、八九〇半	四三三半	九、四一八	四九二、二四七	六、五二二、五五五
四十年五月	八、二六九	四、五八八	三、三九四半	六〇七	八、八八二	三四五、八七七	四、五七一、五四五
四十年六月	五、二九二	八、一一四	五、八一二半	四五〇	七、一四三	四二二、七五三	五、四七〇、一六五

四十年七月	六,二七五	二五,六二九	一八,四八一	四一〇	一三,〇一三	一二〇,一五四	一二,八二九,四九七
四十年八月	一二,九七六	二六,一六三	二六,五四九	四二二	一二,一六七半	一,五五〇,二六三	一九,四九五,七五八
四十年九月	一〇,三九三	三一,九四六	一七,九六六	七一四半	二三,六五九半	一,〇三六,二八〇	一三,四三八,八七八
四十年十月	二二,五六九	三〇,五六〇	一八,六四八	六〇二	三三,八七八	一,二九五,七六六	一六,七四五,五九四
計		四二,一九四	六四,二六二	三七,〇〇一半		一七,八四四,〇二二	八五九,九七〇,四一五
三十九年同上		二六,九六二半	一三六,二五六	一〇五,八四五		六,八五二,九一五	八二,八七九,七七五

里昂市場（九月廿一日發）

當地市場の景況は先便以來さして變化を見ず一般に沈靜の方なりき、獨、歐洲及東歐の兩產絲のみ稍穿入を現出せしめ、爲に此種の生絲は取引盛なりしなり其他は概して沈靜にもあらず、去りとて活潑の市況をも現はさず、先づ通常の手合を見たりと謂ふべし。

何分在荷品の拂底せる今日なれば、此處少しく賣買の閑慢なるは反つて在荷の市場に集中するより、織屋の買入の上には便宜を與ふるならん、且市價も此際餘り騰貴せるよしと爲すが故に、此小沈靜は相場の上走りを防止するに効あることなるべし。

偖生絲消費地に於る目下の樣子を窺ふに、第一里昂の機屋の景況は好景の方に見へ、英國等よりの賣注文到來し、亦米國の摸樣もあしからずして、同地の機屋も相應に原料を需要しつゝあり、來春季の絹物は如何なる品種が流行すべきか未だ判明せずと雖ども、多分柔等はよろしかるべき見込ありと云ふ。

里昂生絲今週の市況は取引不活潑にして日本及支那絲共賣行甚だ鈍かりし

又同地駐在山田領事よりの電報左の如し。

生絲商況沈靜相場氣弱し。（十月十二日發電）

生絲取引は殆と皆無の姿相場區々にして順調を缺けり。（十月十五日發電）

紐育市場（十月十日紐育總領事發）

米國絹物市場は明治三十八年より九年始に至るまで不振の極に達せるが、當時絹物の需要甚しく減退し、在荷停滯市價低落の結果製品の粗惡を促し、不振なる市場をして更に不振に陷らしめ而かも原料たる生絲の市場は昇り低落せざるのみならず、動もすれば上進の步趨を呈せしが爲め、絹物機業家の地位は頗る困難を極め、彼等は自衞上製織著しくは其作業の減縮を謀りし者少からず、當時米國に於ける機臺の數は著しき減少を見たるが、其後漸く恢復の機に向ひ、昨年の夏時既に各種絹物の品薄の聲漸く高く、秋冬季品の注文に至つては顧客眞實の絹物を可成早く得ん事を競ひ、市價の如何を顧慮するに暇なき有樣となれり、傳替四及瑞西等を主として、歐洲方面も亦同樣なりし爲め、原料市價は漸次引締り、年の十一月に入りて其需要決して一時的流行に非ざるを示し、爾後絲價は時に一昂一低を免れざりしも概して的確なる昂上の進路を辿り、未曾有の好況を呈して今日に至れり、今米國絹業協會の調査に基き、同市場に需要せらるゝ世界の主產國たる日清伊三國生絲の紐育市場に於る、各全年の平均相場一英斤に付見るに左の如き趨向を示せり。

年次	伊タリシカル 弗	日本器一番 弗	支部選一番 弗	廣東優等ム	平均 弗
一九〇三年	四,五六	四,二七	四,七六	三,三六	四,二三
一九〇四年	三,九一	三,七七	四,二五	三,一二	三,七六
一九〇五年	四,一五	四,〇九	四,二八	三,三三	三,九五
一九〇六年	四,五四	四,二九	四,五六	三,七三	四,二八
七年三月迄	五,三五	五,二七	五,四四	四,二八	五,二二
同九月一日	五,九〇	五,五〇	五,五〇	四,四〇	五,三二

斯の如き絲價の騰貴に拘はらず、米國に於ける絹物の需要は益々盛にして、顧客は原料絲價に相應せる直段の引上げに依りて、正直にして眞實なる製品を望む者多きが爲め、米國絹物は概して市價の品上を示せど、粗惡の品は直段の如何に拘はらず賣行却つて不良なりとぞ。

又紐育生絲市況に付同地駐在小池總領事よりの電報左の如し。

生絲商況穩りなし（十月九日着電）

生絲市況穩りなし（十月十五日着電）

絲況依然靜（十月二十三日着電）

生絲市況春向絹物の見込外れ兎角機業の發展を見せざる際數日前より金融界動亂に加へて橫濱市場需要弛み相場增々下落等の報道あるかため一層不振に傾けり併なら金融界も日を逐ひて鎮靜に赴けるのみならず橫濱安値も最早殆と其極點に達せりとの見込を立つる向も尠からざる模樣なれば近日中には商談の增加は豫期し得べきか（十月三十日着電）

生絲市況依然引立たず（十一月一日着電）

上海市場

上海生絲市況に付同地駐在永瀧總領事よりの報告左の如し。（十月十五日附報告）

本年九月中の上海生絲市況左の如し

輸出高　九月二日より同三十日までの當上海より海外に輸出したる生絲の數量左の如し。

白絲	五,一一一俵	本年六月一日より九月三十日までの輸出合計	二九,〇一六
蒸汽機絲	一,四七七	昨年同期輸出合計	一九,四六五
黄絲	二,〇二八	本年度輸出增加高	九,五五四
合計	八,六一六		

右輸出合計八千六百十六俵の中之を輸出先に依りて區別すれば左の如し。

歐洲	四,九八四俵	印度方面	二,四七六	合計	八,六一六
米國	九七八	香港方面	一七八		

商況及價格　九月中一般市場の不活潑に連れて生絲市況も亦全月を通して沈靜の狀態を免れざりき、之を前月に比すれば輸出高に於て二千七百九十一俵の增加を示せども、是れ印度方面に對する輸出增加に因るものなり、本月中の手合高は合計二千五百五十俵にして、之を前月に比すれば實に三千俵の減少を示し其半にも及ばず今左に各週間の商況及價格に就きて詳說せん。

第一週間（七日に終る）に於ては七里絲の如き殆と取引皆無の姿にして、歐洲に漸く黄絲三百五十俵の手合を見たるに過ぎず、價格は杭州絲百合花牌二號四百六十兩、綠蓉與絲孔雀牌五百三十兩乃至五百十五兩を唱へたり。

第二週間（十四日に終る）に於ては白絲は溧陽壺孤牌三百九十兩位にて歐洲に千俵手合出來せし外其他の種類は全く商勤なく黄絲は溧陽一號三百八十兩、同二號三百五十五兩にて歐洲に三百俵手合出來せり。

第三週間（二十一日に終る）に於ては市場極て閑散にして商談更に進まず僅に黄絲五百俵歐洲方面に手合出來せしに過ぎす。

第四週間（二十八日に終る）に於ては七里絲は依然不振なりしも、黄絲は稍々好況を呈し、綿州三百八十兩乃至三百九十兩、溧陽一號三百八十五兩、同二號三百六十五兩にて、歐洲に四百俵手合出來せしのみならず、民經紡絲三百四十五兩乃至三百九十七兩半にて先物七百俵の手合を見たり。

最近の生絲相場爲替相場及在荷高左の如し

七里絲水牛牌三號	六四〇兩	杭州絲百合花牌二號	四五五兩
楊柳頭絲鶯鶯牌M,M	五一五	蒸汽機絲駒牌一,二,三號 平均	六九五
爲替相場			
倫敦宛六箇月拂手形	三志1/8	里昂宛四箇月拂信用手形	三法七六
紐育宛四箇月拂信用手形	七三⅜	孟買宛一覧後十五日拂手形	二二〇
在荷高			
白絲	五,〇〇〇俵	黄絲	一,〇〇〇俵
野蠶絲	二〇〇	合計	六,二〇〇

昨年同期在荷合計三千二百五十俵

會務錄事

埼玉支會品評會

開會前の準備

大日本蠶絲會埼玉支會は、斯業の改善進歩を圖るの最大捷徑を品評會の開設に在りと爲し、春來種々計畫する處ありしが、不幸八月に至りて近年稀有の大洪水に遭遇し桑園の流失したるもの尠からず、且つ秋蠶の大部分造作したるを以て人氣頓に沮喪したりしかば折角の計圖も見合すの外なからんとの懸さへ起りしも大久保支會長は此際更に大規模の品評會を開設して衰靡せる人氣を振興するは寧ろ妥當の所置ならんと爲し、衆を督して著々計圖の歩武を進め一面會員の大增募に努力せられたり、幹部の諸氏能く支會長の意を體して、協力一致東奔西走殆ど寢食を廢して勸誘せられたる効果空しからず、三旬を出でざる僅少の時日に於て、一舉五千餘名の會員を得、今春四月二日漸く瓜々の聲を上げたる同支會は、一躍全國最大有力の團體となり其面目を一新するに至れり、而して品評會の出品點數亦三千餘點の多きに達し未曾有の盛況を呈したるを以て茲に愈 總裁殿下の台臨を仰ぐことに決し、大久保支會長は本會に之れが申請を爲し本會々頭は又之れを 總裁殿下に懇請し奉られたるに平素斯業の發展に御心を注かせ賜ふ殿下には、早速御欣諾あらせられたり、最とも畏しきことにこそ。

總裁殿下の台臨

總裁殿下台臨の義念本月二日と確定するや支會の役員其他有志の人々は、裳夜兼行之れが準備に奔走せられたるが、本會よりは吉池理事去月廿八日に小池書記去一日に共に出張して之れが應援をせられたり、明くれば二日 總裁殿下には「フロックコート」を召し鶴ヘ洋杖を御手にして桂武官及馬場別當を從ひさせられ麹町區紀尾井町の御殿を出させ給ひ午前八時二十分上野發の汽車にて御機嫌麗しく本庄驛に向へさせ給へたるが、大久保埼玉縣知事上野岳田廻の巻り農商務省よりは松岡農相、松村秘書官、加賀山蠶絲課長、本會よりは松平會頭、酒匂副會頭、本多、紫藤、桑田、星野、吉池の各理事陪乘し、同十時五十分無事本庄驛に着したり、此時煙火轟々冲天に轟きゐ、停車場には町村名譽職員車友會員各學校生徒の奉迎する者數千名に上り、停車場より高等小學校迄無數の群衆最も靜粛に道路の兩側に整列して奉迎の誠意を表じたり、殿下には同町會議員丸山善太郎氏より差向け奉れる御馬車に召させ給へ供奉員一同は廣車にて大久保知事御先導し奉らせ、本所警察署長先驅を爲し、同十一時十五分式場へ御安著直に階上なる御休憩所に入らせられ本支會役員一同及林審査委員長外高等官に夫々拜謁を賜はりたり。

式場の光景

式場は本庄高等小學校内運動場を以て之に宛て、入口には綠門を設けて大國旗を交叉し、構内には各國の國旗を吊るして裝飾を施し、中央の一段高き處に御座を設けたり、此日小春日和の彌增しに晴れ渡りて清爽の快や言ふべからず會員の喜々として來集する者數千名、場の内外に溢れて立錐の餘地なかりし、鐘て時針十一時を報ずるや、振鈴の響と共に來賓會員各其席に着き、大久保知事の御先導にて 殿下御臨場あらせられ、君が代の奏樂に一同起立最敬禮を行ひ、奏樂の終るを待ちて大久保支會長舉式の旨趣を爲し亞で 總裁殿下には左の令旨を賜はりたり。

令旨

本日茲ニ大日本蠶絲會埼玉支會品評會褒賞授與式ニ臨ミ本會ノ爲ニ貢獻セル者ニ對シ有功章ヲ授與スルニ當リ一言以テ諸子ニ告ク惟フニ本邦ノ蠶絲業ハ輓近著大ナル發達ヲ爲シ國家經濟上重要ノ位置ヲ占ムルト雖モ國運ノ趨勢ハ翹一層ノ進歩ヲ促シテ止マラサルモノアリ此秋ニ際シ本縣會員諸子能ク本會ノ趣旨ヲ體シ協力一致誘導相努メテ多數ノ會員ヲ增募シ以テ當支會ノ基礎ヲ確立セシメ更ニ進ンテ汎ク優良ノ精品ヲ蒐メ以テ研鑽琢磨ノ資ニ供シタルハ洵ニ嘉スヘキノ計圖ニシテ貞愛ノ深ク滿足スル所ナリ

實ニ蠶絲ハ國富增殖ノ資源ニシテ其負フ所ノ任ヤ重大ナレハ會員諸子宜シク現況ニ安ンセス深ク審査ノ實蹟ニ鑑ミ忍耐以テ艱難ヲ凌キ勇奮以テ障礙ヲ斥ク斯業ノ發展ニ伴フ弊竇ヲ芟除シテ著々改善進歩ノ實ヲ擧クンコトヲ望ム

而して大久保支會長は畏しく御前に進み左の答辭を奉れり

奉答

本日我埼玉支會第一回品評會褒賞授與ノ式ニ際シ茲ニ 總裁殿下台臨ノ榮ヲ辱フシ特ニ優渥ナル令旨ノ傳音ヲ拜ス我支會ノ光榮何之ニ加ヘン惟フニ本邦ニ於ケル蠶絲ノ業ハ比年駸々發達ノ現象ヲ示ス我支會ハ乃チ之ヲ機トシ第一回品評會ヲ開キ揆長補短其ニ其成績ヲ審査公表シ大ニ縣下蠶絲業ノ改良ニ資スル所アラントス

抑本年ニ於ケル縣下ノ水災ハ空前ノ慘狀ヲ呈シ當業者ノ被レル損害モ亦多大ナリシモ會員諸氏此ノ災厄ニ屈セス能ク更ニ幾多ノ會員ヲ募集シ出品數モ亦二千六百有餘點ノ多キヲ算シ且ツ品質ノ優良ナルモノ尠カラサリシハ斯業ノ爲メ慶賀ノ至リニ堪ヘサルナリ然レトモ本會豫定ノ會員ヲ得斯業改良ノ目的ヲ達スルハ前途尙ホ遠シ不肖利武等更ニ奮勵努力以テ台旨ニ副ヒ奉ランコトヲ期ス玆ニ會員ニ代ハリ謹テ答辭ヲ奉ル

明治四十年十一月二日

大日本蠶絲會埼玉支會長

從四位勳三等　大久保利武

次に松平會頭は謹嚴なる態度にて有功章授與の稟請を爲し審査事務長大城戶氏の指名點呼に依りて左の諸氏御前に出て總裁殿下より一々有功章の御親授を受けられたり。

一等有功章　大久保利武

二等有功章　今野東吾　東鄉重清

早川光藏

三等有功章　奥田榮之助

四等有功章　針谷吾作　本庄町長

五等有功章　島崎廣太郎　坂本與惣次郎

水谷麻之助　金子義之吉　卜部兵庫

鷲澤顯光　堀田峰松　高柳雅男

矢澤彌平治　鷹嘴秀三郎　齋藤直藏

高世熊吉　中村孫兵衛　春山治重郎

八木原彌左衞門　篠原啓一　栗田定治郎

市川春太郎　江原庫房　松岡敬太郎

柴崎儀三　神谷厚　藤倉總十郎

白倉通倫　茂木小平　鳥海茂市

鎌倉恒松　橋金太郎　岩本武三郎

栗原純　高橋信通　田端勘九郎

引間鶴吉　新井藤松　藤崎卓爾

茂木謙吉　逸見方正　齋藤積太郎

競進社養蠶傳習所長　尾澤福太郎　小野光景

片倉吉五郎　兒玉郡蠶種同業組合長　若尾文太郎

林國藏　石川幾太郎　加藤金三郎

小高圭作　野本治兵衛　篠塚八太郎

荒井清五郎　網野豊次郎　林勇藏

兩角市次郎　木村九藏

夫れより第一回品評會褒賞授與式に移り今野品評會長は左の式辭を朗讀せられたり

式辭

本日大日本蠶絲會埼玉支會第一回品評會褒賞授與式ヲ擧タルニ當リ總裁殿下ノ御台臨幷ニ大臣及會頭閣下ノ臨場ヲ忝フシタルハ本品評會及出品人ノ光榮何物カ之レニ加ヘン初メ本縣支會カ品評會ヲ開カントスルヤ創始ノ際ナルヲ以テ會員僅カニ六百餘名ヲ留テス隨テ出品數ノ如キ一千點ヲ得ンコトヲ期シタルニ過キサリキ會々本年八月本縣ニ於テ從來未曾有ノ洪水アリ農作物收穫皆無ノ町村實ニ一百ヲ以テ算シ秋蠶ノ如キモ猖獗町村ニ在テハ多ク之ヲ掃棄スルノ止ナキニ至ル其他ニ於テモ菁街連日響レサルノ故ヲ以テ收繭殆ント陰期ノ半ニ達セス隨テ出品ニ影響スル所少ナカラサルモノアリ品評會ノ前途實ニ憂慮ニ堪エサルニ至レリ然ルニ支會長ハ品評會ノ開催ハ獨リ支會ノ發展ニ資スルノミナラズ災害救濟ノ一端ナリトシ一層其ノ計畫ヲ擴張シ擧式ヲ盛大ニシ以テ人心ヲ鼓舞スルノ必要ヲ認メラレ乃チ　殿下ノ御臺臨ヲ稟請シテ辛ニ御内許ヲ得タリ依テ直

ニ支會并ニ委員部職員ヲ督スルニ御臺旨ノ在ル所ヲ以テシ職員亦能ク之ニ從ハンコトヲ期シ遂ニ僅カニ數旬ノ間ニ於テ新ニ五千五百餘名ノ會員ヲ募リ品評會出品數亦實ニ二千六百餘點ノ多キニ達セシムルコトヲ得タリ即チ本品評會カ水災ノ後ニ成リタルト施設時ノ長カラザリシトニ拘ラス能ク今日アルヲ得タルハ偏ニ　總裁殿下御盛德ノ餘光ニ外ナラス若シ夫レ出品精整ナラス會場亦狹隘ヲ告ク容器實ニ一ヲ缺キ其他設備盡サヾル所多キハ一時倉卒ノ事急ニ出品亦激增シタルニ因スルナキニアラスト雖モ不肖等ノ恐懼惜ク能ハサル所ナリトス玆ニ謹ンテ品評會ノ經過ヲ縷述シ以テ擧式ノ辭トナス

明治四十年十一月二日

大日本蠶絲會埼玉支會第一回品評會長　從六位　今野東吾

次て林審査委員長は左の如く褒賞授與の稟請を爲したり

稟請

大日本蠶絲會埼玉支會第一回品評會開催ニ方リ不肖審査委員長ノ重任ヲ負ヒ審査員諸氏ノ補佐ニ依リ玆ニ其任ヲ全フスルヲ得タルハ誠ニ不肖ノ辛榮トスル所ナリ

由來本縣ハ蠶業ノ先進地トシテ夙ニ世ニ知ラレ生產ノ饒多ナル實ニ全國中ノ優位ヲ占ム而シテ今回ノ出品ハ繭一千ニ百四點蠶種五百一點生絲二百一點桑苗五百五點蠶具十八點總計二千五百二十九點ニ達シ其品質概シテ佳良ナリト雖不良ナル者亦稀シトセズ今審査ノ成績ニ依リ之ガ概評ヲ試ミントス繭ニ在テハ異名少ナク繭質齊一ナレトモ解舒稍劣リ繭節ニ於テハ尙ホ改善ノ餘地少ナカラズ特ニ上簇法乾繭法ノ不良ナルニヨリ繭質ヲ損傷セル者多カリシハ誠ニ遺憾トスル所ナリ蠶種ニ在リテハ其品質佳良ニシテ調製亦タ宜シキヲ得タリ殊ニ病毒歩合ノ少ナカリシハ滿足ナレトモ尙製絲用種ハ檢査一點數ニ對シ約二割五分ノ有毒步合ヲ認メタリ未ダ以テ安ンズ可ラズ生絲ニ至リテハ絲質概ネ佳良ナレトモ未ダ整理不完全ニシテ齊一ヲ缺ク、モノアリ即チ繰絲力絲區々ニシテ捻交捻角其宜シキヲ得ズ概ネ繰図ニ困難ナルガ如シ桑苗ニ至リテハ佳良ナル者ナキニ非レトモ未ダ改善ヲ要スルモノアリ特ニ收穫ノ目的ヲ以テ摘葉セルガ如キ種類ノ特性ニ適シザル採苗法ノ如キ或ハ介殼蟲天牛等ノ寄生多カリシガ如キハ甚ダ遺憾トスル所ナリ宜シク留意改良セザル可ラス蠶具ニ至リテハ出品點數少ナク見ルニ足ル者亦タ尠ナシトス

顧フニ以上ノ生產品ニシテ品位ヲ改良スル一段ナラバ優ニ本縣斯業ノ面目ヲ一新スルト同時ニ先進地タルノ名ヲ實ニスル所以ナラン附記シテ忘ル可ラサルハ縣外出品ノ優位ヲ占メシ一事ナリトス

各種出品物中優良ナル者ニ於テ更ニ撰拔褒賞セル別冊人名ニ由リ褒賞ノ授與アランコトヲ稟請ス

明治四十年十一月二日

大日本蠶絲會埼玉支會第一回品評會

審査委員長　從六位　林　驛作

斯くて各褒賞者一々松平會頭の手より賞狀を受け終るや會頭には左の式辭を朗讀せらる。

告辭

本邦ノ物產中年々巨額ノ輸出ヲ爲シテ能ク海外貿易ノ權衡ヲ維持スルモノハ實ニ我蠶絲ニシテ其ノ業ノ興廢ハ直ニ國力ノ消長ニ關スルヤ大ナリ然レハ之レカ改善增殖ヲ企圖スルハ經國致富ノ要義ニシテ實ニ焦眉ノ急務ナリト云ハサルヘカラス此際本縣會員諸君提携相起チテ銳意會員ノ增募ニ努メ以テ本會擴張ニ資スルト共ニ當支會ノ根柢ヲ鞏固ニシ其第一回ノ事業トシテ繭外三種品評會ヲ開催シ廣ク會員ノ生產品ヲ蒐メテ之ヲ競賞シ斯業進歩ノ一助ニ供セントス頗ル適切ノ措置ナリト云フヘシ而シテ出品ノ審査完了ヲ告ケ本日玆ニ褒賞授與ノ式典ヲ擧行スルニ際シ特ニ　總裁殿下台臨アラセラレ本會ノ爲ニ貢獻セル諸君ニ對シ有功章ヲ親授セラレ加フルニ優渥ナル令旨ヲ賜ハル洵ニ是空前ノ盛事ニシテ當支會ノ名譽本會ノ光榮トスル所ナリ今ヤ我邦ノ蠶絲業ハ長足ノ進歩ヲ爲シタリト雖モ外幾多ノ競爭國アリテ內顧ホ改良スヘキ餘地十分ニ存セリ殊ニ本縣ノ如キハ斯業ニ從事スル者多クシテ其產額尠カラサルモ其名聲未タ以テ皆位ニ出ル能ハサルハ深ク遺憾トスル所ナリ然レハ會員諸君宜シク台諭ヲ奉戴シテ一層ノ奮勵ヲ爲シ殊ニ粗製濫造ヲ警メテ製品ノ改良ト產額ノ增加トヲ參圖シ從來ニ倍蓰スルノ功績ヲ擧ケ本縣ヲ以テ本邦蠶絲業界ノ中堅地ト爲シ國富ノ增進ニ努力セラレンコトヲ一言ヲ陳ヘテ告辭トナス

明治四十年十一月二日

大日本蠶絲會々頭　正三位勳一等　男爵　松平正直

次で松岡農商務大臣及長野縣知事は左の祝辭を朗讀せられたり。

祝辭

茲ニ大日本蠶絲會ハ　總裁宮殿下台臨ノ下ニ有功者表彰式並ニ埼玉支會蠶絲品評會褒賞授與式ヲ擧行セラル、ニ際シ當業者諸氏ト相見ルヲ得ルハ本大臣ノ欣喜ニ堪ヘサル所ナリ

惟フニ我邦産業ノ種類ハ固ヨリ多々アリ枚擧ニ遑アラスト雖モ最我風土ニ適シ國民其業ニ熟練シ且容易ニ經營シ得テ大ニ國民經濟ニ利益アル重要ノモノヲ考レハ先ツ指ヲ屈スヘキハ是ヲ蠶絲業ト爲ス近ク昨年ニ於テ之ヲ見ルニ蠶絲類ノ輸出金額ノミニテモ總輸出品價額ノ二割七分以上ニ當レリ故ニ斯業ノ盛衰ハ國家經濟ニ至大ノ影響ヲ及ホスコト寔ニ明ナリ而シテ世界ニ於ケル其需用ハ益增加シテ前途ノ有望ナルコトハ疑ヲ容レス然レトモ飜テ一面ヲ觀レハ外ニハ品質ノ精良ヲ以テ著ル、伊太利アリ佛蘭西アリ産額ノ多大ナル清國アリ又孜々トシテ研究スル亞米利加アリ互ニ世界ノ市場ニ優先ヲ爭フ而シテ内ニハ各般ノ事業勃興シ爲メニ勞力缺乏シ工銀騰貴シ從テ蠶絲業ノ經營ニ困難ヲ來スノ趨勢アリ於是カ斯業ニ當ル者決シテ依然トシテ現狀ニ安スヘキニアラス宜ク奮テ品質ノ改善ト少費多穫ノ途ヲ講シ以テ海外需用者ノ嗜好ニ適スル製品ノ産出ニ努メサルヘカラス

埼玉縣ハ由來先進ノ蠶業地ニシテ養蠶家數及産繭額ハ本邦ニ於テ優越ノ地位ニ在リ斯業ノ消長ハ啻ニ一縣ノ盛衰ヲ爲スノミナラス延テ國家經濟ニ至大ノ關係ヲ有ス而シテ今ヤ大日本蠶絲會ハ本縣ノ功勞者ニ對シ功勞牌ヲ授與シ又其支會ハ蠶絲ノ品評會ヲ開キ斯業ノ獎勵發展ニ勉ム是レ時機ニ適スルノ擧ト謂フヘク邦家ノ爲特タ本縣ノ爲メ慶賀措ク能ハサル所ナリ希クハ會員諸氏本日ノ盛儀ヲ機トシ益奮勵セラレンコトヲ

明治四十年十一月二日

農商務大臣　從二位勳一等　松岡康毅

祝辭

維時明治四十年十一月二日大日本蠶絲會埼玉支會蠶絲品評會褒賞授與式ヲ擧行セラル、ニ當リ　總裁宮殿下親シク御台臨アラセラル不肖綱昌亦席末ニ列スルノ光榮ヲ擔ヒ感激措ク能ハサルモノアリ往時埼玉縣下ノ蠶業大ニ振ヒ桑園年毎ニ增殖シ繭ノ産額春共ニ多キヲ加フ由來長野縣ト埼玉縣トハ啻ニ境域ヲ接スルノミナラス蠶業ノ上ニ於テ頗ル密接ノ關係ヲ有ス埼玉ノ養蠶家ハ年々七萬石内外ノ繭ヲ長野ノ製絲家ニ供給セルノミナラス埼玉縣下ニ於テ長野縣人ニヨリテ經營セラル、製絲場十一ケ所釜數三千百十一アリ且ツ長野ノ蠶種家ハ埼玉ノ養蠶者ニ毎歲二十餘萬枚ノ蠶種ヲ供給セリ故ニ埼玉ノ成繭ヲ改良セハ長野ノ蠶絲家其利ヲ享ケ長野ノ蠶種精選ヲ加フレハ埼玉ノ養蠶者其益ヲ受クヘシ將來愈々此關係ヲ親密ナラシメ共ニ其慶ニ賴ランコトヲ望ムヤ切ナリ聊カ所感ヲ述ヘテ祝辭ニ代ヘ併セテ大日本蠶絲會埼玉支會ノ彌々隆盛ナランコトヲ祈ル

大日本蠶絲會信濃支會長

長野縣知事　從四位勳三等　大山綱昌

蠶種貯藏庫及品評會場へ御成

亞て有功章受領者總代兒玉郡長東鄕氏及品評會受賞者總代橋本氏の答辭ありて、支會長閉會の陳告を爲し、嚠喨たる奏樂の間に殿下御退場あらせられ暫時御休憩の後ち食堂に臨ませ賜ひ、特別來賓百餘人に御陪食の榮を賜へたり。

午後一時五十分殿下には二十餘名の隨行員を從ひ大日本蠶種貯藏株式會社に御成あらせられ、社主吉田氏の御案内にて第一蠶種保護室より、氷室及蠶種貯藏庫等を御巡覽あらせらる宮城技師の御說明に一々肯かせ賜ひ御巡覽後吉田氏の邸に御少憩の上更に品評會場へ臨ませ賜へり。

御奉迎の準備オサ〳〵怠りなかりし品評會場は、停車場前扶桑館を以て之に宛て其入口には綠門を建て、玄關前には神功皇后武内宿禰の飾人形あり、傍らの天幕内に御休憩所を設け、第一號館には東京蠶業講習所の參考品及蠶種數百點を集め第二號館には生絲五百五十點、繭千二百點を一號館二號館の中庭には桑苗數百點を陳列したるが、見るべきの優良品頗る多かりし、殿下には林技師御說明の下に一號館より順次參考館に至る迄仔細に台覽あらせられ、天幕内に御少憩の後、各員奉送の中に停車場に向はせられ、午後二時五十七分の汽車にて御機嫌麗はしく御歸京遊はされたり。

蠶病豫防主任官の招戴

去月二十一日より二十七日迄農商務省に於て蠶病豫防法主任官會議の開かれたるを機とし、本會は同二十五日午後五時農商務大臣、久米次官、加賀山蠶絲課長を始め、各府縣技師七十餘名を華族會館に招戴して一夕の饗應を爲したり、一同食卓に就きて靜かなるの時、松平會頭には戛々の盃と共に起て開口一番、本會が今日の隆運を見るに至りしは、時運の然らしむる處なりとはいひ、又諸君の助力に依らずんば非ず、諸君は農商務大臣監督の下に立ち、直接斯業獎勵の衝に當り併せて本會地方支會又は委員部の要職に在りて、常に斯業の爲め本會の爲に盡瘁せられつゝあるもの深く感謝に堪へざる處なり、而して余は茲に最も新らしき二個の事實を紹介して以て諸君に餞せんと欲するものあり、幷は他なし、明年長野縣に開催せらるべき共進會に、念蠶絲館が特設せらるゝことゝなりたるもの其一、埼玉支會は本年四月の創立に掛り當時會員數僅に數百を算するに過ぎざりしが、今回品評會を開催するに當り、一躍五千餘名の會員を增募し、總裁殿下の台臨を仰ぐことに内定したること是なり、這は最も新らしき事實にして、又我蠶絲業の爲には最も喜ぶべき現象たるを信じて疑はざるが故に敢て諸君に紹介する所以なりとて一場の挨拶をせられ亞て松岡農相には凡て事業の振興を圖るには、政府と人民との中間に立ちて有力なる團體の活動するものなかるべからずと說き、本會が明治二十五年に創立以來、幾多の難境に立ちつゝ能く斯業の爲に貢獻したるを頌せられ、一轉各府縣技師に對しては既に述ぶる處ありしも尙諸子に告ぐべき者あり、幷は他にあらず蠶絲業の勃興は喜ぶべきも之れと共に粗製濫造の行はるるあらば、之れ由々敷大事なれば嚴に之を警戒せざるべからず、而して絲價の高くして賣行きの旺盛なるは寔に賀すべきも其反動はイツ來るやも測るべからざれば、徒に事業の前途を樂觀せずして、如何に悲境に陷る場合あるも、敢て動せず泰然自若堅實に斯業の經營を爲すべきやう職に獎勵の衝に立てる諸子は豫じめ當業者に注意を加へられたし云々と述べられ、丹羽敬太郎氏は起て一同を代表し今夕茲

會頭松平男爵の視察せられたる新潟鐵工所の景（其一）

に可重なる饗應を辱ふしたるは、深く會頭閣下に謝する處にして、又大臣閣下の御懇篤なる訓戒は眷々服膺して敢て背かざらむことを期すべし云々と謝辭を述べられ、茲に各自胸襟を開きて談笑交々本會の將來に就きて語る處あり和氣靄然たる下に散會したるは午後九時なりし。

支會職員の囑托

今會本會々頭の推薦に依り總裁殿下より左の如く囑託あらせられたり

京都支會長　大森鍾一

今回支會長の推薦に依り本會々頭より左の如く囑託せられたり

下野支會商議員

福士悟郎　柏田貢　七字魁　永島禮七
醍井要作　大橋唐太郎　濱野唐作　阿久津金次郎
齋藤督吉　鈴木今四郎　齋藤延壽

埼玉支會通常會員今野東吾氏外百〇一名は本會々務に功献せられ其功勞顯著なるを以て總裁殿下の台聞に達し今回特別會員に推擧せられたり

今野東吾　東郷重清　早川光藏　奥田榮之助
水谷麻之助　島崎慶太郎　坂本與惣次郎　金子義之吉
卜部兵庫　鷲澤顯光　堀内米松　高柳深男
矢澤彌平治　鷺塚秀三郎　齋藤直藏　高貫熊吉
中村孫兵エ　春山治重郎　八木原彌左エ門　荻原啓一
栗田定治郎　市川幸太郎　江原庫男　松岡敬太郎
栗崎節三　神谷厚　藤倉粂十郎　白倉通倫
茂木小平　鳥海茂市　鎌倉恒松　播　金太郎
岩本武三郎　栗原純　高橋信道　引間粂吉
加藤金三郎　荒井清五郎　本庄町長　木村九藏
兒玉郡蠶種同業組合長競進社養蠶傳習所長片倉吉五郎　若尾文太郎
新井鐐松　篠崎卓爾　茂木謙吉　逸見方正
齋藤鉄太郎　越壽三郎　小口信太　片倉佐一
加藤辛太郎　大木金左衛門　森澤吉五郎　片倉俊太郎
林清吉　原渡瀬製絲所長　甘樂社本庄分工所長　安田平次郎
平田幸嘉　双木八郎　飯島英三　平山延壽
井上與之　眞下德藏　馬場源太郎　正木利三
柴生田忠三郎　山下長松　根岸菊藏　小松調二
岩崎雅治　清水熊治郎　石川民次郎　澁谷熊三
飯塚貞一　下山延作　松本文作　高階恒久
中里茂三郎　竹内牛三郎　塚越仲三郎　卜部喜平
小林久衛　倉林元次郎　山田忠治　舘村甲子虎
古川松太郎　鈴木彦太郎　關根粂次郎　松原平作
川合盛次郎　町田倉藏　堀江萬次郎　新井勇左衛門
甘粕清次郎　福島鉄太郎　川鍋熊次郎　小林魏一郎
韮塚直衛　本庄繭絲織物商組合長　柳澤粕九郎

本會職員の出張

本月二日埼玉支會有功章及品評會褒賞授與式には別項掲ぐるが如く、總裁殿下の台臨に就き本會よりは松平會頭、酒匂副會頭、秦藤、本多、星野、桑田、吉池の各理事加藤釜谷の二事務員御供申上げ小池事務員は先發として前日出張し同日御供して一同歸京せり。

十月十五日より十八日に亙るの間島根縣美濃郡益田町に開催せる島根支會品評會審査委員として本會より京都蠶業講習所技師なる辻保太郎氏出張せり。

同品評會褒賞授與式臨場の爲め會頭代理として出張したる吉池理事は、同縣下各地に於て講話を爲し客月二十五日歸京せり。

客月二十二日下野支會品評會褒賞授與式臨場の爲め松平會頭は信田事務員を随へ出張同日歸京せられたり。

本月十七日山形支會總集會を同縣米澤市に開催するに就き、本會より生絲檢査

所技師なる芳賀鑑四郎、東京蠶業講習所技師なる土屋泰、農商務技師なる松田昌讓の三學藝委員は之に出張臨場せり。

新潟支會總會

去十月四日新潟市に於て開催せられたる大日本蠶絲會新潟支會總會に臨席すべく會頭松平男爵には加藤書記を隨ひ三日午前六時上野發一番にて東都を出發せられたるが列車の長岡に到着するや、千田技師、青木蠶病豫防吏員、川上古志郡蠶絲同業組合副組長等の諸氏出迎へらる、午後十時半汽車は無事新潟に着したるが、秋山富々の中縣高等官蠶病豫防吏員各郡組合長其他有志の人々數十名「プラットホーム」に迎へられ、一同腕車を列ねて旅館吉松に入る、明れば四日一天澄み渡りて碧空拭ふが如く、天意殊かに本日の總會を祝するものゝ如し、會頭には本多所長鹽谷技手等の一行と共に開會前に縣廳へ出頭して清棲知事に面會し、更に縣農會を訪ひ轉じて物産陳列館に入りて出發繭品評會を參觀せらる、其出品數百點原種改良の上には多大の裨益ありしことならんと認められたり。

會場は物産陳列館を以て之れに宛てられ準備は遺憾なく行屆きたり、東京蠶業講習所よりは本多所長農商務省よりは鹽谷技手臨場せらる。佐藤代議士海部や松の園鎣來會員其他紳士紳商等順々參集し、來會者凡て六百餘名と註せられぬ、支會總會開會前に於て新潟縣蠶絲會第九回總會を開き左の建議案及新潟縣蠶絲會合併の件を討議し、滿場一致之を可決し愈新潟縣蠶絲會は本會に合併することとなりたり、以て新潟縣當業者が斯業の事情を捨て如何に斯業の爲に圖りつゝあるかを推知するに足る。

建議案

蠶絲業十年計畫案の件

去歳の新潟縣蠶絲業大會に於て斯業の根本的振興策として十年計畫案を建議するや幸にして其一部は採納せらるゝ所となり今や皆々其効果を收めんとするに至れりと雖も斯業の損害は縣下生産力の消長に至大の影響あるを以て更に殘餘の事項に向ても速に施設せられんことを

蠶絲業獎勵に關する機關統一の件

蠶絲業獎勵の機關として各郡共に同業組合を設置し以て當業者の指導誘掖に努むるありと雖とも此等の機關動もすれば其政策を異にし其趣く所を一にせざる感あるは斯業の發展を謀するに於て決して慶すべき事體にあらざるなり、思ふに縣下既往の經過と現時の狀態とに鑑みれば其政策たる必ず一に出づべく各機關之を規矩とし漸を逐て進まんか其効果更に顯著ならんことは毫も疑を容るべきにあらざるなり、之れを以て吾人は閣下の賢察に訴へて一日も早く此等機關を統一せられんことを熱望して止まざるなり

蠶業分度調査の件

蠶絲業に於ける生産要素の狀態を調査するに其政策を確立するに於て缺くべからざる要件なり之れを以て去歳の蠶絲業大會に於て之れが調査方案を具し建議するに至りしと雖未だ着手せられざるは誠に遺憾に堪へざる所なり然れども斯業獎勵の根本的基礎は必竟之れに準據せざるべからざるや明かなるを以て此際速かに調査を遂行せられんことを

蠶病豫防事務所建築の件

本縣蠶種の產額は逐年増加の傾向を呈し一昨三十八年に於ては八萬六百餘枚に達せり之れを既往の十年に比すれば一倍七分餘統計開始の明治十七年に比すれば實に五倍の増加にして殊に原種蛾數に於ては最近五ヶ年間に約四倍の増加を示せり之れ必竟蠶種強健にして比較的好結果を奏するものの多きに依るが爲めにして縣蠶業發展の爲め喜ふべき現象なりと云ふべし然れども本縣蠶病豫防事務所の常設さるゝものは僅かに一ヶ所に過ぎず其他は悉く臨時開設さるゝを以て其規模設備二ながら蠶業の生命とも稱すべき貴重なる蠶種を取扱ふ上に於て甚だ不安に堪へざる點あり之を以て速かに適當なる蠶病豫防事務所を建設し蠶種の保護を全ふせられんことを

原蠶種製造所設置の件

縣下の產繭は極めて雜駁なるが故に代價低廉にして養蠶家の蒙る不利益少なからざるのみならず延て糸上に及ぼす影響亦決して尠少ならざるなり然れども此等の品種を陶汰し產繭の一定を圖るは原蠶種製造所を設置するにあらずんば其目的を達する事能はざるや明かなるを以て速かに之を設置し純良なる種類を選定し漸次縣下に普及せしめられんことを

新潟縣蠶絲會解散に關する件

説明　本會の外大日本蠶絲會新潟支會あり支會も組織變更の後本會の主義と全然一致するの實を見る此の際合併の主意を以て本會を解散し斯業團體統一の實を擧けんとす

引繼條件

一、本會基本金は大日本蠶絲會新潟支會調査部基本財産として引繼き其利子を調査部費に支出すること
二、機關雜誌經營に關する事は現狀の儘引繼をなし支會に於て繼續すること
三、大日本蠶絲會新潟支會に調査部技藝部を設置すること
四、新潟縣蠶絲會基本財産及書類等一切は目錄を製調し引繼をなすこと

斯くて新潟縣蠶絲會の議事終了するや、鈴木幹事長は徐みに進みて之より支會總會を開會すと陳告して會務の報告を爲し並て松田副會長には新潟縣蠶絲會より合併申込の件を諮る處あり滿場異議なく承認することに決し更に同氏は之より總會の式を擧行すべしとて左の式辭を代讀せられたり。

式辭

本日茲に大日本蠶絲會新潟支會第一回總會を開き蠶絲業功勞者を表彰し蠶絲業の改善發展を講究せんとするに當り松平會頭閣下並に貴賓各位の賁臨を忝ふしたるは本會の光榮とする所なり惟ふに國運の隆替は富力の强弱に因し富力の强弱は生産事業の盛衰と相隨伴す故に富力の增進國運の隆昌を希圖せんと欲せば須らく生産業の發達を計らざる可らず而して蠶絲は本邦貿易上優勝の位置を占め之が盛衰は國力の消長と密接の關係を有す苟も業に蠶絲に從ふ者常に研鑽練磨産額の增殖と品質の改良に努むると共に外は世界に於ける蠶絲の狀況に通じて販路の擴張を期し一意專心國力の充實を期せざる可らず翻て本縣蠶業の現況を觀察すれば地廣くして人多く擴張の餘地多大なるものあり然るに製絲の業未だ進まず育蠶の技術幼稚にして蠶種の供給は縣下養蠶家の需要に不足すること遠く桑樹は年と共に疲癈に傾き整理改良を謀むること急にして增殖の實を見ること少きに拘はらず最近秋蠶の飼育數は非常に增加するの奇觀を呈す斯の如きは斯業の將來に如何の影響を及ぼすかは大に考慮すべきの問題たり此機に際して本會を開催し多數共同の力を以て斯業に關する諸般の調査研究を重ね前途の方針を確定し技術の普及に努め秩序的進步合理的擴張を計らんとす然りと雖も事を創むるは易く果を收むるは難し冀くは會員諸氏勞功を永遠に期し協心戮力本會の目的とする所を體し所期を空ふせざらんことを一言以て式辭とす

明治四十年十月四日

大日本蠶絲會新潟支會長　伯爵　清棲家教

次に會頭松平男爵は左の告辭を朗讀せらる。

告辭

本日茲に大日本蠶絲會新潟支會第一回總會を擧行せられ不肖正直來りて此盛儀に列す欣躍の情に堪へざるなり

惟ふに北越の地たる沃野遠く開けて稻田相連り米産既に豊に油鑛又全國に冠たり而して輓近蠶桑の業亦發達して養蠶戸數十萬を計ひ繭立枚數八萬有餘を算す本縣を以て我國屈指の産業地と爲す敢て過賞の言にあらざるべし而して曩に大日本蠶絲會の地方支會を置くや明治二十七年率先支會を設置したるは即ち本縣なりとす當業者の斯業開發に熱心なるを以て察するに足る然るに其後更に新潟縣蠶絲會の起るありしも兩會の當局者時勢に鑑みる所ありて今回兩會合併の熱議成り本日之が實行を觀る寔に本縣蠶絲業のために慶賀措く能はざる所なり抑も社會の事業たる大成を期するには多數の協力を藉るにあらずんば之れが有終の美を濟すこと能はざるなり況んや戰後の經營として蠶絲業の振興を圖り國家富强の基礎を築かんとするに於てをや希は會員諸君一致協力益斯業の改善發達に努力し小は以て地方の富源を涵養し大は以て邦家の隆昌に貢せられんことを禱か所思を述べて告辭とす

明治四十年十月四日

大日本蠶絲會々頭　男爵　松平正直

次に清棲知事は左の祝辭を朗讀せられたり

祝辭

今や國貿多端富力充實の急を感ずる切なるの秋に當り大日本蠶絲會新潟支會第一回總會を開き國家經濟に至大の關係を有する斯業發展の策を講究せんとす洵に時宜に適したるの措置なりと謂ふべし惟ふに本縣の蠶絲業は逐年多少の進步を示すと雖も前途倘擴張の餘地多大にして改善整理を要すべきもの少からず特

に最近桑園の設備未だ整はず年々荒廢の傾向あるは斯業の前途を危殆ならしむるものにして大に警戒を要すべし會員諸氏希くは協力一致諸般の要項を調査講究して秩序的進步を圖り斯業改善の實を擧げ其目的を達せんことを

明治四十年十月四日

新潟縣知事　伯爵　清棲家教

夫れより本多蠶業講習所長及中村縣農會技師の祝辭會員總代三輪扱次郎氏の答辭あり、次に鈴木幹事長は功績者褒賞授與擧行の旨を報告なし清棲支會長は左記の諸氏に對し夫々褒狀を授與せられたり。

蠶絲業功績者

故　松田産平　　故　岡村仁三治
養源社　　五十嵐正松
越陽館　　山田政嗣

支會功勞者

門村直中

尙ほ八十餘名の工女に對し夫々授賞ありたる後ち受賞者總代山田政嗣氏の答辭ありて午後一時式を閉ぢ一同會場前に整列し記念撮影を爲したり。

式後來會者に折詰を頒ちて午餐の饗應あり、暫時休憩の後ち講話會となる、野頭農商務技手演壇に立ちて蠶絲業の大勢より縣蠶絲業の改良に說き及ぼし一時間餘に渡りて長廣舌を振ひ、次で松平會頭には嚴然たる態度を以て壇上に進み、雄偉なる北越の山河は舊識なり長深なる因緣を有する新潟縣は他縣にあらず顧みれば四十年前、戊辰戰役には官軍に從ひて來縣し又赴任して參事となり明治四五六の三ヶ年を平松、楠本兩知事の下に勤務し爾來一二回來越せりと雖も明治十一年後又た其の機會を得ず、歲月流るゝが如く早くして已に三十年、達然現今の新潟を觀察するに及んで殆ど隔世の感なくんばあらず、當時の新潟の恣態は明治十一歲の頑是なき小兒の如くなりし、而して今や昔時選ましく成人し壯丁として國家に奉公し、又た花曾は綻びざる稚蕾の乙女が其容色輝いて貞淑の婦人となれるに似たり、余は諸君に對して親友たるの觀念を去る能はず、余は諸君か、然らざれば諸君の父兄と親友たりしなり、爲以我日本各府縣の內、强大なる實力を有し、之れを秩序的に發展せしむるならば其第一位の富力を致すものは新潟縣ならん、越後は實に日本の富源なるべしと信じ常に新潟縣を忘れざりしなり、偶々今回の招請に依りて來縣の機會を得たるに就ては、岸次鐵道の通過する所、彼の山河は舊友の如く來山、彌彦は余の曾遊せる所として懐舊の情に堪へざるなり、而して新潟支會に於て協議を盡すに於て一層の感慨なくんばあらず、無限の感慨に打たれながら余は諸君に何を語らんとするか、とて蠶絲業に努力し蠶絲會に盡瘁する所以を諄々數萬言說き去り說き來て無限の感動を一般聽衆に與へられたり、夫れより本多所長は蠶絲業の改良に就て、統計的に論立して裨益ある講話を試みられ、午後四時閉會したるが同六時より新潟市三大料理店の一たる鳥清館に於て一大懇親會を開かる、會する者二百五十餘名山田政嗣氏の開會の辭に並き松平會頭の謝辭あり、獻酬互に胸襟を開き談笑交々歡を盡して午後十時散會したり。

會頭松平男爵の視察せられたる新潟鐵工場の況　（其二）

翌五日松平會頭には製絲家協議會に臨みて一場の講話を爲し、夫れより吉田市長白勢春三坂本有隣櫻井市作木間新作等諸氏の案內にて、港口を觀察せらる、日本五港の一たる同港も流砂填充して淺瀬となり大船巨舶を入るゝに由なく爲に市の繁榮を殺ぐもの尠からざるを以て、市民は勿論縣民は常に之を憂ひ國庫の補助を得て巨額の資を投じ、突堤工事を起すもの前後數回而して狂瀾怒濤の爲に突堤の大半は空しく崩壞し去り其狀慘たる者ありし、嗚呼此工事縣民の爲には如何に一大痛苦なりしならん、突堤の觀察を終りて會頭には更に對岸の山下鐵工所に移り、所長笠村萬藏氏の案內にて隈なく場內を觀察せらる、其規模の廣大にして設備の整頓せる唯驚くの外なし、鐵工場は日本石油株式

會社が一々器械を海外より購入するの不便を感じ、明治二十九年五月創立したるものにして、今や自己所要の機械類は勿論汎く世間に向つて諸般の機械類を製作販賣し、製絲工場に用ゆる「ボイラー」の如き長野埼玉等の遠隔の地より注文し來り、而かも其製品は頗る完全に價格亦低廉にて、好評嘖々たるものありと云ふ、該視察を終りて會頭には新潟銀行に在勤せらるゝ諸氏の招聘を得、直に鍋茶屋に入り懇篤なる饗應を受けられたり。

明くれば六日一番列車にて歸京の途に就かる、林事務官森野代議士白勢春三櫻井市作本間新作の諸氏其他有志の人々百餘名、新潟停車場迄歡送せられ、汽笛一聲別を告げつ汽車は東都に向ひぬ、鈴木技師新津まで、松田副會長長岡迄、山田前議員柏崎まで見送らる、何ぞ其の厚意の切なるや、斯くて會頭には途中長野に下車して大山知事を訪ひ午後八時の終列車に搭じて翌七日午前五時無事歸京せられたり。

東北區實業大會へ會頭其他の出張

九月十日午前六時四十五分福島縣中村發にて會頭は辻學藝委員、小池事務員等を隨へ宮城縣仙臺に向ふ、福島縣知事以下十餘名岩沼驛まで同乘す、加賀山、林の二氏は歸京するを以て同驛にて分袂せり、九時仙臺に着す、西村宮城縣内務部長以下縣高等官有志者數十名停車場に迎へらる、會頭は一同と共に直ちに東北區實業大會場に臨む、松岡農商務大臣、岡商工局長心得等既に東京より來りて會場に在り、九時三十分西村内務部長は大會委員長代理(龜井宮城縣知事病氣の爲め)として開會を告げ、大會長の選擧を行ひ、次で農商務大臣は約二時三十分間に亘る告諭的演説を爲し、松平會頭又祝辭を朗讀せられたり、次に來賓の祝辭、中村緯木辻三氏の報告ありて午餐の饗應あり、午後よりは東京より出張したる專門學者の有益なる演説ありたり、會頭一行は針久旅店に投じ、午後より宮城支會、蠶絲同業組合 織物染色同業組合の發起に係かる松岡農商務大臣 松平會頭の一行其他東京より出張したる各技術家の招待會を陸奥館に開く、來會者約二百餘名、早川智賀氏一同に挨拶を爲す其要に曰く

農商務大臣は政務御繁多の折柄にも拘らず遠く來りて、東北の産業に就き懇切なる御示教を辱ふせり、我々は謹んで御懇示に背かざらんことを期す、而して吾蠶絲業者は今後誓て之が發展を圖り、縣下に於て一萬町歩の桑園を拓き、十萬石の蠶繭を穫、一萬個の生絲を製するに至らしめんことを期す、之れ吾々同志を代表して閣下に誓ふ所なり、若し之を實行するを得ざるあらんか、我々は何の顏あつて大臣閣下に見るを得ん、單に閣下の御垂教に背くのみならず我祖先に對しては不孝の子となり、國家に對しては不忠の臣となる、焉ぞ此の所期の目的を達せずして可ならんや云々。

大臣は來賓一同に代りて挨拶あり、非常の盛會を以て午後十時散會せり。

十一日午前九時より大會場に於ては學者專門家の演説あり、別室に於て各部會を開く午後部會聯合會ありて蠶業に關する事項は左の決議を報告せり。

一、國費を以て東北に女子蠶業講習所を設くることを其筋に建議すること

一、國費を以て夏秋蠶講習所を東北地方に設置せられんとを其筋に建議すること

本會學藝委員なる辻輔太郎氏は桑樹栽培に就て、同楓並太郎氏は桑の胴枯病に就ての演説あり、松平會頭又東北の産業に關する一場の演説ありて午後六時閉會せり、夫れより仙臺市の催に係る巴源園の歡迎大宴會に臨む、來會者の數六百餘名、庭前に大舞臺を作り劍舞其他の手踊等數番の餘興あり、當市稀有の盛會にして場内の裝飾、幹旋共に甚だ整備せり、午後十時散會、松平會頭は此夜當市の紳商大野清敬氏の招待に依り小池事務員を隨へ同氏の邸に轉宿せり。十二日松島に於ける園遊會に臨まんが爲め午前十時大野氏と共に同邸を出で仙臺停車場に至る、該園遊會に出席する者七百餘名の爲に臨時列車を仕立て午前十時二十五分塩竈驛に至り一同と共に汽船に乘じ松島に向ふ、汽船四隻小船四十餘艘、都て滿艦飾を爲し煙花一發と同時に纜を解き、蜿々長蛇の如く松島灣頭に向て進行す、先導の汽船は樂隊を奏し 第三隻の汽船よりは轟々として絶へず煙花を揚げ、各船悉く「ビール」と水菓子を饗する等待遇甚だ至れり、而して長蛇の如き五十艘の大小船は既に天下の勝景無數の群島間を縫ひつゝ行く、其壯觀實に筆舌の能く盡し得べきにあらず、既にして松島灣に着すれば轟然數發の煙花は灣頭に鳴り響き、無數の國旗は其附近一帶を飾られたり、上陸直ちに天幕内に設けられたる立食場に入り各員の整列するを待ち、西村内務部長は起て一場の挨拶を爲し此に園遊會は開始せられたり、鄭重なる立食の外附近斷岸絶壁の上蓊々たる松林の間喫茶店を設け、餘興としては大舞臺を作りて百數十名の紅裙交々舞踏を爲して興を添ふる等、設備待遇頗る至らざるなく來會者一同遺憾なく歡を盡して散會したるは黄昏の頃なりし。

此夜松平會頭は陸奥館に開きたる和達市長、早川、大野、其他縣故深き郡長有志者等四十餘名の催しに係る鄭重なる歡迎宴會に臨まれ、翌十三日午前西村内務部長其他縣高等官有志者等約十名に送られ六時十分發にて歸京せられたり

蠶桑雜觀

▲**佛國製絲奬勵の無効** 佛國養蠶業及び製絲業現行奬勵法は、千八百九十二年即ち明治二十五年發布の法律に因て制定せられ、其後千八百九十八年即ち明治三十一年發布の法律を以て改正復新せられたるものなるが、該奬勵法は將に來る四十一年五月三十一日を以て其期限滿了に垂るべきを以て、政府は豫め斯業の善後策を調查諒究することに決し、即ち此程商工務省は關係諸縣の各商業會議所へ廻文を發して、將來斯業に對し適用すべき制度及び現行奬勵法を依然繼續するの適否等に關し、當業者等の意見を徴するに當り、主ら其管理に屬する現行製絲業奬勵實行の奈何に關し陳論する所あるを見るに、同省が該奬勵法は實効を奏せざるものなりと敢て聲言せるが如きは、公然其の無効の事實を證明するものなり、同省は現行製絲業奬勵法實施後、即ち明治三十一年以降昨三十九年に至る間、國庫より支出せる該奬勵金額と、内地の生絲製産額及び製絲場の數とを對比したる結果、該奬勵法効果の毫も滿足すべからざるものに似たることは是れ認識せざるを得ざる所なりと聲言し、引證するに左記甲乙號の統計表を掲載せり明治三十一年七月一日より三十九年十二月三十一日に亘る八箇年半間、製絲業奬勵金支給總額は三千四百六十六萬千百五十四法五十參に達せり、其内譯を年割すれば左表の如し。

甲號表(下半季)

年次	奬勵金支給額	年次	奬勵金支給額
三十一年	二、一四一、四八六、二五法	三十二年	三、九九四、九三六、七三法
三十三年	四、〇三〇、三四五、五〇	三十四年	四、一六七、九五一、四三
三十五年	四、二八九、四二三、八〇	三十六年	四、〇二三、一五五、九七
三十七年	三、八三七、二三一、〇〇	三十八年	四、〇六四、五一八、五八
三十九年	四、一一三、一二三、二四	計	三四、六六二、一五四、五〇

乙號表

年次明治	製絲場數	佛國繭生絲	外國繭生絲	合計
三十一年	二七三	六七一、五八六基	一四七、三四七基	八一八、九三三基
三十二年	二五七	五六四、九九三	二〇四、九三四	七六九、九二七
三十三年	二五七	五八七、〇三六	一八五、四八〇	七七二、五一六
三十四年	二四七	六七五、一五五	八四、九六二	七六〇、一一七
三十五年	二四六	六八五、四五九	一二三、六五〇	八〇九、一〇九
三十六年	二四〇	五五二、三四六	二〇四、〇七四	七五六、四二〇
三十七年	二二九	五七一、八七八	一六一、七一二	七三三、五九〇
三十八年	二二六	五九八、一六五	一六〇、二五〇	七五八、四一五
三十九年	二二六	六五七、七九七	一二四、九九九	七八二、七九六

現行製絲業奬勵法の無効に關する同省所論の大要に曰く、「前表奬勵金の支給に對する監督費を計入すれば、前記八箇年半間國庫の支出金總額は約三千五百萬法となるべし、斯く奬勵金は多額に達せりと雖も、機業に原料生絲を供給すべき製絲場の數は増加せざるのみならず、反つて減退せるを見る、即ち千八百九十八年(明治三十一年)の二百七十三箇所より千九百六年(同三十九年)の二百二十六箇所に降り、四十七箇所即ち一割七分の減少を示し、而して此減少を償ふに足るべき生絲製産額の増進は現存せる製絲場に見ざる所なり、即ち生絲製産額は千九百八十九年の八十一萬八千九百三十三基より、千九百六年の七十八萬二千七百九十六基に減退し、其差は恰も甲乙年間廢業の製絲場に於ける釜數約二千箇に殆んど相當するものとす、夫れ斯の如く佛國製絲業の振はざる原因たる固より内地收繭の不足に歸す可からざることは等しく奬勵金を享有する外國繭の輸入に因て此不足を補ふの途あるに拘はらず、其輸入は左表に示すが如く減退の狀あるに因て實證せらるゝ所なり。

外國繭輸入表

年次	輸入額	年次	輸入額
三十一年	一、一一六、四〇四基	三十二年	一、一二〇、五一三基
三十三年	六三三、五〇〇	三十四年	三八四、一〇〇
三十五年	七六〇、四〇〇	三十六年	八七六、三〇〇
三十七年	七四五、〇〇〇	三十八年	六一〇、〇〇〇

三十九年　　　七一七、二〇〇

特又佛國製絲業産額減縮の理由として機業需要の不足を說くが如きは機業近年の活況を記載せる輸出入物價調査委員會年報の否定する所にして、復外國産生絲輸入額の增進に關するも其說の不當なるは認識さるゝ所なるが如し、然らば斯業の發達せざるは果して一部斯業者等の持論の如く職工募集の困難なるに基因するものなりと謂ふことを得べき乎」と論及するに止り、是等の原因に關しては論定する所なきも、現行奬勵金率は客年に於ては原料繭産地の內外を問はず、生絲一基に付き平均五法二十五仙强即ち生絲價格の凡一割弱に相當すべきものなれば、一層有効的に斯業の發展を謀ることを得べきものに似たりとの意見なるを以て、同輯は前述の如く商業會議所に命ずるに國庫の負擔を增大せずして、斯業の現狀を療治すべき善後策及び是れが將來の隆盛を謀るに適切なる方法に關する、當業者等の意見殊に現行製絲業制度に關する是等の批議を徵し詳細報告すべき旨を以てせる所なれば、本問題に對する政府の意嚮は多少の變更を加へて現行制度を維續するにあるべしと思惟せらる。

▲蠶絲業協議會

去月二十一日より一週間農商務省に於て各府縣の蠶業に關する技術官を召集し協議會を開かれたるが本省よりの諮問案に對する其答申左の如し。

第一問

一、蠶病豫防に關する件

い、蠶病豫防法施行の結果に徵し不備不便と認むる點

答申

（一）蠶病豫防法第三條中へ蠶種製造業者を加ふること

（二）同法第九條中「同一飼育時期に於て」を「同一時期に於ては蠶兒掃立より産卵終了迄」に改むること

（三）同法第十八條を改正し蠶病豫防に關する費用は國庫の負擔とすることと

（四）同法施行規則第五條中「蠶兒の四齡以後」とあるを「飼育中」と改むること

（五）同法施行規則第三十三條の但書を「地方の狀況により之を繰上くることを得」に改むること

（六）蠶病豫防事務取扱規定第四條中へ床下に潜伏せし蠅蛆の孵化に際し驅蠅器を裝置して蠅蛆を捕ふるの一項を加ふること

ろ、蠶病豫防施行規則中蠶種の名稱の變更を許可すへき規定を設くるの可否若し可なりとせは其の方法

答申

蠶の名稱變更は之を許可することとし其の方法は當業者より理由書を差出さしめ地方長官之に許否すること

は、蠶種製造屆出事項中變更を許すへき程度

答申

蠶種製造屆出事項の變更は自由に之を爲さしむること

第三問

一、道府縣に於て蠶の種類を制限するの可否

答申

制限するを可とす其の方法左の如し

（一）道府縣の事情により養蠶者及蠶種製造者に對し道府縣令の發布若くは同業組合等の定款により之か規定を設けしむること

（二）道府縣に原蠶種製造所を國費を以て設置し系統的に種類を制限することと

第四問

一、養蠶者と生絲製造者との聯絡を圖るの方法

答申

養蠶製絲の各業者をして其地の狀態に適應せる組合を組織せしめ相互の聯絡を圖ると共に左記の事項を實行せしむること

（一）蠶業技術者を置き相互の聯絡を圖らしむること

（二）原蠶種の撰定には養蠶製絲の兩業者を參與せしむるの途を設くること

（三）繭の共同販賣をなし製絲業者と直接取引を爲さしむること

（四）製絲業者をして購買繭の品評會を爲さしむること

第五問

一、道府縣に於て桑園改良增殖の奬勵を實行するに最も適當なる方法

答申

道府縣は桑園增殖を圖る場合に於ては左の施設に依るを可とす

（一）郡市町村又は各級農會其他の團體に於て養蠶家に配布すへき桑苗を採取する爲め桑苗圃を設置したるときは補助金を交附すること

（二）桑苗の配布を受けすして桑園を改良增殖したる者に補助金を交附すること

第六問

一、生絲の共同揚返又は共同荷造販賣を速に實行せしむる方法

答申

共同揚返又は共同荷造販賣に關し道府縣に於て奬勵費を施設するものに對しては相當の金額を國庫より補助せられたし

一、指導監督に關する技術者設置に對する費用

二、共同揚返場設置に關する費用

三、共同荷造販賣に關する費用

▲坐繰問題と米國絹業協會の通牒

久しき間蠶絲業界に於ける大問題として世に知られたる外商對上州南三社坐繰直輸問題は、原茂木澁澤三氏の居中調停に依り、遂に去十二日雙方の委員會見して其意志疏通して無條件の下に熟議整ひ十四日より從前の如く取引きを開始したり誠に洵に喜ぶべきことなるが今は既に過去の事に屬すれども米國絹業協會が該問題を、如何に重要視せるかは十月四日同會事務所に於て米國絹業者の總會を開き左の決議書を橫濱商業會議所に廻附し來れるに徵しても明かなり六箇十箇の感あれども參考の爲に其決議書を揭くることゝせん。

決議書

商業競爭は商事の實際に於ける一大主義たるが故に日本の生絲貿易は大に發達しその金額今や一年六千萬弗に上り日本外國貿易品の最大なる項目を占め合衆國への輸出のみにても一年四千二百萬弗に上るものあるが故に、而して橫濱の生絲市場は日本の輸出者と外國の輸出者とを問はず均しく一樣の條件を以てその賣買を行なへる公開自由市場たるが故に之と同時に紐育の生絲市場もまたその原産地の異同を論ぜずして賣買せる公開自由市場にして此の最善商業政策を固守したるが爲め紐育の生絲貿易は大發達を來せるものあるが故に、本問題に關して決議すると左の如し

一、本會は合衆國の絹業者、即ち製造業者商業者、及び輸入者を代表して日本に於ける或る坐繰製産者が近來採りたる行動は其製絲の販賣を限りて同邦人の購買者の手を經由すること、なし、外國人の購買者に區別を割して以て其製産品の賣買に於ける自由公開的競爭の主義を忌避せんとするものにして商業上に於ける公平均等の主義を破壞する傾を作るものにして正しく商業家の擧つて排斥すべき商業上の罪惡を組成せるものなりと決議す

一、吾人は日本の三坐繰製造家が近時共同して採れる行動を頗る遺憾とするものにして、橫濱外國人生絲屑物商は八月九日の全會一致の決議を以て之に反對を表するに至れるが、吾人は右製絲所の持主に向つてその製絲を或る日本輸出會社の手を經由して販賣することになせる特惠制度を廢棄し、以て日本生絲輸出貿易の大發達を促致したる從來の公開販賣制度の速に復舊維持されんことを望む

一、吾人は日本生絲が世界の各市場に於てその賣買人の人種的關係により て商業的惠利を受くることなく平等の基礎の上に賣買さるゝ以上は其產地に於てもまた一樣に賣買さるべきこそ當然なるを信じ、橫濱生絲市場の公開自由なるを賛成す

一、本會の意見を以てすれば前述の制限は、若し之を繼續するに於ては、其坐繰製絲所の何たるを問はず、買人に區别して取扱び公開市場に於ける競爭を妄抑する所の製絲所の製出品の販賣を減縮するものあるべしと認む、此會合に代表者を出したる商家は可及的商業の自由主義を破壞する製絲所に對して區別處置を採ることを力めその製品の品質に於て同樣なる限りは、公開自由販賣の主義に從ふ製絲家の製絲を歡迎せんとす

一、以上決議の寫を華盛頓日本帝國公使紐育駐在日本領事、日本生絲商製絲家の團體及び橫濱外國生絲輸出商の團體は送付すること

▲高山社共進會

群馬縣多野郡藤岡町なる養蠶改良高山社にては本月一日より第二回品評會を開催し、同町公園高山長五郞氏の銅像前に於て、園會式を擧行したるが、出品點數四千餘點の多きに達し日々の參觀者引きも切らず一昨々日日褒賞授與式を擧げたり右の狀況は次號に詳記すべし

▲聯合共進會蠶絲部の獨立　曩に本會は明治四十五年に開設せらるべき日本大博覽會に、蠶絲館建設の義を主務大臣に建議する處ありしが、又近く明四十一に開催せらるべき長野縣主催一府十縣聯合共進會にも、蠶絲部獨立の義を提出して夫々聯合府縣へ交渉する處ありたり、爾來大山長野縣知事は專ら之れか目的の貫徹に盡瘁せられつゝありしが其結果去月二十日の聯合府縣協議會に於て愈出品部類第三部蠶絲を新設し、蠶種、繭、生絲、蠶具、眞綿、絹、紡績絹、撚絲　蠶絲業の經營及生産に關する方法成績等は一區域又は一館に陳列することに確定したり、右は將來の博覽會又は共進會等に對して、好個の模範を示すものにして、斯業の爲め慶賀措く能はざる處なりとす。

樂園

花の本花翁宗匠選

（三才景）

秀逸

天長の佳節を祝ふ新酒哉　陸中　獨醒
話す間もさびやまさらん市の鮎　出雲　爾水
ちる花に馴ひし鐘や夕紅葉　武蔵　子温
新酒召すあしの丸屋の宗匠哉　越後　登流
鹿啼や双岡の夕紅葉　薩摩　小竹女
新酒二升二人醉たる笑哉　岩代　寒月
大椋や石に化す根の蔦紅葉　木曾　樂居
落鮎に山の便りもきかまほし　丹後　松風
水晶の照りも氣味よき紅葉哉　信濃　芳山
下り鮎餌をあさるへき友もなし　遠江　一遊
勅額の金字輝くもみぢかな　豊後　青柳
春からの思ひ種なりあら走り　上毛　謎月
栄の荷に一枝惜しき紅葉かな　阿波　霧の家
こほろぎの月に鉦濃る尼の庵　名古屋　冷露
御車もとめる紅葉の力かな　甲斐　其来壽

鳥にも捕られさうなり下り鮎　武蔵　雪月
天高く氣の澄む月や夕紅葉　伊賀　緑月
最ふ關も土俵の息や角力振り　近江　泉若
三代の榮え美くし棒もみぢ　廣島　孤松
老か腰のすも新酒のちから哉　信濃　赤舟
散てさへ錦重る紅葉哉　東京　一九
百藥の長と儀む新酒哉　熊本　雅水
到に日のさすかと思ふ紅葉哉　上野　雲嶺
關取や鞄仕立の煙草入　美濃　花月
豐作の今年も祝ふ新酒哉　木曾　幾子
深山路やこほろぎむせふ二里三里　周防　梅子
こほろぎやあゆみ疲たる庭の石　築川　甲子
崖千仭見下す水のもみぢ哉　丹後　秋琴女
豐作の餘慶を薫る新酒哉　周防　松琴女
松風の色吹分る紅葉かな　東京　一枝
裡る門壇てめてたき新酒哉　埼玉　一枝
落鮎や澄む谷底の水の塵　千葉　一羽
笠とるやこほろぎ一の又一つ　甲斐　一絹
弓取の古式も守る角力哉　信濃　一平
落鮎や流れに蹤る秋のいろ　山口　一風
こほろぎや夜の物簿き旅枕　埼玉　一咲
落鮎の尺に滿けり[illegible]　岐阜　秋水
馬市の崩れて賣れる新酒哉　埼玉　秋水
落鮎や未た寂きらぬ瀧の秋　愛媛　天外

こほろぎ月照る墓の石の缺　甲斐　天川
入日さへ知らぬ風情や紅葉狩　長濱　南枝
こほろぎや貧しいとはぬ蜑所　丹波　三巴
落鮎や早瀬を下る鰭つかひ　信濃　松月
何舟の下荷に匂ふ新酒哉　三河　其考
轉ふ落上手にとりし角力哉　越後　越峯
關守のかたみ世に經る紅葉哉　豐後　霞城
こほろぎや浮世の秋を終夜　三河　秋樂
花に來し道をしるへのもみぢ哉　上毛　三猪
負けなから奥の手を知る角力哉　安藝　靜月
こほろぎや胜か藥を煮る伏屋　東京　月々
花の鮎紅葉の寂を下りけり　上毛　渓月
落鮎や瀬清き水の翠　豐橋　井古
こほろぎや何生活の蚤ところ　群馬　立花
其稽古儀も出たる角力哉　三河　五洋
一入や紅葉の山へ雁わたる　信濃　小澤
さす紅も秋の色香やあら走り　東京　結絹
人聲の宮もうごかす角力哉　備後　花堂
落鮎や幾瀬上りし旅つかれ　近江　文司
閑類の話しまとめて新酒哉　遠江　翠堂
世の無事を神に捧る新酒哉　上毛　山光
由緒あるところに多き紅葉哉　長濱　招鼎
こほろぎや啼明す夜に透む冷　仙臺　醉佛
落鮎の腹を見せゆく早瀬哉　信濃　依水

畑に山に味ひ深き紅葉かな　甲斐　潮月
常盤木も淨かるゝ色や蔦紅葉　近江　松月
落鮎や水の早さに押れゆく　信濃　みどり
強飯に爽も顯ふ新酒哉　福島　萩村
樹標ぬるてゑひつゝる蔦紅葉　美濃　耕夫
落鮎や川漁の杖も氣養ひ　信濃　佳峡
魚鉢にちるも靜けし夕紅葉　遠江　影山
落鮎や夕風の音水の音　紀伊　巍峰
見上るも踏むも山路の紅葉哉　丹波　土塵
落鮎や扇堰にも豐の影　美濃　蘆水
設敎の高札たちぬ散紅葉　伊勢　中澤
落鮎や瀬音も冷る夕日かけ　羽前　M M
稻の香も未たありさうな新酒哉　但馬　楓村
落鮎やたましひからむ川の草　信濃　氷淵
しがらみに落鮎つとう淀み哉　東京　寒月
口々に杜氏を誉る新酒哉　上毛　逸川
目休めもあるや紅葉に松一と木　甲斐　精進
こほろぎや冬の仕度の急かるゝ　備後　櫻里
馬を呼ふ祭も新酒の機嫌哉　信濃　竹笠
峯へ峯里七里のもみぢかな　武蔵　道風
こほろぎや亡友思ふ夢の寂　廣島　仙水
こほろぎや酒も油も同し庫　甲府　竹窓
遠山の爛黒き紅葉かな　相摸　嶽六
こほろぎや風も身にしむ侘住居　京都　素華
酒の座へ改て出す新酒哉　羽前　源水
雨霽て山々近しむら紅葉　近江　河村
こほろぎや臼の中にも一と世帶　上毛　刀水
落鮎や京队た尾を振てゆく　大分　雪花
こほろぎにつゝれさゝせん旅衣　武蔵　土方
落鮎やさゝもなき雨に流さるゝ　甲斐　橋里

菅庭に龍田と偲ふもみぢ哉　上毛　寸馬
こほろぎや今年も無事の庭になく　岩代　七三樓
秋の寂鮎にも洩れぬ浮世かな　三河　秋宗
こほろぎや雲間の月も誘引出す　丹波　悠々
落鮎や春來し瀬々を下り行く　伊賀　仙良
こほろぎや足らぬ日脚に走る人　甲斐　素月
山里や寐て紅葉見る鳥の巣籠　下總　鬼堂
花程や楓紅葉の愛らるゝ　信濃　清櫻
こほろぎや叉手のゆるむ夢先　安藝　知足
世に染まぬ深山と見えぬ紅葉哉　越後　牛笠
こほろぎや宿ふるさとの偲ばるゝ　日向　愛岳
雨の夜や新酒買ひ來る庵の妻　信濃　東水
此處り先つ紅葉見の木樵哉　岐阜　劍峯
弓を得て肩身ゆたかの角力哉　丹波　規部
こほろぎに啼や今宵もついに更る　信濃　峯龍
よしあしに下戸の口借る新酒哉　千葉　梅居
智惠と力二人蓮立つ相撲哉　京都　叠翠
こほろぎや月の淺茅を損捨て　三重　古城
ゆら／＼と落鮎淺瀬下りけり　福島　鵬城
こほろぎや馬屋の隅の捨俵　下毛　緑天
瀬に飛し鮎もさびけり[illegible]　下野　蕉耕
一杯の秋を味ふ新酒哉　京都　陸峡
湖の澄む神の御山の紅葉哉　陸中　奇渓
こほろぎの一つな庵の馳走哉　靜岡　諸月
蓄夢畑の上に響ふや楓紅葉　肥後　鷺南
落方は何處の水脊そ下り鮎　丹後　大江山
迷ひたる道も嬉しき紅葉哉　甲斐　甲村
海川の宮や秋を鮎のさび　信濃　和人
紅葉する木の枝低し神の森　埼玉　竹友
落鮎や思ひ掛なき山旅籠　岩代　碧水

こほろぎや酒飲に寄る宿の月　常陸　菊治
上露の鮭ひ白し紅葉狩　横濱　素秋
餘の木から暮よせて來るもみぢ哉　下毛　曉光
寂寥も共寂のして下り鮎　神奈川　英松
曉家の株に見榮や柿紅葉　長濱　鈴駒
こほろぎや昔を偲ふ古戰場　伊豆　笑兒
豊なる世の味ふくむ新酒哉　遠江　蠶泉
數島に錦を着せるもみぢ哉　信濃　北峯
庭の月響る新酒のとよみかな　三河　柳司
暮惜む鏡の冷けり紅葉狩　岐阜　農好
月の冷鮎さびる夜となりにけり　武蔵　扶桑
肉焼て爐に團居する新酒哉　羽前　北星
自轉車の笛にも醒る新酒哉　紀伊　東雲
こほろぎの聲に似合はぬ梁かな　丹波　遊山
鮎さびる厨に雨のしふき哉　木曾　古久泉
緑なる松に睦みのもみぢかな　羽前　樂山
重楽嬰は香に色に知る新酒哉　武蔵　竹闇
來る水の濁く淀や鮎さびる　下毛　陸山
松に夜を焼して明るもみぢ哉　豐後　晴嵐
こほろぎや莚に埋む石燈籠　越後　蘇峰
落鮎や瀬音の暮る日暮方　甲府　乙布
世に響く大砲の名や勝角力　下野　永樂
來と幽眼ふ里や今年酒　德島　幼稚
窓に香の色み餘りし新酒哉　埼玉　調月
眞心を色に見せたる楓哉　京都　農蠶夫
落鮎や今年は[illegible]　信濃　勝川
時ならぬ照りや紅葉の夕霞　美濃　二朝
草紅葉ふむや蘭に遊ぶ山　信濃　花扇
秋の鮎頼き木の葉と流れけり　伊勢　旭櫻
こほろぎや月漫る壁の片明り　静岡　久永

角力取り皆勝さうな名なりけり　笑澄　花島

こほろぎや鍬とて軒に疲る月　信澄　登山

酔ふ人に又訪はれけりけり夕　紅葉　三重　清蘭　花なちばいろ〳〵の名や紅葉哉　同　孤葉　日和ふく風や新酒の酔心　涼江　白雲

蹲坐や底て見せけり花角力　羽前　英山　こほろぎや何にもかもよる由の冷　信澄　寛海

人住よの庭に望する紅葉襲　但馬　稲波　逢鮎の新冷誘引用燃り　甲斐　一壺　紅葉殿の炎嗽開えけり　静岡　郁堂

色も香も今日明けの新酒哉　上毛　華月　鳴み合ひてやもなくむ新酒襲　木曽　黛泉　秋水ふ家庭めてたき新酒襲　上毛　松亭

初霜の一つか絡りて紅葉かな　豊野　愛鷲　秋毎にかはらぬ御代のもみぢかな　京都　雲鶴　いろに出ぬ物なし鮎も秋のさむ　信濃　鷲鶴

明星やこほろぎ一つ夜るの聲　三河　ちさと　逢鮎や水からあかる秋の　いろ　信濃　新翠　逢鮎や雨降り待たるゝ筏さし　駿河　鳳麟

逢鮎や流るゝ雲の影　但馬　秋香　潮にさびる鮎や鱸の質除し辛　碧代　清鮮　鱈によき鮎や思し紅葉にも　埼玉　一島

こほろぎや代せ蔵る鍋の下あたり　碧代　無能　雨降やり紅より清き山もみぢ　長浜　雅月　逢鮎や花の夢見し吉野川　駿翼　自得

初紅葉焼夫も弊なれにして　大隅　南山　逢鮎や憂世に園ぬ浮沈み　信濃　素竹　逢鮎や花の香流し吉野川　埼玉　逸雅

釣船る人も寂けり秋の鮎　甲斐　五玉　逢鮎や憂世に園ぬ浮沈み　信濃　名古屋　紅葉　小流れも蔓つ架りやもみち　信濃　梵露

酒宴の鍋で来ますもみぢ襲　近江　江東　紅葉して鍋に二度の鍋かな　埼玉　直水　刈られ田も来たありなちや新酒襲　上毛　鳳月

こほろぎや宿曾の友もわび住居　信濃　一男　こほろぎの絶や話しの疑問より　岩代　有雅　花崎や山懐の水けぶり　甲斐　椿園

盛らせて見たさ目もあり夕紅葉　同　梅二　雪生米の日色蔵ふ紅葉襲　丹波　清月　煙めて秋の味知る新酒襲　近江　友潮

逢鮎や田舎料理の出来不出来　甲斐　城月　入る月を鍋に包むもみぢ襲　上毛　源水　人にのみ月日はたいす下り鮎　同　波溪　逢鮎

茶守の鼻気も見えず下り鮎　美濃　冷泉　二人して一杯の新酒飲りけり　日向　知英　逢鮎やふからみかけり川樽き　信濃　物翠

逆鉾折りてむら紅葉襲　羽前　白田　夕染な鱸めて暮るゝもみぢ襲　丹後　仙狐　待ち甲斐のありて善に立つ新酒襲　羽前　月山　逢鮎や雲の花さく紅葉かな　信濃　物翠

こほろぎや浸力さ夜の哀みみ　阿波　鷲夫　四方山に鳴に花さく紅葉かな　名古屋　隅の日に鍋に久垣るもみぢ襲　羽前　月山　逢鮎や雲の花さく紅葉かな　信濃　物翠

手枕を弊れば懸る新酒襲　武蔵　花友　こほろぎの鳴も来さうな夜の冷　甲斐　順風　こほろぎの鳴も来さうな夜の冷　丹波　桑甫　紅葉ちら〳〵奥あり黒と見えにけり　上毛　順信

逢鮎や雪車の　ありしあと　信濃　光鷹　芳月　逢鮎や小砂利すりゆく身の腹　信濃　黒翅　伊丹から引揚く新酒かな　信濃　吐月　行末を水に任して下り鮎　長浜　梅鳥　見上げれば月山白しゆら紅葉　羽前　豊産

逢鮎や雪車の　ありしあと　誠男　呉川　伊勢　信濃　黒翅　伊丹から引揚く新酒かな　信濃　吐月　行末を水に任して下り鮎　長浜　梅鳥　下り鮎流れも左程急ならず　豊橋　雲湖

逢鮎や花の見賞となる根なし　武蔵　客好　鱸鮎の梅も紅葉と馨ふ頃　信濃　義月

人

一般に河岸の動搖めく新酒襲　埼玉　素琴

地

賣買にさびた俗もなし市の鮎　柯波　花遶家

天

こほろぎや蓋明けて見る鍋懸　静岡　乾堂

追加

こほろぎや閻魔も古き庵の友　選者　花翁

選者

花の本花翁宗匠

題

殘菊。初冬。生海鼠。水鳥。時雨。

（入花無料原稿〆切十一月三十日限り）

懸賞

天（一人）会報一ヶ年分
地（一人）会報半ヶ年分
人（一人）会報三ヶ月分

規則

一題一句づゝ一人に付五句限り○用紙郵便一葉書地に松林花翁宛送らるべし○麻布東京麻六本木町紅葉亭本会々員若くば会員外と記し住地○國郡町村番地姓名雅號共明記さるべし。

懸賞俳句募集

▲英京市場の金利一週間内外に四五分より七分に鞏固市場の金利更に一段七分五厘の高利に達す昨年伊戦後の金利暴騰以来未だ例なき大波動。

▲米國經濟界の恐慌其主因にして華英金の流出な相が北米釣現度の恐慌なる程にはいまだ夫の如き波なきも之を謂ふか。

▲絶東の一隅に無隔さる本邦經濟界未だ著しく直接の影響を蒙らざるも間接の影響は大なる由我が政官民共に其極調に注意し臨機應變に之に備ひん。

▲農商務省　来年度に女子蠶業講習所を京都に新設せんとし其業務約十萬圓なりと。是して結もは仏女子蠶業教習でふ人しき問題と雖一部の輕決を見ん哉。

▲蠶越渡鵬　の術に女子者蠶業者の相製造造を警めん教等に越渡の暴落と逆ふと雖て狐狸せざるの聲情を異へしとは各府縣技師に対する從同農相の調査。

▲本年初頭　千四百十圓ものは上一曾絲ボ年を更へざるに急暴直下曾に千圓塞を喪らんとして遂に定期取引所の文合平止を餘儀なくせしる沟に是れ。

▲問港以來　前例なき現象此際猛重の盤度を以て尊敬な底理し鋼を鳴じて鋼運を廻らすに智者の所為然に呼今の人心染り に驕ぎて枯尾花の観なからずや。

▲今春埼玉　郡入間郡郡潮及元後山潮村の鋼青著一百数十戸の移立蠶種七百餘五餘盛貴期に於て悉く矣敗に歸し其損害二萬餘圓に及ぶと雖物なるかな。

▲齋藤同縣　技手調査の結果全く微粒子病毒の驚なることを認め得たり通かに云と微粒子とは蠶の乳砂なり分期する以後の取質なりとぞ。

▲盛岡高等　農林學校付属生産科場の計画に沿ひ研究爆発放鞭性細菌の寄生に基く一種の軟化病小蚕見見せりとさまく〳〵の蠶病もあるものかな。

▲齋藤外一市　氏製糸場の設置の発明の為に沿本家之吉氏後機械賞用調水器之蚕切り又は蠶糞音吉人雙手を働て此種の特明を飲引す。

▲外商到座　越直輸出題に原炭本業洋三氏の調査に基り去十二日双方の蠶見談解会を一掃して調査に解決したり吉人は新界の蠶大自か集て視せん哉。

人事彙報

▲毛品正容氏　本會山形縣支會幹事長にして山形縣技師なる同氏には從六位に叙せられたり。

▲河西大彌氏　本會特別會員にして山形縣技師なる同氏には正八位に叙せられたり

▲大林雄也氏　本會特別會員にして農事試驗場技師なる同氏には高等官三等に陞叙せられ五級俸を下賜せられたり四に同氏には攝ゝ官職を辭して靜岡縣茶業組合に入り不日洋行せらるべしと云ふ

▲四戸梅太郎氏　本會通常會員にして新潟縣北蒲原郡長なる同氏には西蒲城郡長に任ぜられ五級俸下賜せられたり。

▲廣瀨次郎氏　本會特別會員なる同氏には傳習奬勵等に留學せらるべく攝ゝ洋行の途に就かるべしと云ふ。

▲中山巳代藏氏　本會栃木支會長にして栃木縣知事なる同氏には高等官二等に陞叙せられたり。

▲川島純幹氏　本會滋賀支會長にして滋賀縣知事なる同氏には高等官三等に陞叙せられたり。

▲松岡忠一氏　本會特別會員なる同氏には岩手縣農業校長兼教諭に任ぜられ十級俸を下賜せられたり。

交詢餘錄

注意（本欄には自己營業の廣告に過ぎず「パストール」氏蠶病論（原種）一冊誤り受けたし御不用品御所持の方は御通報を乞ふ　岩手縣農學校内　池田榮太郎）

大日本蠶絲會報廣告料

	特等	並等
一頁	半頁	一頁半頁
一回乃至二回ニ付	四分ノ一頁	四分ノ一頁
十五圓	八圓	十二圓
五十錢	五圓	七圓
三回乃至六回ニ付	十二圓	十圓
七圓	四圓	六圓
十圓	六圓	三圓五十錢
七回以上一回ニ付	三圓五十錢	三圓
八圓	五圓	三圓

四分ノ一頁以下ハ一行ニ付金參十錢ヲ申受ク

◉本報定價　一冊　金拾五錢
一ヶ年分前金壹圓七拾錢

會員ハ右料金ノ二割引トス
特等ハ四分ノ一頁未滿ハ謝絕ス
料金ハ前金ニアラサレハ掲載セス
一頁ハ一行二十七字詰七十二行トス

明治四十年十一月二十日印刷發行

編輯兼發行人　東京市神田區美土代町三丁目二番地　小池市松

印刷人　東京市神田區美土代町三丁目二番地　島連太郎

印刷所　東京市神田區美土代町三丁目二番地　三秀舍活版所

發行所　東京市神田區美土代町三丁目二番地　大日本蠶絲會（電話本局一四七三番）

TABLE OF MOVEMENT OF SILK IN DIFFERENT INDUSTRIES.

(October 1907.)

	Report.	Brought over.	Arrivd.	Arrivd.	Vendu.	Sold.	Exports.	Export.	Renvoys.	Sent back.	Arrepetier.	Brought forward.
	Picul.	Picul.	Picul.	Picul.	Picul.	Picul.	Picul.	Picul.	Picul.	Picul.	Picul.	Picul.
Filature.	8.742	4.672	13.420	8.428	8.428	—	—	—	319	319	13.391	13.391
Zagari.	2.666	2.726		1.419	1.419	—	—	—	2		3.970	3.970
Borsol.	1.238	1.000	2.238	643	643	—	—	—	10		1.598	1.598
Kakola.	48	32	80	—	—	—	—	—	7		73	73
Autres.							12.377	12.377	238		19.052	19.052
Total.	12.694	17.178	29.872	10.490	10.490		12.377	12.377	576		38.187	38.187
1906.	11.205	15.228	26.433	17.754			18.011	18.011	482		8.197	

TABLEAU DU MOUVEMENT DES SOIES RÉPARTI EN DIVERSES INDUSTRIES.

(October 1907.)

MARCHE DES SOIES.

MARCHÉ DE YOKOHAMA.

Citons sommairement la situation de notre marché au mois d'Octobre dernier.

Comme continuation du mois précédent, la demande a été très active pendant les vingt premiers jours ; mais, sous l'influence de la baisse de pièce d'argent à Londres, et en tenant compte de l'augmentation de l'exportation des soies chinoises, augmentation qui serait causée par la fluctuation du cours du change sur Chine, notre marché n'a pas tardé à perdre de son activité. Le prix des soies qui avait progressé jusqu'à 1,245 *yen* pendant la seconde dizaine, a baissé subitement à 1,100 *yen* dans la dernière dizaine. La crise financière des Etats-Unis vient d'ailleurs causer une nouvelle accalmie sur notre place. Aussi, au moment où nous écrivons cette courte revue, les soies à livrer accusent-elles même un bas prix de *yen* 10-50, et *Shinshu* filature No. 1 baisse jusqu'à 1,050 de *yen*. Cet abaissement des prix n'a pas du tout contribué à animer les affaires, qui restent toujours presque nulles.

RAWSILK MARKET.

THE YOKOHAMA RAW-SILK MARKET.

The condition of the Yokohama Raw-silk market in October may be summarized as follows:—

In the first ten days of the month under review, the condition of the market remained just as active as in the preceding month. Later, however, the market came to lose somewhat of its activity in anticipation of the great exportation of Chinese silk which would result from the fluctuation in exchange vis-à-vis China incidental to the great fall in the quotation of silver at London. Coming to the next ten day, athe quotation of silk advanced to Y. 1,245, which, however, in the last ten days, again collapsed at a single bound to Y. 1,100. Furthermore, the panic in the American financial circles inflicted not a little influence on the market here and accelerated its dull condition. So that, at the moment of writing this note, the term silk which is always considered as a sort of the weather-cock of silk quotation, was quoted at Y. 100.50, while extra No. 1 of *Shinshu* fell to Y. 1,050 ; and even at these low prices transactions were not made satisfactorily. Altogether, the market presented a very dull and gloomy aspect.

Les tableaux suivants indiquent d'ailleurs le mouvement des soies durant la même période.

TABLEAU DU MOUVEMENT DES SOIES RÉPARTI PAR JOURS.

DIAGRAM SHOWING DAILY MOVEMENT OF RAW SILK.

Jours. Days.	Arrivée. Arrived.	Vendue. Sold.	Renvoyée Sent back.	Exportée. Exported.	Noms des filateurs. Names of filaturs.	Prix. Prices.
	Soie. Silk.				Maximum du prix. Highest prices.	
	Picuis.	*Picuis.*	*Picuis.*	*Picuis.*		*Yen*
1	687	758	20	—	Shunmeisha.	1.395
2	658	683	9	—	Mikawakwan.	1.375
3	312	415	5	—	Omiyaseishijô.	1.380
4	759	451	14	2.265	Kônanaha.	1.465
5	558	284	21	1.601	Shunmeisha.	1.400
6	—	—	—	—	——	—
7	1.181	330	9	—	Matsushirokwan.	1.340
8	376	440	—	420	Morisswaseishijô.	1.465
9	337	544	20	—	Marunikwan.	1.380
10	510	500	11	—	Kôhakusha.	1.350
11	972	273	26	—	Ozawagumi.	1.345
12	522	404	5	2.231	Kokuhôsha.	1.400
13	—	—	—	—	——	—
14	901	426	10	—	Kôseisha.	1.340
15	875	328	25	—	Kaiyôsha.	1.330
16	744	552	22	1.410	Tôkôsha.	1.340
17	—	—	—	—	——	—
18	7.064	415	22	—	Kinugawaseishijô.	1.450
19	536	221	8	723	Kônansha.	1.450
20	—	—	—	—	——	—
21	899	732	6	—	Asahisha.	1.310
22	806	184	11	1,387	——	—
23	518	291	15	—	Tôyôken.	1.350
24	335	381	10	—	Morimachiseishijô.	1.340
25	835	372	16	637	Nittôsha.	1.350
26	571	192	12	—	Ozawagumi.	1.285
27	—	—	—	—	——	—
28	968	380	6	—	Kisenumagumi.	1.245
29	266	311	11	—	——	—
30	523	333	3	383	Asahikwan.	1.275
31	467	244	30	1.320	Hakuhôsha.	1.220
Total	1,724	10.464	347	12.377	——	—

1 *yen* want environ fr. 2.50. 1 Picul = 60 kilg. environ.

1. subdivision d'Esisais.
2. subdivisisn d'Enseignement.

3. Section d' administration.
4. Section de rapport.

Quant à present, il n'ya pas de division de tirage à la station de Kyoto et on fait les travaux de tirage dans la division de sériciculture.

7. Enseignement de la Station.

Il y a deux cours : le principal et l'accessoire. Le cours principal dure trois ans et l'accessoire six mois.

8. Nombre des étudients.

1.	2° année du cours principal	16
2.	1° année du cours princpal	21
3.	Cours accessoire	54
4.	Etrangers	7

(à la fin de mai 1907)

9. Nombre des gradués.

Les gradués sont suivants : de 1900 (33° année de Meiji) jusqua l'année 1906 (40° année de Meiji)

1. Cours principal	96
2. Cours accessoire	302
Total	398

10. Rapport.

La Station publie des rapports chaque année plusieurs fois d'après le résultat obtenu.

11. Fonctionnaires

Directeur	G. Matsunaga, Ingénieur agricole.
Expert	S. Ishiwata. expert. chef de la divison de Sériciculture.
„	K. Kawashima. expert, chef de la section du rapport et chef de la subdivision le l'Enseignement.
„	J. Ishikawa. expert chef de la subdivision d'Essais.
„	Y. Tsuji. expert
„	J. Araki. expert surveillant.

„	M. Shimoi expert „
Clerc	J. Arai. clerc, chef de section d'administration.
Expert	R. Hattori. expert.
Clerc	M. Naruse. secrétaire (commis)
Expert	D. Tanabe. expert.
Clerc	Y. Tomonari clerc.
Expert	J. Midzno. expert.
„	J. Watanabe expert.
Lecteur	Y. Kagami maitre de conférences. Directeur d'Ecole d'agri. et forêt de Kyoto.
„	G. Kimura. Expert de la station dágricultura de Kyoto.
„	M. Fukuda. Professeur au Lycèe Supérieure de Kyôto.
	S. Takarabe professeur assistant à l'Université impériale de Kyoto.
	T. Iidzuka. Professeur de Dôshisha.
Docteur	S. Matsuo.

La Station Sericicole Imperiale de Kyoto.

1. Etablissement de la Station.

La Station fut établie en 1899 (32ᵉannée de Meiji) avec le même programme que la station de Tokyo.

2. Situation de la Station.

La Station est située à Kinugasamura, Kadonogori, dans la prefecture de *Kyoto*.

3. Plantation de mûrier.

Pour cultiver le mûrier, on consacre 12.810 tsubo (4.23 hectares)

4. Batiments.

Il y a 30 Batiments couvrant 1.56 1.23 tsubo. (0.52 hectares)

1. Salle d'administration. 2. Salle des Cérémonies et conservatoire d'échantillons et d'instruments de Sériciculture.
3. Laboratoire d'anatomie et d'examen des grains.
4. Laboratoire de phathologie des vers à soie.
5. Laboratoire de chimie et Salle de l'Enseignement.
6. Attelier de l'Enseignement. 7. Laboratoire de chimie pour élève. 8. Six magnaneries pour L'Enseignement et les Experiences. 9. Filature.
10. Etouffage 11. logement.

5. Les travaux de la Station.

1° Enseignement de la sériciculture.
2° Essais et Experiences.
3° Conferences à la campagne.
4° Distribution gratuite des graines des vers à soie.

6. Les Divisions de la Station.

Frois divisions et deux sections, et deux subdivisions dans chaque division.

1. Division de Sériciculture.
   1. subdivision d'Essais.
   2. subdivision d'Enseignement.
2. Division de tirage.